324
172

佛教講演集

加藤咄堂先生著

324-172

佛教講演集

加藤咄堂先生著

東京　森江本店發兌

明治
43. 3. 30
内交

序

言説は敲門の瓦子、文字は標月の指、縷々數千言、曾て他の爲に此の瓦子を投じ今又此の指頭を借りて得入の道程を示さんとす、婆説敢て有識の閲讀を求むるに値せずと雖も解脱城外彷徨の人、若し之れによりて佛法境裡の風光を髣髴し、眞如靈覺の微光をだも看取するあらば此の瓦子と此の指頭と亦無用の贅にはあらじ。

庚戌初春　　咄堂識

凡例

一予他に向て佛教を講説すること二十年、他の之を筆記するものも亦甚だ尠からず、今其の近きものを輯め、加ふるに當時言はんと欲して、言はざりし感想を附して以て本書を成す、一は佛教初入の人の目に觸れて觸發の動機たらんことを望み、他は布教に志す人の目に觸れて傳道の媒たらんことを欲す。

一本書、もと各所の講演筆記を蒐集したるが故に文体一ならずと雖も強て之を統一せんとすれば却て講演當時の感興を減ずるのを思ふて僅に二三を訂正し他は所感を冒頭に加ふるに止めぬ、讀者請ふ之を諒せよ。

一本書輯むる所は悉く佛教門外者に對するの講演にして、主として人生問題に接觸したるものゝみ其の更に高きもの及び政治教育社會等各種の問題に接觸せる教談は暫く之れを續篇に讓る。

咄堂再識

佛教講演集目次

一　戊申詔書と佛教……一

上　帝國發展の方針……一

詔書の科段……五項目……文明の源泉……日本の同化力……儒教……佛教……西洋文明……東西文明の融合……世界と日本……國運の發展と文明……國王の十恩……世界各國との國力比較……國民の自覺

下　國民刻下の要務……二一

上下一心……人心の根底……良知良能……佛性……歷代の御仁德……報恩……同類意識……國家……信義の力……言行忠信表裏相應……あるべきやうは……勤儉……自彊不息……大國民の氣風……精進……神子上典膳の逸話

二　拜詔餘言……三八

肉體の力と精神の力……人生と信……信は義の本……武士道と信義……表裏……信仰……治產と服業……二宮翁の訓言……佛源禪師……井戸龜右衛門……荒怠相誡

三 二宮尊徳翁と佛教……五三
智目行足……大乘佛教……世法と佛法……知恩報德……二宮翁の幼時……其の行實……勤勞……翁と觀書經……翁と佛教……因果と運……報德訓……至誠……勤と儉と讓……少欲……報德主義の要領

四 人生の戰爭……七一
生存競爭……生活の戰爭……宗教と戰爭……心內の戰爭……高塚五郎兵衞……佛に預く……無常の大敵……宗教の慰安

五 生活難と佛教……八四
自殺統計……生活困難と年齡……世界の人々と食物……中年者と宗教……汽車の譬喩……白紙の喩……修養……缺陷と圓滿

六 通佛教の原理……一〇〇
一 佛教の三方面……一〇〇
宗教とは何ぞ……心の有無……佛教の三方面……信解行証
二 佛教の教理……一〇四
諸行無常……極微所成……宇宙萬象……身心一如……八識……空……四料簡……一塵と法界……萬物皆心あり……六大週遍……入我我入……事理圓融……教理の一貫……佛陀と衆生……各宗教理の分類
三 佛教の實踐……一一九
自力と他力……悉有佛性……薰習……戒定慧……三師三聚淨戒……三大原理と眞如……三寶……四弘誓願……善惡……六度……自己を學ぶ……信仰

七 解脫の趣味……一三三
心の二面……理想と現實……煩悶……宗教の精髓……大石良雄……南無解脫……交通感應……生死……理想の實現……社會の進步

八 靈魂問題……一四九
靈魂とは何ぞ……五蘊……無靈魂說……聯想……觀念の競爭……睡眠……夢……幽靈……幻覺……狐憑……引例……感應……催眠術……識體……業力所成……因果相續

九 佛教と衛生……一七三
五明……長壽……二種の衛生……病を得る十因……横死の九因……食物……

運動……睡眠……身の衛生……心の衛生……心神修養法……衛生の心得……精神的長壽

十　婦人講話……一九一

二種の婦人觀……結婚の歴史……男女の比較……同情……共同生活……四攝法……家庭と社會……家政と婦人……大亂と婦人

十一　將校婦人講話……二〇八

勇と愛……暴勇と眞勇……愛を以て建つ……君臣の愛……女性の愛と勇……眞愛と妄愛

十二　始終必要講話……二一四

本書の著者……略系……本書の大要……科段……三諦……一念三千……三惑……引例……三觀三智……煩惱と涅槃……始終心要……佛教の眞理

佛教講演集目次終

佛教講演集

加藤咄堂述

(一) 戊申詔書と佛教

上　帝國發展の方針

戊申詔書に就て私の考を述べよといふことでありますが、此の御詔書は三百餘字から成り立つて居りまして一々が皆な深い意味を持つて居るのでありますから精しく御話いたすには非常に長いものとなりますで、今は全體の中から眼目とも見るべき文字だけに就て愚考を述べて見ようと思ふのであります。

〔一〕此の詔書は大體三段に分れて居りまして初め即ち第一段は文明進歩の大勢と我が日本が列國と共に其の慶に頼らんとする帝國の世界に於ける地位を示されたもので、第二段に於て帝國發展の方針と國民刻下の要

〔一〕戊申詔書の全文は三段によりて成つて、第一段は佛教で云ふ「序分」で第二段は「正宗分」でこゝには帝國の發展方針

國民對下の要務を示された御詔書の大主旨第三段は「肇國以來帝國の發展と國民の活動とによりて國史の成跡と國體の精華とを遺憾なく發揮すべき數へられたのであるから御詔世を誡め此三段を缺れてはならぬ、殊に佛教の教理と並行させて說明するには第二段を研究するに吾人は第二段を主要とする、第二段要目を國裏すれば

帝國發展ノ方針
- 日進ノ大勢ニ伴ヒ（世界的）
- 國運ノ發展ニ須ツ（國家的）

國民對下ノ要務
- 上下心ヲ一ニス（國民的）
- 惟信惟義（精神的）
- 自彊息マズ（實行的）

務とを開示し、第三段に於て祖宗の遺訓と國史の成跡とは我が國民が之れを爲すべき責あるを示されたものと見奉ることが出來る、これから御話申さうとするのは第二段即ち本御詔書の眼目とも申すべき所に就て第一段第二段の御趣意をも應用して說明しようと思ふのであります。

此の第二段の初めは我が日本が世界的に爲すべきことを示されて

日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセントスル

と仰せられ、偖それを爲るには國家的に

固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス

と宣ひ、政府並に國民の心得としては

宜ク上下心ヲ一ニシ

と云はれ國民個人としての覺悟をしては

忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ

其の精神的根底は

惟レ信惟レ義

風俗上は

醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ

と仰せられ更に其の實行法としては

自彊息マザルベシ

とある、これだけの一々に就ても仔細に御話し申すと長くなりますから、此の中から左の五項目を出して御話をしようと思ふのです、即ち第一に世界的には日進の大勢に伴ひといふこと、第二に國家的に國運の發展に須つ第三に治者と被治者との關係として上下心を一にしさて第四には個人の精神的方面として惟れ信惟れ義、第五には實行的方面として自彊息まざるべしといふ風に分けて御話するので、先づ第一の日進の大勢に伴ふといふことから略說いたしませう。

此の日進の大勢といふことを話すに就ては劈頭に仰せ出されてある「人文日ニ就リ月ニ將ミ」とある御語から說明せねばならぬ、人文とあるのは天文、地文、人文と寫して天地人三才の中最も靈なる人の天の下、地の上

〔二〕世界の文明は皆な大河の流域から出たので、最も古いのが亞弗利加なるナイル河畔の埃及文明、西暦紀元前二千七百年代にハミチツク人種に成り、同紀元前二千三百年セミチツク人種がユーフレテース河畔にバビロン府を開き其後アツシリヤ人がテイグリス河畔にアツシリヤ帝國を建てたので相互興廢があつたが共に西方亞細亞のメソポタミヤ平原に文明の光を放つた、この兩源の文明が歐羅巴の希臘に入り、希臘亡びて羅馬榮え、羅馬亡びて日耳曼民族起り伊太利、佛蘭西も亦建つて西洋文明となり、海を越えて英吉利の文明となり、英吉利の文明は亞米利加に入りて西洋文明を爲した、印度文明は今より約四千年前バミール高原に居つたアーリヤ人種の一部が南下してガンヂス、インダス兩河の流域に文明の花を開いたので古く波羅門教あり吠陀の經典ありマヌの法典もあつた、支那文明は漢人種の文明で幾難のやうな名君のあつたことは人の知る所だ、此の二源の文明は支那に於て混和して東して朝鮮に渡り、朝鮮より日本へ來たので日本は東西文明の融合地である、

〔三〕或人の作に、「朝日にあくる花のみよしのみしならば唐土人も高麗人も大和心になりぬべし」とあるも同意です。

に作りなせる文明のことで、文明の始源は人類が相倚つて協同生活をした昔から胚胎し漸次其萌芽を發して來たので五千年來葉を出し枝を交へ今日では既に燦爛たる花を開くに至つたと申しても差支はないので、これから先きは其の實を結ばしめねばならぬのではなからうかと思ひます。

〔二〕凡そ世界文明の源は何誰も御話しになるやうに殆んど同時代即ち今から五六千年前に四個所に煥發したので、一はナイル河畔の埃及文明、二はユーフレテース、テイグリス兩河の流域たるメソポタミヤ平原即ちバビロン、アツシリヤの文明、三は恒河印度河の流域たる印度文明、四は黄河揚子江畔の支那文明と申すので此外にも南亞米利加のメキシコの文明も殆んど同時代であらうといふのですが、これは世界の大勢に關係する所が少いから略するとして、以上四個所の文明の中最初の二つは先づ埃及文明がフイニケア人等の媒介でアツシリヤ文明と接觸し、流れて希臘に入りて西洋文明の源を成し希臘の文明は羅馬に入つて更らに歐羅巴に汎濫し、海を渡つて亞米利加に入つたので、通常云ふ所の西洋文明といふのはこれで、後の二つたる印度文明と支那文明は印度文明の精華たる佛教が支那に入るに當つて相接觸し、之れが東の方朝鮮を經て我が日本に入つたので所謂東洋文明の潮流であります。日本は約一千七八百年の昔に先づ支那の文明を受け、それから後に印度の文明を受けたのですが、此の日本といふ國は妙な國で外國の文明を受けたからとて、それをそのまゝに摸倣するといふではなく、能くこれを消化して我が物とするといふ一種の特色を持つて〔三〕居つて彼の光格天皇が『敷島のやまと錦に織りてこそ唐紅も色にはへあれ』と仰せられた如く、支那から來たものも印度から來たものも皆なこれを我日本のものにしてしまうので、若しそれが我國風に合はぬものであるならば總て之を排斥してしまうといふ狀態であります。

然らば我が國風とは何ういふ國であるかと云へば云ふまでもなく君民同祖で一國は一家の如く忠と孝とは一つであると云ふこと、これが、やが

て上には萬世一系の皇室を戴き、下は億兆心を一にして行くことの出來る下で、此の皇室に對する忠孝の念と云ふものは能く我が國體の精華を爲して之れに背反するものは國内に住まわることを許さないと云ふ風で、支那文明の輸入に對しても確かに其の痕跡が見えるのであります。支那文明の精華たる儒教も日本に入つても唯だ支那流其儘に移植せずして之れを日本の國風によつて淘冶して都合のよい方は採り都合の惡い方は棄てゝ顧みぬといふ風で、忠信孝悌の教は直に國民道德と一致するので、之れを用いたが、支那の唐虞三代革命の風は之れを避けて居る其の事は菅原道實公が『凡そ神國一世無窮の玄妙は敢て窺ひ知るべからず、漢土三代周家の聖經を學ぶと雖も革命の國風深く思慮を加ふべきなり』と云はれたかといへば中古武門制度に於て將軍までは全く支那流の革命で惡い將軍があれば討て之れに代るといふ面影があつて源氏の權は北條氏に移り、さて足利氏となり、織田となり豐臣となり德川となつたのであります、これまでは全く支那革命の流だが、上、皇室には此の風を應用して居ない、否な應用しられない、といふのが日本の特色で、此武門制度は殆んど一種の責任內閣の感があつて累を皇室に及ぼすことが少なかつたことも見ることが出來ます。

〔四〕德川三代將軍家光も遺訓して德川氏のことは一家の私事の爲、一家の私事の爲めに國のことを忘れてはならぬといひ、木戸孝允では義公以來勤王を主義とし其爲めには宗家たる德川をも忘るゝといふ心掛であつたと傳へるこれが我が國風の美所長所である

佛教が日本に入りましたのも亦其通りで印度流支那流をそのまゝでなく推古天皇の朝、聖德太子が全く日本流にせられ國家爲本の經營を贊助して毫も國體と抵觸することがない。それに日本人は何事も簡明直截主義で、支那の文字を輸入しても、これを其儘日本に摸倣するではなく、佶倔贅牙なる漢字の一片一畫を取つて片假名を造り、其の母音父音子音の組織は印度悉曇の語法を用ゐるといふやうに長を採りて短を補ひ漢字の卵體より更に變化して平假名を造り僅に四十七字や五十字さへ知れば何んでも書けるといふ大發明を爲した如く、本家の支那にも無い便利なことを實行して居る如く、精神的の方面にも頗る哲學的のものは行はれずして簡明直截の禪や念佛や題目の教が勢力を得、隨分教理としてむ

ずかしい天台や眞言でも、國民一般の信仰としては祈禱といふ現世的なことによつて行はれて居るといふのは、其の一例と見ることが出來る。

兎に角日本は約二千年來、東洋文明を咀嚼して特殊の花を開いたので、七重八重咲く花の匂ふが如く今盛りなりける奈良朝の文明、大宮人は櫻かざして今日も暮しつる平安朝の文明は日本文明の春、鎌倉時代となつて武門全盛の時代は夏、南北朝後世はかりこもの亂れに亂れて文明の花は萎み開化の實も落た足利時代は秋、德川三百年、外國との交通をやめて鎖國三百年、太平の夢を貪つたのは冬――然り冬籠と申しませう、此の四回荒涼なる冬の中に一陽來復の氣運は熟して西洋文明の輸入となりました。

一方埃及並にアッシリヤの文明は西流して希臘に入り、文質赫灼たる希臘文明を成し、學術の進歩は實に甚しいものであつたが、希臘の力衰へて文明の櫂は其の西たる羅馬に移り、猶太に芽を出したる基督敎、羅馬に入りて羅馬大帝國は亡びたれど、基督敎のみ獨り力を有し、此の基督敎の爲めに折角希臘羅馬で培はれた西洋文明も一頓挫を來して、凡ての學術は宗敎の奴隷となつて世は所謂暗黑の時代となつたが、宗敎改革之れが先登を爲して暗黑の夢は破られ、次で文藝の復興となり、科學の進歩となりて近世文明の精華を發揮し、我が日本が精神的にこそ進歩したれ、物質的智識的に於ては風力や水力を利用することを知つて居つただけで未だ蒸汽力を使ふことは知らなかつたのに西洋に於ては汽車あり汽船あり盛んに蒸汽力を使つて居るといふのであるから初めて西洋文明に遇つた時には日本は大に驚いて一意之れに摸倣せんことを計り『智識ヲ世界ニ求メ』との御聖旨を奉じ西洋の智識を求めると共に何事をも之れを眞似ることを專らとし、一も西洋二も西洋、三も四も西洋で、西洋のことなれば何でもよいと考へて上等といふ事と舶來といふ語とは殆んど同一の意義を持つように思はれた、されど少しく眼を開いて見ると西洋のものでも必らずしもよいとは云はれぬ、これを日本のものとして使ふ上には餘程注意せねばならぬことがある殊に精神的方面になると西洋の

【五】明治元年三月十四日の御誓文

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

一、上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フベシ

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基ク

一、知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

へシ
我國未曾有ノ變革ヲ爲シトシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンゼ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心戮力セヨ
【一八】前年十二月即ち明治十五年の頃に幼學綱要なる頒賜の御勅語があるが以て道徳的方面の國民は有のものでなければならぬことを明にせられた、其冒頭にいふ
維ふに道徳は教育の主本我朝支那ノ專ラ崇尚スル所、歐米各國亦然リトセドモ修身ノ學アリト雖之ヲ本朝ニ採用スルニ當リ未ダ其要ヲ得ズ、今學科多端本末ヲ紊リ力ヲ費スモ效ノ鮮カラズ、半ハ學ビ半ハ忘ル、少就學ノ際ニ當リ忠孝仁義ヲ先ニシ本トシ仁義ヲ先ニスベシ

道徳と日本の道徳とは全く其の趣が違ふ、此の趣の異ふものを無暗に輸入するといふとは國家存立の上に影響することが大であるので、
【六】明治廿二三年の頃から自覺の時代に入つて教育の御勅語には『克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ世々厥ノ美ヲ濟セルハ之レ我國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス』と仰せられて國民道徳を皷吹せられ、終に東西文明調和の天職が我が日本にあるのであるといふ議論となつて日本主義を中心として兩洋の文明を調和して第二の新文明を造るの必要をいひ、我が國に都合のよいものは之れを他に採り、都合の悪いものは用ゐないといふ採長棄短の説が行はれた、否な行はれたばかりじやない、我が國民は事實の上に之れを行ふて、會社や銀行の帳面をつけるには日本在來の大福帳や當座帳では具合が悪いからとて西洋流の簿記を使ふが、其計算には珠算の迅きを貴んで之れを使ふて居るし、昔流の陣笠よりは西洋流の帽子がよいからとて使ひ、仕事をするには洋服が便利だからとて之れによるが、坐居には和服がよいとて之れを使ふ、即ち兩洋の便なのは

採つて居るのである、さて其兩洋文明の長所といへば西の方は物質的智識的で、東の方は精神的道徳的である、ソコデ精神は日本流、使ふ器械は西洋流といふのが最も適當な調和法である、其の尤も大きな例として話せるのは日露の戰爭で、我が擧爾たる日本が尨大なる露西亞と戰ふて連捷したのは何であるかといへば雖れも一齊にそは日本魂なりといふまことにさもあるべし、されど日本流のみで勝つことが出來るであらうか、成る程其の精神は日本的であらうが、其の使ふ武器は重籐の弓でもなければ大身の鎗でもない、皆な西洋文明の産物たる機關砲なり速射砲である、即ち日露の戰役に日本が大勝利を得たは能く西洋文明の利器を用ゐるの
に日本魂を持てしたからではあるまいか、
文明といふのは唯だ物質的智識的に開けるだけではない、これと共に精神的道徳的にも進まねばならぬ、文明とは智徳の圓滿で、社會の動力たる智識と靜力たる道徳とが完全圓滿に調和せねばならぬ、東西兩洋の文明は各々其の一面を代表し、今や西し西し來りたる西洋文明と東し東し來

りたる東洋文明とは我が日本に於て渾然として圓融せらるべき氣運に屬して居るのではあるまいか、上下の文明は各國特有のものであつた、中下の文明は東洋は東洋、西洋は西洋と各別に發達したのであつた。併し近代文明は兩洋が接觸し各々其の長所短所を理會し、新しき世界的文明の光を放つべき時ではなからうか。而して此新らしき世界的文明の光を放つべきの絕好地位は我が日本の擔にする所ではあるまいか。日本人は此覺悟を以て進まねばならぬが、外國も亦此覺悟を以て立つて苟くも長ずる所あれば洋の東西を問はず、之れを學ばんとして居るので、日本が露西亞に勝つたといふ評判が立つと共に、日本研究の聲は西洋諸國に盛んになつて、英吉利に於ては遙々我が國から學者を招いて其の敎育制度の講義を聽かんとし前文部大臣の菊地大麓氏が行かれ、亞米利加合衆國に於ても醫學博士の高木兼寬氏を招いで軍事衛生の講演を聽いたことはある。『東西相倚リ彼此相濟シ』で、東西兩洋一家何人も御存じのことである。の如く彼此內外の差別なく、皆な相競ふて文明の先導者たらんとし宇內

各國の一擧一動は直に我が日本に影響し、我が日本の一擧一動は直に宇內各國に影響すること【七】華嚴の事々無礙の狀態で一塵法界を盡くし、一法界は一塵に收る若し夫れ其の福利を共にして居る有樣をいへば、亞米利加の麥粉は其の價格の低廉なるが故に我が國の津々浦々の饅頭の皮に用ゐられ、日本製のマッチは其の本元たる瑞典よりも精良にして廉價なるが故に歐米に輸出せられ、我が農家の肥料には滿州の豆粕來り、濠斯太利亞の骨粉來るといふ風で、東西各國が互に脈絡貫通して居ることは殆んど豫想の外に出るのであるから皆な互に我こそ世界文明の原動者たらんとして競ふて居るさまは日進月步の文明の有樣で解るのであります今ま我が國が此の日進の大勢に伴ふて文明の惠澤を共にせんとするには非常なる奮發と偉大なる努力とを要するので、其の國家としての覺悟は國運の發展を計るの外はありません。御詔書に『日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスルハ固ヨリ內國運ノ發展ニ須ッ』と仰せられる通り國運の發展といふことは文明の惠澤を共にする必須條件で、古

【七】華嚴の事々無礙の原理を既く參照せられたし、尙ほ社會の共同生活の節に明かなり

〔八〕佛教の中で國王の德を讃歎した文句は尤も多い、其中二三を擧げると、華嚴經に國に君王ありて一切安きことを得、是の故に王は一切衆生安樂の本とす　尼乾子經に王は民の父母なり能く法に依りて衆生を攝護し安樂ならしむ　心地觀經には世間は王を以て根本と爲す、一切の人民の所依と爲すこと猶ほ世間の諸舍宅の柱を以て根本として成立するが如し

來何れの國といへども、文明の盛な時は國運發展の時で國運發展せずして文明の見るべきものがある時はない、希臘の文明は外、波斯に勝ち、內、亞典の文運大に興つた時にあり、印度の文明は摩竭陀王國の全盛期たる阿育王の時代と大月氏國全盛の迦膩色迦王の時代に煥發し、支那の文明は唐代國威八紘に振つた時に現はれたので、國家なくして文明のあるべき例はない。殊に今日の社會は國家組織の下に文明を發達せしめ、東西相倚り彼此相濟して福利を共にすべきであるから國運の發展に須たねばならぬのは云ふまでもない。國家といふのは治者と被治者との法治關係になつて一定の土地の上に安立して居るので、心地觀經には國王の十德を算し、〔八〕一に能照とて智慧の眼を以て世間を照すが故にとあり、二に莊嚴とて大福智を以て國を莊嚴するが故にとあり、三に與樂とて大安を以て人民に與ふるが故に、四に伏怨とて一切の怨敵を伏するが故に、五に離怖とて能く難を卻け恐怖を離るゝが故に、六に任賢とて諸の賢人を集めて國庫を任し、七に法本とて人民をして國土に安住せしめ、八に持世とて法を以て世間を保ち、九に業主とて諸の業は國王に屬し、十に人主とて一切人民は王を主とするが故にとある、これ皆な國運の發展を計り、文明の惠澤を共にするに必要なことである。今日の社會は國家なくしては人道の發展も出來ない、無國家主義といふ如きは痴人の夢想で現實に暗い語で現代は國家といふ範疇を離れては文明の惠澤を受けることは出來ません。彼の猶太民族が歐米思想の中心たる基督教を生み出した民でありながら今日諸方に漂泊し何の文明をも示さゞるは國家といふものが無いからであります、偶ま猶太人にして文明の惠澤を享受して居るものがあれば、それは何れかの國家に隷屬して居るからであります。

右の都合であるから日進の大勢に伴ひ文明の惠澤を共にせんとするには是非國運の發展に須たねばならぬ。我が日本は抑も幾許の發展を成したでありませう。維新後四十餘年、實に長足の進歩をしたので、文明の先進たる歐米をして殆んど舌を卷かしめたのです。維新當時は僅に東洋の一獨立國と認められただけで、我が國人の歐米に遊ぶものは支那人や朝鮮

人と同様に見られたのでありますが、それが明治二十七八年の役で支那に打ち勝つて初めて東洋の一強國で、支那や朝鮮とは國情が違ふといふことが認められ、維新以來の一大問題であつた條約改正も出來て、治外法權は撤去せられ、內地雜居は行はれて外國人も何の不安なく我が司法權の下に服するやうになり國運は一段の發展を遂げたのです。

東洋中の強國としてのみ認識せられた我日本も日露戰爭の結果は世界の強國として認められ東亞問題に關しては容喙の權を得、世界列國も東亞問題に關しては日本の協贊を得ねば何にも出來ないといふ地位まで上つた、これ實に國運の發展であります。日本は更に我と脣齒輔車の關係ある朝鮮を保護國として國權の下に置き、內獨立の鞏固と、外國威の顯揚とを計つた、併し我が帝國は決して侵略の主義を取るではない、又彼の一派の人々の言ふやうに徒らに我が統治權の普及を計る帝國主義でもない、我が大日本帝國は人道の扶植、文明の普及を理想とするので、併呑とか侵略といふのでなく、國交を修め友義を惇うし列國と與に永く其の慶

賴らんことを期するのであるから吾等は我が國運の發展は文明の普及、人道の扶植で、人類理想の實現に貢獻するものであると信ずるのである。

東し東し來りたる東洋文明の精華を西、亞米利加幷びに歐羅巴に傳へ、西し西し來りたる西洋文明を東、韓國、支那に及ぼすといふのは、地理上我帝國の爲すべき職責であると思ふ。

我が帝國の職責は此の如くに重いが、我が日本は果して今日世界の強國と肩を並べることが出來るであらうか。陸軍は常備二十萬、戰時百二十萬、海軍は新式戰艦一三、裝甲巡洋艦一三、巡洋艦一九、驅逐艦四八、新式水雷艇四七、といふのですが、露西亞は陸軍常備百萬、戰時四百六十萬、海軍は新式戰艦四〇、裝甲巡洋一四、英吉利は陸軍常備二十九萬、戰時七十五萬、海軍は新式戰艦四三、裝甲巡洋三五、獨逸は陸軍常備六十萬、戰時三百萬、海軍は新式戰艦二五、裝甲巡洋七、佛蘭西は陸軍常備五十二萬、戰時二百五十萬、海軍は新式戰艦二〇、裝甲巡洋一六、亞米利加合衆國は常備六萬五千在鄉兵十一萬、新式戰艦二二、裝甲巡洋一五といふ風で、國の事情や面積の都合地勢

【九】或る人が面白い統計をやられた一

によつて或は陸軍に重を置き、或は海軍に重を置くといふことになつて居るが、未だ我が國の海陸軍を以て諸強國に劣らぬとは申すわけには行かぬ。餘程贔負目に見てやつと對等といひ得る位です軍備は漸く對等と見て、さて金の力はどうか、これは御話にならぬ。

少し古い統計ですが、各國の貯金高といふものを見ると、亞米利加は六十一億二千萬圓、獨逸は四十五億四千萬圓、英吉利は十九億三千萬圓、墺太利は十七億五千萬圓、佛蘭西は十六億九千萬圓、伊太利は九億六千萬圓、露西亞は八億九千萬圓だが、我が日本は九千三百萬圓しかない、これを人口割にすると獨逸は八十九圓、亞米利加が七十五圓、墺太利が六十七圓、英吉利と佛蘭西とが四十六圓で、露西亞は六圓だが、我が日本は二圓に足らぬことゝなる。現代の文明は金力の文明だ。我日本が金力に於て遠く及ばぬものあるは慨はしいことではあるまいか。

貯蓄の力が薄弱であるばかりでなく、國家としての借金も亦頗る少くないので、【九】本年四月末に於ける國債總額は二十三億五千萬圓、其の內、外國で

圓紙幣を百枚積むと二萬六千尺あるといふ、スルト富士山が一萬二千尺であるから借金の山は富士山の二倍以上になる

【十】この財産統計には異算があるが最近の統計によると世界の財産は英吉利が一千百八十億萬圓、米合衆國が一千六百三十五億萬圓、佛蘭西が八百七十億萬圓、獨逸が八百億萬圓、而して日本は百十七億萬圓です

發行した政府の外債現在額十一億六千五百七十萬圓で此の外債に對する一個年の利子が五千百八十九萬圓といふのであるから財力に於て遠く外國に及ばぬは云ふまでもなく、外國貿易に於ても英國の十分の一位しか出來ないといふのであるから、商業上に於ても第二流第三流以下に位して居るのである、或る人が日本の財力を計算して【十】日本の土地其他を金に見積つて之れを一人前に割り附けると百二十三圓に當り、英國の財力――殖民地や屬國を除き――を一人前に當てると千十三圓に當るといはれた程で、此點では比肩の出來ないのは申すまでもない。

さて國內文明の程度を知る交通機關はといふと、英國は一萬七千哩、露西亞が三萬五千哩、佛國が三萬哩、獨逸が三萬五千哩、墺太利(匈牙利を除き)一萬三千哩、伊太利が八千哩といふのに日本は五千哩それは面積にもよるが日本と英吉利本國とは日本の方が大きいのであるから未だ其の三分の一に及ばぬのは交通の便充分なりとはいふことが出來ない。さて教育はといふと、日本は帝國大學僅かに二なるに對して獨逸は大學二十一、英

吉利は一〇、佛蘭西は四五、伊太利は二十一、露西亞は八といふのであるから多いとは云へぬ、いや其代りには日本は獨逸に於ては多く見ざる各種の高等學校があるといふかも知れぬが、高等學校となると英吉利が五一〇、露西亞が六〇といふ風であるから、之とても勝れては居らぬ。

腕力即ち軍備だけは漸く世界強國と肩を並べられるに至つたが、財力や智力や商業の力がこれに伴はなかつたならば、國運の發展と申すことは出來ぬ。勿論戰後日尚ほ淺く、施政益々更張を要する時代であるから、今日を以て完全を期することが出來ぬが、內治外交共に國運の發展に努力すべきと共に國民も亦其の心になりて自ら其の任に當るの覺悟がなくてはならぬ。由來日本人は自己の頭上のことを他の頭上に持て行く惡い癖があるので政治のことは全く政治屋に任じ、衛生のことは衛生家に任じ、教育のことは教育家に任じ、自ら自己の頭上の問題をも他に任せて、只管目前の樂を得ようとするものであるから日本の製作品は粗製濫造で歐米の市場に其の價値を失ひ、折角戰爭によりて贏ち得たる國民の名譽を

も商業界に於いて失墜することがないでもない、これらのことにも注意して一個の作品も亦た直ちに我が國運の發展に影響するものであるといふことを自覺して朝野協力國運の發展を計らねばならぬ、それが即ち上下宜しく心を一にするの必要なる所です。

下　國民刻下の要務

前席には帝國發展の方針と題して御詔書の前半を御話しいたしました、さて其の國運の發展を計るの第一策はどうするかといふと、それには宜く上下心を一にせよと仰せられたのが第一です上下とも明かでありますといふ上は畏れ多くも　天皇陛下とあるは我々五千二百萬の同胞であるが、これが皆な心を一にして上、天皇陛下の大御心は天に燦く一輪の月、これを五千萬同胞の心の水に移して月や我、我や月かと分かぬまで圓融一如にして行くのが、上下一心の意義で、儒典に所謂成有一德の實現、佛經に所謂無二亦無三の心です。

【十一】人間の心は其の面の如しで、皆な同じ御方はない、或は遺傳とか境遇とか、早い、遅いの四種性を示すことが出來る早くて強いのか多血質で怒り易いのか、早いか治るのも早いか藥籠流のこともあつてさまざまでであるがそれは重習人、早くて強いのが神經質で、遅くて弱いのが粘液質でカスノロさい、馬鹿に近い方に近質の人、遅くて強いのが膽汁質で、腹いのは、併し人間の氣質はなは此四つだけではない面のいのが肌、遅くて弱いのが藥漿質で、腹いのが多血質で怒り易いのか治るのも早いか藥籠流のこともあつてさまざまでであるがそれは重習人、早くて強いのが神經質で、遅くて弱いのが膽汁質で、腹いのは、併し人間の氣質はなは此四つだけではない面のいのが肌、遅くて弱いのが藥漿質で、腹いのが多血質で怒り易いのか治るのも早いか藥籠流のこともあつてさまざまでであるがそれは重習

【十一】人間の心は其の面の如しで、皆な同じ御方はない、或は遺傳とか境遇とかで、氣の早い人もあれば遅い人もあり、心の強い人もあり、心の弱い人もあれば弱い人もあり、情に暖い人もあれば冷やかな人もあつてさまざまでであるがそれは重習の力で其の本源に遡れば皆な一つの所がある、孟子が『人皆な忍びざるの心あり』とて『惻隱の心なきものは人にあらざるなり、辭讓の心なきものは人にあらざるなり、是非の心なきものは人にあらざるなり、惻隱の心は仁の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり』とて人心には仁義禮智の四端ありといひ、『人の學ばざる所にして能くするものは良能なり、慮らずして知るものは良智なり』といひて良智良能を以て心の主人とし、佛教に於ては父母所生身即證大覺位といひ、一切衆生悉有佛性といひ、永嘉大師が、無明實性即佛性、幻化空身即法身と喝破した其の本源を探れば我他彼此ともに同じ所がある、人々個々差別の心は皆な我執の爲めに區劃せられて居つて一にならうとてなれるものでない、一つになる

【十二】晉やが今日生活して行くのは皆な晉やより前に生れた人即ち祖先がいろ〳〵な發明をしてくれた御陰であるから其の報恩さいふことから晉やの義務の一面で又、孝へるとか晉やがうやつて生活して居られるのは共同生活の御陰によるのであるから人に對せれば慈悲の念を以て人に對せねばならぬ、此の事は「一趣味ある生活」の方で話しますから御參照下さい

【十三】歷代の御製は大御心の爭ひなさを示して居ります、仁德天皇の高き塔に登りて見れば烟立つ民の竈は賑にけり

後鳥羽天皇の夜を寒みれやのふすまのさゆるにも所は何かといへば此の本源清淨の心でなければならぬ。此の本源清淨の心即ち佛性であります。

上下心を一にするには佛性の顯現に待たねばならぬ、佛性の顯現とは何ういふものであるか【十二】これを孝順心慈悲心の二つとする、孝順心とは報恩の心慈悲心とは利生の念で、報恩と利生とは實に佛の御心であります。此の御詔書の中に『祖宗ノ威德ヲ對揚センコトヲ庶幾フ』と仰せられたのは、言ふまでもなく、陛下御報恩の御心で、惓々と刻下の要務を諭し下されたのは利生の御心と見奉ることが出來る。

申すも畏きは歷代の皇室が此の心を以て下を憐みたまひ、高き屋に民の竈の烟なきを嘆きたまひし昔より【十三】近く、今上の大御心に至るまで、皆な利生の心、慈悲の念を以て國運の發展を計らせられたので、我が日本は二千有餘年の其間西洋諸國の如き皇室と人民との爭ひとも見るべきものは一つもなく、或る機臣や執政者の爲めに人民が苦痛を受けることがあれば、それの恢復は何時も皇室の御力により御名によるといふのは他國

わらやの風を思ひこそすれ
後醍醐天皇の御詠
世治り民安かれと祈るこそわが身につきぬ思ひなりけり

に於ては其の例を見ることの出來ないことです。北條氏の跋扈を服したは勤王の名であり、皇室の御力であつたのであり、其後足利氏の末亂世に當りて諸國に英雄雲の如く起つたが太平を計らんとするには必らず皇室の御力を借らなければならなかつたのではないか。徳川三百年の太平は徳川家康や家光が假令名義だけでも皇室を大切にしたによつて維持せられ、其の弊政を頗覆せられたのは矢張勤王の名で、日本社會に不羈衡があれば何時も勤王の聲によつて矯められ、一種の國家社會主義のやうなものが行はれて居つたと見るのは決して獨斷な見ではない、國史の成敗が之れを示して居る。

更に日本文明の輸入者を御覽なさい。何時も皇室の御力で、初て支那文明の精華たる儒教の輸入に力を盡されたのは應神天皇の皇子稚郎子であり、印度文明の精華たる佛教の輸入に力を盡されたのは用明天皇の皇子聖徳太子であり、此の聖徳太子の精神的改革に次で孝徳天皇の大化の革新となつて政治上にも大に東洋文明の極粹が輸入せられ爾來奈良平安

【十四】今上天皇陛下の御詠は皆な以て臣民愛憫の御聖徳のほかはない
此歌は權勢も忘れたり民安かれと思ふばかりに冬深きれやのふすまを寒れても思ふはしづが夜寒なりけり
又皇后陛下の
あやにしきさりかされても思ふかな
郷さおほほん胸もなき身を
哉ぞは何人も知る所

兩朝の文明となり、今日、西洋文明の輸入も調和も亦皆な　今上聖明の徳澤で、廣く會議を興し萬機公論に決すべしと仰せられ舊來の陋習を破り天地の公道に基くべしとのたまひ、天地の公道を目的として上下心を一にし盛んに經綸を行ふべしとのたまひ、天地の公道を目的として上下心を一憲法發布の詔には『朕國家の隆盛と臣民の慶福とを以て中心の欣榮とし』と仰せられてある、歴代の皇室幷に【十四】今上陛下が利生報恩の大御心此の如く、吾等が祖先も亦心を一にして世々厥の美を濟して鼓爾たる東洋の一孤島を以て獨立の體面を維持し來たのであるから吾等も亦此心を以て國運の發展を計らねばならぬ。

夫れ社會は時間的にも空間的にも共同生活で、時間的にいへば吾等の今日あるは皆な吾等より以前に生れた人々の恩澤を受けて居るので文明の惠澤は皆なこれ祖先苦心の跡であり、空間的にいへば持ちつ持たれつして出來て居るので一物の些といへども、社會共同の賜でないのはない。されば時間的には其恩澤に報じ報恩空間的には利生の實を擧ぐるのが

社會の一員としての責務であつて、殊に金甌無缺の帝國臣民として忘れてならぬことであります。人々其の職は異り、執る所の業は同じくないのであるが、此の心を失はずんば僅か一錢二錢の商ひをして居つてもそれをして直に國運發展の本たらしむることが出來る、今日只今より日本の敎育を獨逸に負けないやうにしようといふても、それは出來ない。今日只今より日本の商業を英吉利に優るやうにしようとしたとてそれはならぬ。しかし此の心さへあれば、何時かは歐米諸國に負けないやうに發展せしむることが出來る、而して此の心は今日只今からでも起せるのである。報恩心とか利生心とかいふと古めかしいことのやうに御考になるかも知れぬが、古くとも眞理は何時まで眞理で社會存立の一要件は此の心に外ならぬのです。米國の社會學者のギッヂングスは社會成立の根本原因を以て同類意識にあるといふて人と人との同類である意識に基きて社會といふものは出來るので、それが形に現はれて協同の生活となる、協同の生活といふのは

互に報恩の心や利生の念を以て結合して居るので、其の結合の出來た所に社會の意識といふものがあるのであるから此の心の根底がなければ社會といふものは成立つべきでない。此報恩心や利生の心は人々本來持つて居る先天的のものだが、それが又協同生活の美を濟すに至て必要となつて人類の社會は維持せられ、更に進んで統治機關を有する國家といふものになると、これが一層必要となり、統治者と被統治者即ち君主と人民とが其の心を一にし、人民と人民とも亦其の心を一にして、此に其の國家の目的とか方針とかいふものが定るのであるから、億兆心を一にし、此の一にしたる所に國家といふものが一つの人格として取扱はるゝに至るのである。若し國家の心が二つにも三つにもなつては、一方では進まんとし一方では退かんとして列國競爭の巷に立つことも出來ず又外から も其國家を信用することが出來ない。近世の學者が國家を一の人格として取扱ふのは國家存立の上にかくなければならぬ自然の理法に基くので、此の議論からいふても上下一心の必要なことは明かであります。【十五】御經

の中には面白い喩があつて昔、蛇の首と尾とが相爭ふて、首の方では歩くごとの出來るのは首があるからだといひ、尾の方では尾があるからだといひ、終に尾は大きな木に卷きついて、首に向ひ、尾なくして歩むことが出來るといふなら、サア歩めといふ、首は何うしても歩むことが出來ない、此の首尾相爭ふて居る中に、其の木の上に居つた大きな鳥が好い餌であると飛び降りて食つてしまつたといふてある。上下一心でないと國を誤るは此の一例でも思ひ見ることが出來る、さて其一心とは心の本源、萬人共通の佛性に歸著せねばならぬ、それを詔書の中には『惟信惟義』と仰せられてある、信と義とは心を一にするの根幹、報恩利生を行ふの源泉で、これあつて能く忠實、業に服することも出來、勤儉產を治めることも出來、醇厚俗を成すことも、荒怠相誡めることも出來るのであります。これからは精神上の御話になります。世界的には日進の大勢に伴ひ、國家的には國運の發展を計り、朝野の關係としては上下一心と示され、さて其の上下一心を以て日進の大勢に伴ひ國運の發展を計るの根底はといへば精神的に

〔十六〕信は實にこれ人生の基礎で、若し此の信といふことがなくて其反對の疑のみであつては此世の中に生活することが出來ない、飯を食ふにも、寢はないかと疑ひ、家に住むにも倒れはせぬかと疑つて居つては一日も安心は出來ぬ、ソコデまさか寢はあるまい倒れはすまいといふ信仰から生活して居るのだが、これは假定せられたる信仰で眞の信仰ではない、寢はあるまいと思つてもあることもあり倒れまいと思つても倒れることがある、こんなあやふやな信仰では行かぬ、宇宙の根本、天地の妙評の上に確かりとした信仰を置てこそ人生

惟れ信惟れ義の外はない。これあるによつて忠實業に服することも出來れば勤儉產を治めることも、荒怠相誡むることも出來るものであり、華を去り實に就くの本も亦これに外ならぬといふてよいのです。

〔十六〕信は誠なりで、內、自ら欺かず、外、他を欺かざるの心の狀態で、人と人との間に於ては此の信は實にこれ社交道德の第一義となるので、互に相欺くことがあつては人生の事業といふものは何一つとして出來るものでない。唯だ人と人との間のみでなく、自分の心に問ふて少しも欺かざるのが信であり、誠である。華嚴經には信は道元功德の母とあり、眞に大道體現の根元、一切善根功德の父母といふべきで、彼の西鄕南州が『人を相手とせず天を相手とし、我が誠の足らざるを思ふべし』といふたのも此の信で、他に對し自に對するの外、更に人以上の神とか佛とかいふものに對して少しも恥かしからざる心の根本が信である。これ此の信豈に凡夫のものならんや、涅槃經に佛性を大信心と名くといひ、大信心は即ちこれ佛性なりとあるのもこれで心裏の秘奧より湧出したものに外ならぬ、他力門から

に基礎があるのだ、これを宗教的信仰といふ、此の源から出て人に對し世に處し悉く信なることを得るのである

いへば佛より戴いたのである、佛性の顯現である、上下一心も亦之れによつて出來るのである。併しかういふと何もかも佛教の方へ持て來るやうで我田引水と云はれるかも知れぬが、儒教の方では信といふことを單に僞らざるなり欺かざるなりといふ意義にとつて人と人との間のことにのみいふて居るやうであるが、佛教の方では言行忠信、表裏相應で、啻に人に對して僞らざるのみならず、自心に對して欺かず、我が心をして內外玲瓏たらしむるのであるから、表裏相應せねばならぬ。我が言と行とに表裏なからしむるといふ言行一致だけで信といふものが成り立つのではない、言行一致の本には言心一致で、言と心とを表裏なからしむる必要がある、言と心、言と行、而して行と心、此の三つが一致して、初めて信の意味が充實するのである。

義は宜なりで、行ふて之れを宜しくするの意で、各々其の守るべきを守つて行くので、自ら擅にすることなく、自ら制して己れの分を盡くす所にある、解し易くいへば彼の栂尾の明惠上人が北條泰時を戒められた『あるべきやうわ』の七字を忘れざる所に人々の義は立つ、此の義の本は何にあるかといへば信にある、信なきの義は虛であり皮相である、そこで聖德太子は十七憲法の中に信は是れ義の本と仰せられ、今上陛下も軍隊勅諭の中に、忠節、義勇、質素、禮儀と共に此の信義を數へられて五ヶ條の項目とし、さて此の五ヶ條の精神は一の誠心にありといはれて居る、誠心は即ち信の根本、信は實に義の本であります。

〔十七〕十七憲法第九條に曰く、「信は是れ義の本なり、事毎に信あれ、其れ善惡成敗は要、信にあり、君臣共に信ならば何事か成らざらん、君臣信なければ萬事悉く敗る」とこれ實に千古の明訓であります

〔十八〕軍隊御勅諭の中に信義を示されて、「信とは己が言を踐み行ひ義とは己が分を盡すをいふなりされば信義を盡さんと思はゞ始より其事の成し得べきか成し得べからざるかを審に思考すべし朧氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結び後に至りて信義を立てんとすれば進退谷りて身の措き所に苦むことあり」云々とある信義の二字はこれで明かであります

〔十九〕拇尾明惠上人の法語に「人はあるべきやうわといふ七文字を持つべきな

〔十九〕あるべきやうわとは之れ如是にするのである、如是とは是の如く此の通りで烏はカア〳〵雀はチユウ〳〵これが佛祖の大道で花紅柳綠山高水長皆な之れ如是の法であるが、今は人間の道で云へば人は何うすればあるべきやうわに出來るのである。人といふものは如何に威張つても一人では生活の出來ないといふのは知れ切つたこと、社會は共同生活である、已に社會が共同生活で、我れのかく生活して行くのは多數協力の御庇陰であるといふことが解れば我も亦世の中の爲め人の爲めに働くのはこれ別段變つたことぢやない。當然のことではないか、それのみならず、我の

り、僧は僧のあるべきやう、俗は俗のあるべきやうなり、乃至帝王は帝王のあるべきやう、臣下は臣下のあるべきやうなり、此のあるべきやうに背く故に一切惡きなり」と

今日あるは我より以前の多くの人々が諸種のことを發明してくれた爲めであるならば、我も亦此社會を今一層立派に今一層完全にして行くといふことはこれ實に人として人のあるべきやうわを盡くす道ではないか、吾等の仕事は如何に小さくとも吾等は唯た目前のことのみを思はず又自分だけのことを思はず、世の中の爲め人の爲めに働くのが人の道だ、其の道を行ふは中庸に所謂『誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり』で至誠の心を以てにや、既に心が至誠であれば其の行ふことは忠實眞面目で、徒らに皮相を飾つて內實を疎末にするといふやうなこともなく醇厚俗を成し華を去り實に就き荒怠相誡めて行くことが出來るのであるから此の御詔書の御趣意を行ふの第一義は惟れ信惟れ義ですが、信はこれ義の本といふのですから詮じつむる所は信の一字にあるといふてもよい、此の信のおこゝろを以て各々其あるべきやうわを盡くしさへすればよいのですが、不幸にして我等の心には我見といふものがあつて此の如きことを思ふの如くに見ず、自分勝手に觀察して我といふものを

本とするから自分さへよければよいと思ふて忠實を缺き皮相に流れるものであるから實を去り華に就き一時思案の鼻先考で荒怠に流れるのであります、御詔書には殊に此點に御注意下されて居りますこれを一國の上から見ても日本が國運を發展せしめるのは武力の方はまあ可なりとした所が、今日商業上には果して外國の信用を得て居るか、日本は國家としては信せられるが、個人としては信せられないといはれた不信用を以て何うして商業の發達が計られやう、文明の惠澤を共にすることが出來やう、日進の大勢に伴ふことが出來やう、大體今の日本の商業家は信用の第一の資本たることを忘れて金にばかりあこがれて外資を輸入することを知つて居るが外國の技術を輸入して內國品の改良を計り、信用を世界の市場に得ることを知らない、惟れ信惟れ義とあるのは此信を根底として商人は商人らしく工業家は工業家らしく各々其の分を守りて爲すべきことを爲すにある、已に其の爲すべきことを爲すに熱衷する何の暇あつてか華美を事とし奢澤に流るゝことが出來やう、昔西班牙と和蘭陀と

戰爭のあつた時に西班牙人は、あの小なる和闐陀が何うして我が大なる西班牙に敵することが出來るであらうかと視察にいつて其の國の代表者たる代議士が皆な贅澤な衣服で出席するのを見て、これを實に小なる和闐陀が大なる西班牙に敵し得る所以であるといふて感服したといふことで、「二十」儉なきものには勤なく、荒怠相誡めざるものに產を治むることの出來るものはない。其本は何事もまづめに表裏なく至誠を以てやるといふのが必要であることは今更ら云ふに及ばぬことであります、さて此心ふのを以て實行するに自彊不息の覺悟がなければならぬ自彊不息といふの は周易の『天行は健、君子以て自彊して息まず』とあるのに出た語で、朝々、日は東より出で、夜々、月は西に沈み、四時循環して息まず、山嶽は巍峨として千古に聳え、江河は滔々として萬古變せざる天行の健なるが如く我も亦た自彊不息に行かねばならぬ、自彊の彊は勉強の強と同じ字で、一面には自ら己に克ちて忍耐して進んで行くことと、他面には油斷なく努力して行くこととの義があるので、自ら守る所強く敢て他の爲めに動かさ

「二十」勤儉のことは外の點で說くから、こゝに略したが、勤は精進、儉は知足、勤はあつて儉なきものは底なき桶に水を入れるが如く何に勉勵しても其功なく、儉あつて勤なきものは桶に入れたる水の次第に腐つてしまうやうなもので共に缺くことの出來ないものである。

「二十一」谷川に大きな石があるために水が出ず水の勢が碎けて返るたびに幾度か方向を變へ、下の砂が掘られ、上の砂が流れて其の方へコロ〳〵と轉ぶ、輕薄な世の潮流で浮いたものは浮世の別れかなと、禪師は「思へば日々の動仕、退屈で困るといふ。

「二十二」昨日の今日に又逢はれねばと書さうと思へたいふことである昨日の今日に又も逢はぬと思へば退屈しようことて出來るものでない。彼の「君子は財を惜むべからず、用ふるに適あれば之を用ふるに適あれば財は自ら聚まる」と云はれたやうに有用の時には費はれば金である、無駄に費さぬといふことである。

れないものは、彼の輕佻浮薄な連中が世の推移につれて一定の操守なく泛々として飛び廻るやうなことはなく、チット自重して行くものですから始めは進まぬやうでも終には自己の地位を作ることが出來るもので、此の自重心といふものが殊に日本國民には必要なので、徒らに世の潮流につれて毫も自重の心のないものは到底大國民の氣風とは申されませぬ。御覽なさい、溪流の小石は急な水の爲めに推されて下に流れて行くが、泰然として動かず。

こりずまに打ちはよせても岩が根に
おのれくだけてかへる仇波

で、大きな岩は却て水の爲めに岩根を堀られて上流に轉ずるやうなものである林の如きものは却て他より其の地位を作つてくれるのである。併したい動かざるだけでは行かぬ、動かざること林の如しと共に、疾きこと風の如くにやるのが軍の秘訣實行の第一義だ。少しも油斷せず進むべきに向て進まねばならぬ。これが自彊不息といふ御語のある

下へ流れるが巍然とした信仰のあるものは上流に向ふの喩へとしたのだである

所以である、努めて息まざれば水も石を碎くのが自然の法天行は健だ、君子はこゝにも見る所がなければならぬ。佛教でいふ精進とはこれで、これには難に當て屈せざる難壞精進、安んずることなく進むべき無足精進、それから一生懸命に努むべき勤勇精進なぞの區別があつて一々精しく說いてあるが、今は略して唯だ奮勵努力して油斷なく進むことだと思ふて差支ない、

日本が露西亞に勝つたといふて、それで滿足して居つては、今後の發展は期せるものでないが如く、個人が僅かの成功に我が事成れりと安心しては華美に流れ驕奢に陷つてしまう。古來國を興すものは皆な此自彊不息の心にある、羅馬は此の心を以て起り、此心去つて亡びた、平氏も此の心を以て起り、此心去つて亡びた、成功成功と少しのことに安心しては駄目です、これに就て一つの面白い話があります。昔、神子上典膳が伊藤一刀齋に劍法を習つた時に、一刀齋は何時でも典膳の油斷を見ては打ち込む。飯を食つて居つてもピシャリ、寢て居つてもピシャリ、こゝに於て典膳工夫すること年餘、終にピシャリと打ち込むのをホイとすかして先生如何でござるといふと、ソコをピシャリとやられたといふのは曾て御話したことのある有名な話だ、此先生如何でござるといふた所に成功したと思ふ油斷がある、此油斷が即ち大敵、自彊不息を害する此上のものはない。個人も國民も少しの成功に滿足せず、益々自彊不息の心を以て日進の大勢に伴ひ、國運の發展を計りたいものであります、[二十二]まだ云はねばならぬこともありますが、餘り長くなりますから此講話は之で終ります。

〔二十二〕信義は精神の方此の精神あつて

信義 忠實 服業 勤儉 治産 去華 就實

となるのでそれの實行としては相互的には荒怠相誡め個人的には自彊不息と見ることが出來ます

鋭にぞ心は似たるしかはあれど　（小澤芦庵）

かゝみはかげを止めやはする

花の色は昔しながらに見し人の

心のみこそうつろひにけれ　（元良親王）

(二) 拜詔餘言 (信義の力)

戊申詔書に就ての私の考は既に之れを述べたのでありますが、更に御婦人方や御子供衆も多いことであるから解し易く今一席話をせよといふことでありますで、今度は信義の力といふことを主として御詔書の意味を話すことにいたします。何分同じ御詔書に就ての話でありますから重複する所は免れませんが、それは豫じめ御承知を願つておきます。

さて世の中で力といふものにもいろ〳〵ありまして人間に就ていひますれば肉體の力(即ち腕力)と精神の力との二に分けることが出來ます、世の中のまだ開けない時代には精神の力なぞは殆んど認められませんで力といへば腕力だけで此腕力の強いものが一番豪かつたのですが、世の開けるに從ていろ〳〵な武器が發明せられ腕力はだん〳〵其勢力を失ひまして、精神力の方が勝利を得るようになります、其精神の中でも殊に智慧の力は非常に發達して、今日では昔の人の思ひ及ばなかつたいろ〳〵な發明が出來て昔は何年かゝるか知れなかつた地球の一週も今は五六十日で出來るようになつたのですが、此智慧の力にも限りがあります、此智慧の到らざる所は何んな力で入り込みませう、唯だ信の外はありませんこれ宗教が科學や哲學以外に超絶して其地位を保つて居る所以で、智慧の方は疑ひを以て出立點として何もかも疑つて其解決を得ようとするのですが、宇宙の事は限りなくして、人間の智には限りがあります、限りある智力を以て限りなき宇宙のことを計るのですから、どうしても解らないことがあります、仮一ッ食ふにも此中に毒があるかも知れぬと疑ひ座つて居る中には家が潰れることがありはせぬかと疑ふては少しの間も安心はないのですが、そんなことはあるまいといふ信仰で持つて居るのですがこは確かな信仰ではない、あるまいと思ふてもあるかも知れぬそんなあやふやな信仰でなく、確然不動の信仰によりてこの何うしても解らない所に入り込むのが宗教でありますから、宗教は學問の道理と離れてはなりませんが、學問の道理以上に出ることが出來る、智識的の研究

と相反してはならぬが智力以上に出ることを得るのであります、されば大智度論にも佛法の大海は信を以て能入とすといひ、信といふことがなくては宗教に入ることは出來ないとあります、これは一般の上でいふたのですが人と人との交際に於ても其通りで、〔一〕信はマコトで誠といふ字の意味をも含んで居る、信は人の言と書く、虐言妄言はこれ人の言として見ることは出來ないので、人が社會を造り其中に生存して居る以上は互にマコトを以てせなければ一日も立ち行くものではありませぬ、信といふのは唯だ虚僞を言はぬといふだけではない、其言ふたことが成就せなければならぬ、即ち言扁に成るといふ誠の義で、實功が擧らねば信とはいへません、言ふた事が虚僞でなくとも其實功が擧らねば虚僞も同樣です、言ふたことは必らず實行するといふので、其人の信用も出來るのであります、〔二〕此信用の力といふものは非常に大きなもので大將が信用を得れば士卒は手足のやうに働きますし、政治家が信用を得れば國民皆な其治を喜びますし、商人が信用を得れば能く巨萬の財を動かすことが出來ますし、

〔一〕力は唯だ此の精神力肉體力ばかりでなく外に財力といふのがあります、財力は金の力で、今日の世の中には非常に勢力のあるものですが、如何に金力があり財力があつても若し此信がなかつたらば世の中に立つて何の力もないよし金力はなくとも此の信用の力があれば金は融通せらるゝものであります、から力の中の力は此の信の力であります

〔二〕戊申詔書と佛教〔二〕參照

學者が信用を得れば一言以て天下の法なりといふことが出來ます、凡そ人を動かすの力にこれほど強いものはござりません、此信が本となり一切の道義は現はれるので、聖德太子は憲法第九條に、信は義の本、事毎に信あれ、其善惡成敗、要は信にあり、君臣共に信ならば何事か成らざらん、君臣信なくんば萬事悉く敗ると仰せられてある、一家内の中で親は子を信せず、夫は妻を信せず、子は親を信せず、妻は夫を信せぬといふ風でありましたら家庭の平和といふものは一日も保つことの出來るものではなく、一國の中に、君臣相信せなかつたならば其國は亡ぶるのです、信は實にこれ一切道義の源で、孔子も人にして信なくんば其可なるを知らざるなりと云はれてある、唐の呂元膺は或る所の知事をして居つた時、歳末に囚人を調べると其中の一人、明日は元旦であるのに父母に見ゆることの出來ないのは實に悲しいといふて泣くものがあつた、元膺其情を憐み、悉く囚を放ち期日を定めて歸り來れと命じた、スルト獄吏が、そは怪しからぬ事かな、賊は放つべからず、一たび許さば歸り來らずといふと元膺は否な、我れ

〔三〕杉原と平賀相對峙すること三年天文十九年十月十三日の夜なり、杉原一の矢を以て隆宗の腹に中つ、隆宗恬として曰く、足下矢弱く數歩の前に落つと次に第二の矢を誤らせんとした杉原はさればとて弓勢強く放ちければ平賀を飛び越え去りしと約皮線に出づ

信を以て人を待つ人豈に吾に違はんやといふて之れを止めなかつた。囚人も其信に服したと見えて期日に至て誰れ一人歸らぬものはなかつたといふ話である。極惡非道の罪人をも動かすのは此信の力であります、我が國の武士道は全く此信義を以て中堅として居るので彼の備後神戸の〔三〕城主杉原忠興が寄手の大將平賀隆宗と相約して、吾、汝を射ん汝死せば寄手速に退くべし、若し我射損じなば此城を渡さんと日を期して城外に會し、城將忠興は自ら弓矢を携へて陣頭に進み、寄手の大將隆宗も亦陣頭に出でて、さあ射い、射損せば其城を渡すべしと互に命懸けの勝負となつたが忠興の弓矢は隆宗に中つたが勢で弱かりしと見えて、殺すに致らなかつた、スルト忠興は持てる弓矢を抛げ棄てゝ早速、城の中に歸へり、臣下を集めて今晩中に此城を明け渡すといふ、臣下はそは以ての外なり、かく御口約はありとても君の矢を受けし隆宗、定めて傷も重かりなん、其者も命も計り難きに急いで城を渡すは不利益ではござりませんかといふと忠興は、それこそ以ての外の言なり、一旦城を渡すと約束した上は此城を渡

〔四〕孟子曰く生も亦我が欲する所なり義も亦我が欲する所なり、二者兼ぬるを得べからず、生を捨て義を取らん者なり生も我が欲する所なり生より甚しきものあり故に義も得るを爲さず、死も亦惡む所、惡む所、死なり甚しきものあり故に患も避けざるあり、

さねばならじ、明け渡した城は又武力を以て取り返すことが出來るが、僞りを申したとあつては末代までの恥辱であるといふて約束通り城を明け渡したといふ話は、誰れも知つて居るのですが、昔の武士が信義を守つたよい例ではありませんか、されば軍隊五ヶ條の御勅諭の中にも、信義の一ヶ條あつて、軍人は信義を重んずべし、云々と仰せられ己が言ひたることは之れを踐み行ひ、これが本となりて己が分を盡すことが出來るので、まことに信は義の本と申すべきであります、〔四〕孟子が生も我が欲する所なり、義も我が欲する所なり、二つの者兼ぬることを得ずんば生を棄て、義を取らんと申しました如くに義の爲めには命も惜まぬといふのが日本武士の精神で、とりもなほさず日本國民の精神であります、商人が此信義を失ひましたならば、どうして其家を立てゝ行くことが出來ませう、農家が此信義を失ひましたならば、どうして其業を奬むことが出來ませう、殊に商人の如きは信用取引が圓滿に發達してこそ家業の繁榮を期することが出來るので、如何に資本が多かつても、此信用といふものがなかつたら

ば石炭力のない蒸氣船と同じことで進むことは出來ないのであります、さて此信義を盡くして世に立つて行くには何うすればよいかと申しますに、これは勅語の中に、忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義、醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マザルベシと仰せられてある通り、國民其各が自分〳〵の仕事をするにつけて、忠實とまめやかに裏表なく働くといふことが必要で、何事にも裏表があつては信義を盡くすことが出來るものではない、これ〳〵は表向これは裏向といふやうではマコトとは申せぬ、マコトといふのは裏表のない心、裏表のない行ひです、主人の前では勉強家らしく働いて、主人の見て居らぬ時には怠り勝ちなのは忠實とは申されぬ、人前では立派な議論をしても自分の行ひがそれと伴はぬといふのでは其人を信用することが出來ない、彼の富士の山が、どちらから見ても八面玲瓏、人に與へて見せしむで、同じ姿であるように、我が心も何處から見られても差支のないようにして行くのが忠實と申すのです、裏の醜い錦よりも羽二重や縮緬の裏表のないのが床しいではありませんか、『蛇食ふと聞けば恐し雉の聲で』どんなに姿が美しかつても其裏に蛇を食ふといふことがあつては面白くない、『美しく美を盡しても芥子の花』で花は美しいが、これには毒がある、孔子も巧言令色鮮かな仁とある通り、人前だけのは忠實ではござりません、忠實といふのは心の奥の其又奥から至誠を以て其仕事をするので、[五]昔の名人と云はれた人は皆な此心掛があつて自分の一生は貧乏に暮しても其仕事には忠實に奬むといふのを主義としたのです、その之れをするには何うするかといふと、人を相手とせずして神佛を相手とし、人は我が心を見てくれなくとも、神や佛は確かに照覽しまします、人は何と云はうとも我れの心に疚しき所のないことは神佛が知ろしめしてござるといふ風に、信仰を定めて行けば、怠らうとて怠ることが出來るものではありません、誠に裏表のない仕事をして心に恥しからぬようにしようとするには此信仰の力より強いものはないと思ひます、信仰は我が心の命です、これあつて人は忠實に生くることが出來るのであります。

[五] 横谷宗珉と共に彫刻の名人たりし土屋東雨いふ「何事も技倆を好く致し度候はゞ心のむさきことなきやうに是れ第一なり、細工人は一生食なるものと心得常に心をよごれぬやうにいたし度候」と名人の心掛はこんなものである、

次ぎに勤倹産を治めて参りまするも其通りで、忠實業を奨むのに信の力がなければならぬが如く、これには義の力がなければなりませぬ、即ち軍隊御勅諭に『義とは己が分を盡すをいふなり』と仰せられてある通り、人には各々其職分があり、此職分を互ひ互ひに盡して此社會は維持せられ、此國家は成立して行くのであります、社會は一つの有機團體と申して機械のやうなもので其中に働く、われ〳〵お互は其機械の一つでありますから、一つは一つでも機械全體に影響することは、時計の機械のチョット狂うても役に立たぬのと同じことであります、これを共同生活といふてわれ〳〵は、此共同生活の一員ですから互に其職分を勤めなければならぬ、大工は大工、左官は左官、官吏は官吏學者は學者、商人は商人、農家は農家、人力車夫は人力車夫と其働くことにはいろ〳〵ありますが、共に社會の共同生活を助けて行くのでありますから少しも怠ることなく奨まねばならぬ、此怠ることなく奨んで行くのを勤と申します、呂氏春秋の中に『流水腐れず戸樞虫はまず』といふ詞がある、これは常に流れて居

【六】古句に糟出せば氷る間のなき水車とあるも此義に外ならぬ

る水は腐らず、開閉をする戸は虫が食はぬといふので、人も亦其通りで勤め働くものは健かに、勤め働かぬものは腐つたり虫が食つたりするのです、佛教では此の勤め働くことを精進といつてある、精はクワシク進はスムで、一生懸命に其道とする所を勤め奨みて進みゆくことで佛は、一切の衆事は皆な精進によりて起るを得、家にありて精進すれば衣食豊饒にして居業ます〳〵廣く、遠近これを稱嘆すと仰せられて勤め働きさへすれば衣食に不自由もなく家業もます〳〵繁昌するぞと云はれ、此精進の反對なのを懈怠といふ、懈も怠もオコタルといふことで、これに就てはそれ懈怠は衆行の累なり、家に居て懈怠なれば衣食供はらず、産業挙らずと仰せられて、怠るのは一切の困苦の本ぞと示された、俗にいふ『稼ぐに追いつく貧乏なし』で、勤め働くといふことが産を起すの本であります、一文なしから起つて今は尊徳翁といふて神の如くに仰がれて居る【七】二宮金次郎先生も、此勤勞を以て處世の第一義と云はれて、江戸は水さへ金が出るといふのは懶惰者の言で、水を買ても金が取れるといふは勉強人の言

【七】二宮翁夜話二宮翁と佛教を參照すべし

だ、何事にも目のつけ所で、下に目をつけ下に比較するものは懶惰者で、碁を打て遊ぶは酒を呑むよりよい、酒を呑むは博奕よりよいといふては進む心も出でねど、上に目をつけて、碁を打つより仕事をする方がよいといふやうにして初めて成功するものであるとの旨を述べられたことがある、これで勤儉の勤は説いたが次ぎの儉といふのは儉約と續いて、己れの分を守り無益の費用を省いて役に立つことに費ふようにして行くので、これをするには足ることを知るといふのが必要で、足ることを知れば足らぬことはない、足らぬことがなければこれほど安心なことはない、佛も

〔八〕財色の人に於けるはたとへば小兒の刀を貪るが如し刀の蜜は一食の美にだも足らずして、而も舌を截ると仰せられて、足ることを知るの必要を説かれた、足ることを知れば自然に儉約になるので、平生、儉約すればこそ、まさかの時の役に立つもの、昔、佛源禪師といふ御方は常に儉約を守つて一錢二錢も疎末にせずまさかの時には惜まず出して『君子は財を惜む之を用ふるに道あればなり』と云はれたといふことです、用ふるに道があるから惜むので、彼の吝嗇漢の徒らに錢を惜むのとは其趣が異います、『小人は財を惜む之を用ふるに道なければなり』です、徒らに吝むのは惡いことですが、徒らに費すのも亦惡いことであります、細川氏の臣に井戸龜右衛門といふ人があつて道義を旨とし勤儉を事とした人ですが、其友人に増田藏人といふのがあつて資性豪放千石の知行を貰ひながら皆な使ひ果して一厘の貯蓄もない、龜右衛門が常々之れを誡めて武士たるものは節儉をせねばならぬといひますが、馬の耳に風で、少しも用ゐませず、江戸詰となりましてからは層一層奢に耽けりまするのを、龜右衛門は如何かして之れを改めさせんと、交代して國へ歸りまする時を計つて伊勢の桑名に待ち受けて、龜右衛門の來まする時、自分は十人ばかりの若者をつれて馬に乘つて江戸の方へ走りますと、これを見た藏人は、『そこへ行くのは龜右衛門ぢやないか』『さうだ、今、急用で話をすることが出來ぬ御免ッ』と馬に鞭つて行かうとしますから、藏人周章て、『君は平生の交誼を忘れて、急用を告げてくれぬか』と馬の轡を止めますると、龜右衛門

【九】又或る書に天下三養生の要といふことがある、一は心の養生、次ぎは身代の養生、身代が悪くなれば心が腐る、心が腐れば身が病氣になる、身が病氣になれば身代が悪くなるといふやうに此三つは循環して其一を欠いてはならぬとある、されば勤儉産を治める身代の養生がやがて身の養生にも心の養生にもなるのである、

は『實は大阪に大事件が起つて藩兵は日ならずして行くことゝなつた』といふ、藏人之を聞て大に驚いて、我が家に儋石の儲なし、今日の事、如何にすべきと涙を流し、君の御大事に參るの費とてもなく、平生祿を戴いて何の顔かあらんと慨くのを、龜右衛門は、前言は聊か卿を試むるのみ、卿にして眞に君を思ふこと此の如くなれば、何故に平生我が言ふ所を用て節儉を守らざる、武士たるるもの儉約を守るは、まさかの時の用に供せんとなり、卿の如く放縱にして一錢の貯へなくば、天下の大事に何んとする、其時には涙を流しただけでは濟むまじ、こゝに心がつけば、我が言ふことを容れて節儉を守れとくれ〳〵もさとしましたで、さすがの藏人も其高義に感じて節儉を守るやうになり、大阪陣の時には數百の兵を率ゐて戰功を立てたといふことであります、況して商人は節儉を以て道とせねば其家は亡びてしまうので或る書に世渡りは將棊の如くにて一歩にても無駄に使ひ棄るに身代くづれのはしとなるなり、よく〳〵考へ質素儉約に内のかためをよくし、金銀をたくはへ、身を守り、さて取引萬端損徳を考ふべし、おのれが内もかためず、ひたすら貪欲に人の金銀に念をかけ取りためんとするは下手將棊にていつも破れをとるものなり、

と、無益には一錢も費さぬといふのが、儉、かくて勤儉産を治めてゆきてこそ、國富み家も榮えるものであります、然るに此頃の日本國民は漸々と奢侈に流れて唯だ外觀の美を衒ふて人情は浮薄に流れ、華美を競ふて忠實の心がなく、世渡りの秘訣は一歩一歩進んで行く徒歩の如きものであるのに、一足飛びに大儲をしようとぞと考へて競馬熱に浮かれたり、投機の事業に手を出したりする慨はしい狀態であります、驕る者は久しからず、平家の榮華も三十年、羅馬の盛時も夢の間でした　陛下は之れを痛ませられて此御詔勅を下したまふたので、國民が皆な此御聖旨を體して日々怠ることがなかつたならば國運を發展せしむることは困難なことでありませんまことや、信義の力は國を興し家を富ましむるの根本で、信なれば以て忠實變に服し、義なれば以て勤儉産を治め、信あれば以て自彊息まず、義なれば以て荒怠相誡めてゆくことが出來るのであります、かくして

東西文明の長を採り、彼此相補ふてゆきましたならば、戰爭に勝つた日本は又世界平和の保證者となつて行くことが出來るであらうと思ひまして、聊か勅語の御聖旨を述べました次第であります。

佛法と世法とは若し其の眞相を見れば一切の差別なし

（華嚴經）

秋の野の草葉の露を玉と見て

とらんとすればかつ消えにけり

（良寛）

（三）二宮尊德翁と佛敎

人間の眼は能く天を見ることが出來るが、足は地面を離れることが出來ない。如何程高尙なことを云ふても實際の行ひが出來なくては何の役にもたゝぬ。佛敎といへば一概に空理空論で實行に疎いものゝやうに思ふのは大きな間違で佛敎は先づ生死の大問題を明かめ心の落着をつけると共に此一日の生命をも等閑にせぬやうに働いて近くは父母の恩に報ひ、遠くは天地三寶の恩に報ゆる、實行を主とする所の敎であります。如何に生死の道理が解つたからとて實行の伴はないものは大乘佛敎の望む所ではございませぬ、されば古人も智目行足といふて智惠の目と行ひの足とが具はつて初めて完全に人といはれるので、唯だ知つただけで行ふとの出來ないのは跛でたゝ行ふても其道理を知らないのは足はあるが目がない盲者ちやといはれてある。御釋迦樣の御像の側に文珠菩薩と普賢菩薩との二があるのは文珠は智普賢は行で此二つがあつて初めて完

全になるとしてあるのであるから佛教は今日の言でいへば實行主義、活動主義であります。決して山の中へ飛び込んで獨で坐禪して居るのが大乘佛教ではない、所謂治生産業正法と相違背せずで、農家が農業を營み、商家が商業を營む中に活きた佛法の道理は現はれて居るので、智覺禪師が自ら鋤鍬を取て田地を耕し、之れ佛法なりと云はれた通り農家が土地を耕す如く佛法は心を耕すのであります、商ひも亦其通りで或る人が『白隱が隻手の聲を聞かんより兩手を打つて商をせよ』といふたのを白隱禪師はさうだ『商ひが兩手を打つてなるならば隻手の聲は聞くに及ばじ』と云はれたといふことである、世法と佛法とは二つでない、唯だ佛法を佛法として世法と離れたものゝやうにいふて居るのは小乘教で大乘ではないし、[一]世法を世法として佛法と離れたものと心得て居るのは以ての外の事である、世法の機械は佛法の油を以て廻り、世法の食物は佛法の鹽を加へて初めて味があるのである、

さて如何にして世間の仕事に佛法の味を加へ油を添へるかといふに外のむづかしいことはいふに及ばぬ、唯だ實行の上から云へば何事をするにも知恩報德といふことを忘れねばそれでよいので、農家が農を營み商家が商を營むにも自分の利益のみの仕事と思はず、天地の恩德に報ゆるといふ心を以てすれば、それがそのまゝ佛法に適ふことになります、心地觀經には

恩を知り德に報ゆるはこれ聖道なり

とあり、梵網經には

恩を知り恩に報ゆるは菩薩の本行なり

とあつて此知恩報德の四字が佛教道德の眼目をなして居るのであるから[二]自力の禪宗も行持報恩を主義とし、他力の眞宗も稱名報恩といふにある、八萬四千の法門、五千七百の經卷之れを身に行ふに就ては知恩報德といふことに外ならぬ、[三]此報德の主義を以て最も手近くわれ〳〵の世を渡るの道を示されたのは二宮尊德翁である翁は啻に此主義を示されたのみならず、身自ら此主義を行ふて最も手近くわれ〳〵を教訓せられたの

[一] 華嚴經に曰く「佛法は世間法と異らず世間法は佛法に異らず、佛法と世間法とは雜亂あるなきも、差別なきなり」とある、佛法は鹽のやうなもの世間法は食物とやうなもの、若し食物に鹽を缺けば味がないやうに世間法に佛法を缺けば全く無趣味となる、若し又佛法のみを以て世間法と相涉らざれば鹽ばかりで實際の役に立たぬ、

[二] 佛教に自力と他力とある其自力の極端は禪宗、其禪の中曹洞宗には修證義があつて教理を示すこれは懺悔滅罪受戒入位、發願利生行持報恩の四句十六字を以て成り、他力の極端たる眞宗では信心正因、稱名報恩といひ兩極端とも報恩が根本となつて居る、

[二] 翁の根本主義は二宮翁夜話に「夫孝は親の恩に報うの勤めなり、弟は兄の恩に報うの勤めなり、凡て世の中は、恩に報ずんばあるべからざるの道理を、百能く弁知すれば、百能く辨ずるの徳なるべし、哀心の徳なる者なりと雖も、恩に報ずるの心なければ、不仁の人なり」と云ひ、「利を添へ、借りたる物には利を添へ、世話になつたる人には能く謝礼をし、貸物の代を償ひ、日々に拂ひ、總て恩を受けたる事は能く考へて、能く報ずるの道を勤むべし、時は世界の物は皆我物の如く何事も恩ふ通り、思ふ通りにならざるは無し、愛に到て四海光神明に通じ、四より四へ、東より南へ、南より北へ、恩となし報せざることなし」とある如く報徳を旨とせられたのである。

であるから、今回は翁の傳記や所説を話してわれ〳〵の實行の模範としやうと思ふのであります。御釋迦様や祖師方といへば、あれは出家だといふて別のやうに思ふお方もあるが此二宮翁は出家でなくわれ〳〵同様在俗の姿で、能く佛法の極意を實行し、それを以て家を興し人を救けられた御方であるから、其一言一行は直にわれ〳〵が手本とし其日からでも行ふことが出來るのであるから至極手近いのであります、少しく翁の爲めに家屋も田畠も悉く流されてしまい、翁の父はどうかして之れを回復せんと計られたが、永の病氣の爲めに其事もならず貧苦に貧苦を重ねて、翁のやう〳〵十四歳になられた時に歿せられて、後は母と三郎右衛門、留次郎といふ二人の弟が遺されたので、翁

は母を助けて此二人の弟を養はねばならぬのであるが、何をいふても十四歳の子腕で心は如何にはやるとも力及ばず、殊に留次郎は未だ乳呑兒であるで、これを抱へては母も思ふやうに働くことが出來ないから乳呑兒だけを縁者にあづけ日々働いて居られたが、子の愛に惹かさるゝ母は胸も張りさけんばかりに悲みて、母は留次郎が家にあらぬが爲めにかく乳呑兒のことを思ふて夜も碌に寢たまはず涙にくれて居たまふを翁は慨かせたまふ、我れ明日より朝夙く起きて山に薪を刈り之れを市に賣りたらんには乳呑兒一人養ふに難きことはあらじと決心して其事を母に告げ早速弟を取り戻して身は日夜に働いて親子四人涙ながらも一所に暮らして居られたが、翁の十六歳の時に其母も亦歿せられ、翁は二人の弟を抱へて如何にせん術もないから二人の弟を母の實家へ預け、自分は鬼と云はるゝほど冷酷な伯父萬兵衛といふ人の家に養はれ、昼は稼業を勵み、夜は讀書に志して怠られなかつたが萬兵衛は燈油の費を厭ふて夜間の讀書を禁じましたから、伯父に乞ふて日々の稼業を他人よりも多く

し、其餘分を以て燈油を購ひ書を讀まれたが、伯父は尚ほ罵つて書を讀みたりとて何の詮なし、それよりも我が爲めに繩を糾へよといふに、翁は少しも反抗せず、晝は山に入りて薪炭を造り、或は田畑に耕耘し夜は繩を糾ひ莚を織り、深更人定まるの後、竊かに衣を以て燈火を被ひ書を讀まれたといふことであります、其刻苦勉勵なか〳〵にわれ〳〵の及ぶ所ではありませぬ。かくて翁は少しの貸銀でも得ることがあれば之れを庄屋に預けて其金を貯へ、村に貧困なものがあると之れに施して少しも惜まず、たま〳〵村に不用となつた古堀のあるを見付け出して閑暇ある毎に開墾し村民の捨てた苗を拾ふて之れに植けられたに、秋になつて籾一俵の收獲が得られました、これに心を勵まして小を積むで大を爲すは自然の道であります勤めて已まずんば、父祖の家を興すこと難きにあらじと奮發して此一俵の籾を本として增殖を計り倦まず怠らず行つて居られたで數年の後には一家を支持することが出來るやうになつたから、伯父萬兵衞に多年養育の恩を謝し家に歸りてます〳〵精勵せられたものであるから

終に父祖の田地をも舊に復し、こゝに一家を再興することが出來るやうになりました、翁常に語りて

大事を爲さんと欲せば、小なる事を怠らず勤む可し、小積りて大となればなり、凡そ小人の常として、大なる事を欲して小なる事を怠り、出來易き事を勤めず、夫故に終には大なる事を爲す能はず、夫れ大は小の積むで大となることを知らざるが故なり、譬へば百萬石の米と雖も、粒の大なるにあらず、萬頃の田地を耕すも、其業一鍬づゝの功にあり、千里の道も一歩づゝ歩みて至る、山と作るも一簣の土よりなることを明かに辨へて精勵し、小なることを勤めば、大なる事は必ずせらるべし、小なる事を忽にする者は、大なる事は必ず出來ぬものなり。

と云はれてある、これ實に佛が遺敎經に、汝等勤めて精進なるべし、精進ならば則ち事として難きものなし、たとへば少水も常に流れて止まずんば即ち能く石を穿つが如し、と仰せられたと同じく小事を怠らなかつたな

らば終に大事をすることが出來るのである。翁の生涯は實に此小事を忽にせずして刻苦精勵せられた結果である。[四]其事終に藩主小田原侯に聽えて頗る藩侯の知遇を得、それより野州櫻町當時に知らるゝに至りしは、聞落家老服部十郎兵衛が代々桑苧の後を受け負債山積して滅亡の地にあるといふに依せしによるといふも亦小事を勤めて大事を成すにありて、先づ服部家に至りて主人を呼び大祿を貪るの如きに比し主人の罪を謝すると其罪を知らば自ら貧むべしと已に其罪を憐み、自ら貧むの道は食に限ること無く、汁に限ること無く、衣は綿に限ること無く、川のものを好まざるこゝまでに守りたまはゞ妖復の策を立つべしと約を結びて主に報ずるの貧債なるも假却せりといふ翁の仕方は此の如し、

翁の生涯は實に此小事を忽にせずして刻苦精勵せられた結果である。[四]其事終に藩主小田原侯に聽えて頗る藩侯の知遇を得、それより野州櫻町當時に知らるゝに至りしは、聞落家老服部十郎兵衛が代々桑苧の後を受け負債山積して滅亡の地にあるといふに依せしによるといふも亦小事を勤めて大事を成すにありて、先づ服部家に至りて主人を呼び大祿を貪るの如きに比し主人の罪を謝すると其罪を知らば自ら貧むべしと已に其罪を憐み、自ら貧むの道は食に限ること無く、汁に限ること無く、衣は綿に限ること無く、川のものを好まざるこゝまでに守りたまはゞ妖復の策を立つべしと約を結びて主に報ずるの貧債なるも假却せりといふ翁の仕方は此の如し、

出で丶同家の家政を整理して頗る藩侯の知遇を得、それより野州櫻町當時に知らるゝに至りしは、聞落家老服部十郎兵衛が代々桑苧の後を受け負債山積して滅亡の地にあるといふに依せしによるといふも亦小事を勤めて大事を成すにありて、先づ服部家に至りて主人を呼び大祿を貪るの如きに比し主人の罪を謝すると其罪を知らば自ら貧むべしと已に其罪を憐み、自ら貧むの道は食に限ること無く、汁に限ること無く、衣は綿に限ること無く、川のものを好まざるこゝまでに守りたまはゞ妖復の策を立つべしと約を結びて主に報ずるの貧債なるも假却せりといふ翁の仕方は此の如し、

何人も尊崇せざるなき救世の偉人と云はるゝに至つたのである。

翁は抑も如何なる安心あつて此の如きの名を成したのであらう翁の物語に『予不幸にして十四歳の時父に別れ十六歳の折母に離れ、田地は洪水の爲め流失し、幼年の困窮艱難は實に心魂に徹し、骨髓に染み、今日猶忘る丶事能はず、何卒して世を救ひ、國を富まし、憂き瀬に沈める者を助けたく思ひ勉強したり』とあつて翁は救世の志願を抱かれて居つたので、これは翁がいたく觀音經を信誦し、其の衆生困厄を被り、無量の苦身に遍る、觀音の妙智力は能く世間の苦を救ふとあるに感奮し此大志願を抱かれたのであると傳へられて居る、眞に翁は觀音の志を以て救世を旨とせられた、其安心ともいふべきは、夜話に、

人は生れば必ず死すべき物なりといふことを前に決定すれば、活きて居るだけは利益なり、これ予が道の悟なり』

といひて先づ生死の問題を決定して、深く因果の道理を信じ、同じく夜話に、儒道に積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あるは、天地間の定矩、古今貫きたる格言なれども佛理によらざれば判然せざるなり。夫れ佛に三世の說あり、此の理は三世を觀通せざれば、決して疑ひなき事あたはず、疑の甚しき、天を怨み、人を怨むに至る、三世を觀通すれば此の疑ひなし、皆自業自得なる事をしる。佛敎三世の四緣を說く、是れ儒の及ばざる處なり。今爰に一本の草あり、現在若草なり、其の過去を悟れば種なり、其の未來を悟れば花咲き實法るなり、莖高く延びたるは、肥多き因緣なり、莖の短きは肥のなき應報なり、其の理三世を見る時は明白なり。』といひ又運といふことを說きて、『世人運と云ふ事心得違ひあり、譬へば、柿梨子杯を籠より打明ける時は、自然と上になるあり下になるあり、上を向くあり如此を運と思へり、運と云ふもの如

此ものならば頼むに足らず、如何とならば、人事を盡してなるにあらずして、偶然となるなれば、再び入れ直して明る時は、みな前と違ふべし、是博奕の類にして、運とは異ふなり、夫れ運といふは運轉の運にして、所謂廻り合せといふ物なり、夫に運轉には世界の運轉に基元して、天地に定規あるが故に、積善の家に餘慶あり積不善の家に餘殃あり、幾回旋轉するも、此の定規に外れずして廻り合するを云ふなり、能く世の言にあることなり、提燈の火の消たるために禍を免れ、又履物の緒の切れたるが爲めに、災害を免るゝ等の事これ、偶然にあらず、眞の運なり、佛に云ふ處の因應の道理即ち是なりと。

斯くの如く深く[五]因果應報の道理を信じ、此理は天なり如何にするも變ずべからず、智力も權力も動かすべからざるは此理なれば、日々德を積んで怠るなくんば終に其報あるべしといふのが其安心である、されば徒らに運は天にありなぞといふて自ら勵むことのないものは其應報を免るゝことが出來ないといふのが本領で、其目的は世を救ふにある、此目的を以

[五] 翁曾て天道と人道とを示して田圃の荒蕪するは天道自然なり、之れを耕耘怠らざるは人道なり、衣服の弊汚に至るは天道自然なり、之れを製するは人道也、居室の破損するは天道自然なり、之れを造作して怠らざるは人道也、人心放僻邪僞に流るゝは自然也、

仁義禮讓を以て之れを教へ、之れを防ぎ怠らざるは人道也、故に人道の要務は私欲を制して能く勤勉し、節儉を守つて仁義を行ふにあり、此の如くんば作爲の道全ふして、永久人事患なき也。」とある、

て刻苦勉勵せられたので、これ即ち此の世を救ふが爲めに刻苦するのが德に報ゆる所以であると考へられたので、報德の二字は翁の處世の骨子、教訓の源である、翁の報德訓に、

父母根元在天地命令　身體根元在父母生育
子孫相續在夫妻丹精　父母富貴在祖先勤功
吾身富貴在父母積善　子孫富貴在自己勤勞

とある、父母の本は天地宇宙の恩德にあり、我が身は父母の恩によりて稟け得て父母の養育の德を蒙つて居るので、今日我々の富貴は祖先の勤功や父母の積善によるのであるから、我が今日勤勞してゆくことが即ち子孫富貴の源となるといふ因果の道理を言明せられたのに外ならぬ、

身命長養在衣食住三　衣食住三在田畠山林
田畠山林在人民勤耕　今年衣食在昨年產業
來年衣食在今年艱難　年々歲々不可忘報德

とある、年々歳々報德を怠たらず、勤勞して止まなかつたならばそれで人の人たるの道を盡せるのであると、說くのが翁の敎へ方であるで、そこで之れを爲すには何うするかといふに第一の心得は至誠にある、

『濟民記』の著者は、「夫れ先生の道は至誠を以て本とし、勤勞を以て主と爲し分度を立てゝ體となし、推讓を以て用と爲す」といふて居る、至誠は萬事の本で、「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとてや神は守らん」至誠を忘れゝば如何に其の行ひが立派なやうでも、それは虛僞であり虛飾である。誠心誠意を以て世を救ふといふ考でやるのが人道の要旨で、天道も人道も此誠を離れてはあるべきではない、天道を完成するは人道にあり、人道を全くせんには勤勞に外ならず、そこで翁の敎は至誠を以て本とし、勤勞を以て主と爲されたので、ルーズベルトの奮鬪的生活といふも、此頃流行る努力主義といふも勤勞を主とするのにある、兎角日本人は長袖流に何にもせずに遊んで居ることをよいと思ふて勞動を下等なことのやうに思ふ惡弊があるそれでは、天道を無視し自然の恩德を忘るゝことになる、彼の太陽の一日も怠ることなくわれ〳〵を照らしたまふが如く、われわれも亦一日も怠らず勤め勵みてこそ人の人たる道はつくせるのである。一日怠るものは一日報德を忘れるものと云はねばならぬ、小人閑居して不善を爲すで此勞動を怠るものが終に不善を行ふやうになるのである、否な閑居して勞動を怠るのが既に立派な不善である、[六]佛敎で精進といふことをいふのは善に向つて勞動して怠らざることで、翁の主張と別なことではない。世に處する道に就て翁は面白き喩を擧げて之れを說かれたことがある。

世上一般、貧富苦樂と云ひ噪けども、世上は大海の如くなれば是非なし只だ水を泳ぐ術の、上手と下手とのみ、船を以つて用便する水も、溺死する水も、水に替りはあらず、時によりて風に、順風あり逆風あり海の荒き時あり、穩かなる時あるのみ。しかれば、溺死を免かるゝは、泳ぎの術一つなり、世の海を穩かに渡るの術は、勤と儉と、讓との三つのみ。

〔六〕戊申詔書の要領も二宮主義の至誠分度、勤勞、推讓の四綱目も佛敎の所說も別ふものでない、至誠といふは惟信惟義で分度といふは荒怠相誡めるのにも當り勤儉の儉にも當る、勤勞は卽ち勤で又自彊不息に當る、推讓は敎育勅語の博愛衆に及ぼすである、

勤と儉と讓とは翁が處世の三綱領とせられたことで、其中勤勞のことは前に述べたが、其次ぎに必要なのは儉と讓とだ、これに就ては先きの『濟民記』に翁の主義は分度を立てゝ證と爲し推讓を以て用と爲すとある、分度といふのは入るを計りて出るを制することで經濟上に分度を立てることだ、翁は、百石の祿なれば五十石に約し、千石の祿なれば五百石に約し、千兩の株なれば五百兩を以てし、百兩の株なれば五十兩を以て生活を營むべし、是れ貧富平均の中庸にして、寒ならず暑ならず、一身無病にして壽なるが如く子々孫々に至るまで、富を持し家を全ふすべし、然れども、是れのみにして、家に陰德を行はざれば、善人起らずして無賴のもの生れ、法を破るの憂あり、是故に、中庸の分度を定めて餘財を讓り、他人の貧苦艱難を救助せば、陰德積善焉より大なるはなし、假令、凶旱水溢ありと雖も、憂ふるに足らず、國を起し民を安ずるも亦難からず、若し、王者之を行ひ玉はゝ、天下を安じ、侯伯之れを行はゝ、國家を安じ、士庶人之を行はゝ、必ず其の家を安んず苟も斯くの如くなれば、國に饑亂の憂なく、家に貧困の苦なからん、是人道を盡して、永く富を保つの大道也、といはれてある、今日でいへば百圓の收入ならば五十圓で凡ての事を賄ふやうな工夫にさへしてゆけば不時のことがあつても恐るゝことなく、常に安らけく世に處することが出來るといふ如く、收入を計つて支出に分度を立てゝさへゆけばそれが家を保つの本であるといふ敎である、分度を守れば心に苦なく世を渡ることが出來る、昔から家の亡び國の衰へた源を調べて見ると皆な此分度を守らぬからである、さて此分度を守るの第一義はといへば節儉を旨とし無用の費を除き、自ら足るを知り分に安んずるにある、佛は『遺敎經』に「少欲を行ずる者は心すなはち坦然として憂畏する所なし、事に觸れて餘あり常に足らざるなし」と仰せられたのも欲を少くし足るを知り、常に分度を守れよとの敎である、其の次ぎは讓で詳しくは推讓といふ、これは孔子の「己れの欲せざる所、是れを人に施すこと勿れ」といはれた他愛のことで、翁の主義は之れを以て用とせられたのである、世の中は互に持ちつ持たれつして居るものであるから互に讓りあひ人の爲めを先

きにしてゆくといふことが處世の方針で、たとひ商賣一つにしても翁は
『商法ば賣て悦び買て悦び買て悦ぶやうにすべし、賣て悦び買て悦ばざるは道にあらず、買て悦び賣て悦ばざるも道にあらず、貸借の道も亦貸て喜び借て喜ばざるは道にあらず、』と云はれてある何たる名言ぞや、互に利益あり互に悦ぶやうにしてこそ社會の共同生活は維持せられ其發達も圓滿に計ることが出來るのである、翁の主義以上いふた勤勞と分度と推讓で其骨子となるは至誠報德にあるので決して出來難いむづかしいことではなく心掛けてさへ居れば日常に別段の面倒もなく出來ることであり、遠い昔の人でなく極く近い二宮尊德翁が自身で行はれたことであるからわれ〳〵も之れを身に行はねばならぬ、即ち

一　何事を爲すにも至誠を旨とし報德を要として假りにも自分勝手なことや虚僞の心を出さゝる事

二　日々の勤勞が報德の道なれば怠らず撓まず勵むべき事

三　入るを計りて出るを制し奢侈の風習を避け各々其分を守りて質儉約すべき事

四　世は互に持ちつ持たれつゝなるものなれば他愛推讓の心掛を忘れざる事

といふ四つをさへ忘れなければ家を興し道を盡くすことが出來るのでこれ佛教の主義であり、又尊德翁の教であります、どうか此近き二宮翁を模範として日々行ひたいものであります、佛教とて別なものではない其日常行ふ中に深い〳〵大乘の眞理はあるのです、遠い理想も必要ですが近い足下のことを疎末にしてはなりません、これについて面白い話がある貴、江戸から京都へ行く飛脚（ひきゃく）に非常に足の早いのがある、大分年が老つて居るが若いものもかなはぬ、出立は同じ日でも其飛脚は何處（いづこ）でも五六日早く着くソコデ一人が其老飛脚を訪ふて何の秘訣があつてそんなに早く歩けるかと聞くと、其飛脚は笑つて別のことはないが東海道には赤い石がある其石を踏むと足が疲れて遲れるが其石をさへ踏（ふ）まぬやうにさへすれば早いといふ、それではといふので尋ねた飛脚が此次ぎより道中に

江戸を出發てから赤い石を無いか〳〵と探して歩いたが五十三驛終に見出さなかつたが平常より二三日早く着した、歸りに是非赤い石をと見て歩いたが、これも無かつた、無かつたことは無かつたが二三日早く着したから其旨を老飛脚にいふと赤い石とては無いが、おまへが足元を見て行つたから早かつたのだ、早く行くの秘訣は足下に氣をつけるにあるといふたといふこと、二宮翁の主義は小さなことのやうだが、これが足元となる大切なことであるから實行せねばならぬと思ひます。

(四) 人生の戰爭

戰爭といへば直に砲烟彈雨の慘劇を想ひ起さるゝであらうが、これのみが戰爭ではない、眼を開いて見ると此の宇宙は一大戰場で、われ〳〵生物は無始刼來互に相爭ふてをるのであります、これは外を見たのですが又內心を見ると、心も亦[一]一種の戰場でかうしやうか、あゝしやうかと甲の念と乙の念と相爭ひ無明煩悶の雲は深く眞如の月を掩ふて、拂へども去り難く、拭へども消え難く、われらは常にこれと戰ふてをる心ばかりではなく、進化論者や生物學者に尋ねて見ると、生物といふものは常に生存競爭即ちストラッグル、オフ、エキジスタンスといふ理法の爲めに支配せられてをるので、周圍の事情や境遇と戰ふて少しでも油斷をすれば、直に劣敗者となつてしまうのであります、俗にいふ優勝劣敗の理といふのはこれであります、優れるものは劣れるものを倒して自己の地位を得るので、彼の菜の花に止る蝶の其色黃に、雪山の兎の其色白いのも、矢理此理法に制

[一] 心內には心象の戰爭といふことがあつて、何時も諸種の觀念が相爭ひ其中で自分の氣に入つたのに定めて行くのでは一つの行ひをするのには先づかうしやうかといふ動機が起るとそれと反對な考も起る此二つの考の中を選擇して一つの行爲を決定するので心內にも亦優勝劣敗の戰爭があるのであります。

せられてをるので、若し菜の花に止る蝶の其色が菜の花と全く異つたものでありましたらば、彼等は直に他の小鳥か何かの爲めに食はれてしまいまするが其色の花と分別し難きものは、幸に小鳥の眼を掠めて生存してをるので、松に住む虫の其色の松の木に似てをるのも、芋虫の芋の葉に似てをるのも、皆なこれと同じ理です、若し色の目立つ小虫で、悠々とこれらの草や木に止まつてをるものがござりますれば、それは大抵毒虫であります、其身に毒があるものでありますから、小鳥もこれに近づかず、以て其身を安んずることが出來る、ツマリ適者生存の理で、其周圍の境遇に適したものは安全に生活をすることが出來るが、さうでないものは直に他の爲めに取けてしまう、これは生物界全般を通じた規則で、其爲めに周圍の境遇と常に戰ひ、これに適したものは殘り、適せざるものは亡びて今日あるに至つたので、これを又適者生存の理即ちサーバイバル、オフ、フヰテストと申して先きに申した生存競爭と此の適者生存との二大原理は生物界を通じて行はれてをるので、一切の生物は此二大原理に制せられ、優

（二）生物の進化には二つの理法が具はつて居る、一つは遺傳といふて親から子、子から孫と傳はるので其の傳はり行く中に周圍の境遇によつて（其姿が變つていろ〳〵）變ずることは佛敎でいふ因緣により變化するのと同じことです、此場合には遺傳を因と見、境遇を緣と見ても差支はない。

者は勝ちて殘り劣者は負けて亡び、境遇に適するものは存し適せざるものはなくなりて萬物の優勝者たる人間にまでなつたので、生物（二）は當初以來互に戰ひ互に爭ふてをるのでありまして、少しでも油斷をすれば直にこれを人種の上に見ても白皙人種の日にますます衰へるが如く、我國に於ても大和民族はます〳〵繁昌して黑色人種の日にますます衰へるが如く、我國に於ても大和民族はます〳〵繁茂しまするが、アイヌ人種はます〳〵減少するやうなのも、矢張此の生存競爭、適者生存の道理に支配せられてをるのであります。

サテ人間として劣へて見て如何でござりませう、ギヤツと生れると早や周圍の境遇はこれを攻めるので、少しでも其保護者が怠つたならば、夭折の不運は、いつでも見舞つて來るのですし、身體の順應を怠れば直に疾病となり病氣となつてこれを苦めます、さて小學校に通ふ頃よりそろ〳〵學說との戰爭を始め、これに打ち勝ちて、やうやう卒業して一人前となれば、更らに大なる生活（三）の戰爭といふものを開始せなければなりませぬ、世

〔三〕次ぎの「生活難と佛教」とを參照せられたし、此一席は凡て次ぎの演說と關係して居るのです。

の中に於てすべての人の苦むのは此戰爭であります、敵は非常なる强勢を以て攻め寄るので、人生行路の難實にこれより甚しきはない、時代は進歩する、一足でも遲くなれば貧困となり、流離となり、一生浮ぶ瀨もないやうになるのであります、見よ世上の人、營々として日々此の生活に戰爭してをるのであります、諸君は日々の新聞紙上に職を求むるの廣告の頗る多きを見らるゝでござりませう、これらは皆な生活の戰爭に出陣せんとして未だ得られざる若武者が、刄折れ矢盡きて再度の戰ひを望む敗軍の將であります、われらは實に生より死に至るまで此戰爭を續けねばならぬのであります、何たる困難のことでありませう、よし一旦の勝利はありとも、兵誇りて少しでも準備の怠ることあらば、思はぬ所より大敵は押し寄するのであります、人生は實に生活の戰爭であります、抑もわれらは何か故に此くの如く戰はねばならぬか、斯く戰ふて抑も何を得んとするのであるか、人生の大問題はこゝにあるのです、其上にも尙死の運命は吾等の頭上に下つて戰へるものも戰はざるものも、勝てるものも、敗けたるも

〔四〕戰爭的に立教したとも見らるゝのは波斯のゾロアスター教では常に此の宇宙を以て善惡二神の爭ひとし、われらの心の中も常に此二心の爭ひを斷たないと說く。

のも、無常の風は時を撰ばず、われ抑も何が故に戰はざるを得ざるか、戰ひ戰ふて勝つ能はざるの時、われらの心は煩悶措く能はざるに至る、何者かよくこれを慰藉する、宗教なるものあり以てこれらに慰藉を與ふると稱す、宗教は抑も如何なることを說くのであらうか。

宗教の說く所も、矢張戰爭の福音であります、希臘や印度の昔の神話を見てごらんなさい、希臘のアポロの神といふは戰いの神にして、印度の阿修羅は常に爭ひを止めたることはなく、〔四〕波斯のゾロアスター教にては、善惡の二神を立て、善をアフランといひ、惡をアーリマンといひ、此二神は常に相戰ふて止まないのであるといひ、昔のイスラエル人の宗教思想の中にも、神の外にサタン即ち惡魔なるものがあつて、此の惡魔と神とは常に戰ひつゝあるのであるといふてをることがあるし、基督教の思想を以て雄大なる文となしたるミルトンの失樂園も、神と惡魔との戰ひを書き、釋迦牟尼佛が菩提樹下で端座六年の御修行の間には、諸種の惡魔がこれを妨げんとして魔王波旬は或は美女の姿に扮し或は惡鬼羅刹の相を示して

これを誘惑せんとしたといふことが、太子瑞應經とか、因果經とか、觀佛三昧經とかいふ御經の中にも出てをるのであるが、されば宗教も亦戰爭の禍害を說くのであるといふてもよい、これらの宗教や神話にあるのは何にも靈怪不思議のことではない、われ〳〵お互の心內の戰爭、精神上の爭ひを詩的に現はしたのに過ぎない、われ〳〵が無始劫來常に惱まされてをる大敵は此精神上の敵である、此敵の名を無明といひ又煩惱と名く、此無明煩惱の大敵は八萬四千の眷屬を從へて常に我が心內に於て戰ひを挑みつゝあるのである、此敵に打勝つにあらずんば、到底人生の戰爭の勝利者となることは出來ないのである、人生は戰場である、『世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴戶の波風よりも、尙ほはげしく甚しきは人生の戰場であります、生活の困難は常にわれ〳〵を襲ひ病氣は間あらば乘せんとし、誘惑は其周圍にありて、われを惱まさんとし、辛苦交到り、困難併せ來るのであります、少しでも油斷すれば社會の下層に沈淪するのみならず、甚しきは罪惡を犯して社會外に放逐せらるゝに至る、まことに恐ろしきは浮世の戰爭であります、この戰爭には如何にして勝つことが出來るであらうか、これは先づ宗教によつて心內の戰爭に打ち勝つのが第一であります、昔遠州の濱松と舞坂との間を往復してをる馬士に高塚の五郎兵衛といふのがありました、或る時のこと二十歲ばかりの僧侶を載せて例の如く濱松から舞坂の宿まで送りまして、宿の棒端で、其客は下り、五郎兵衛は馬を引いて濱松在の自分の家にかへり、馬の鞍をはづさうとしますると鞍に財布が結びつけてあるで、とりはづして中を改め見ると七十兩といふ大金がある、其頃の七十兩と申しますれば、大金でござりまするで、さだめて御出家も困つてをるであらうと、直にまた三里の道を引きかへし、夜更て舞坂に參りましたが、サテ何處の宿に泊つたやらわからぬ、宿屋を一軒〳〵尋ねたが、ソンナ出家の泊つた所はない夜明まで尋ねあぐんだが、終に知れないものであるから詮方なく、家にかへり女房と話をして、さてあの御出家も困つてをるであらうといふて、どうかして尋ね出し渡したいものぢや、それまでは佛檀にお

【五】心內の戰爭のことを面白く書いたのは炭山無碍羅師の臨寂妄です、これは曹源集の中に出て居ります、無明妄想を敵に吸へ、六波羅蜜の力で打ち勝つの道理を示したものです。

さめて佛さまに御預け申しておかうと、そのまゝ一年經ち二年經ちましたが、其出家は知れぬ、かくて三十年の星霜を經ましたが、五郎兵衛は矢張馬を追ふて其日〳〵に細き烟を立てゝをりました、或る時のこと一人の立派な出家を載せて參りますると、馬の上からいろ〳〵な話をして、丁度思ひ出すが今から三十年前に江戸の增上寺の御用で、京都の知恩院までゆく途中、こゝの所ろで馬に乘つて金を置き忘れ困つたことがあるのぢやとの問はず語り、馬士は聞き咎めそれは旦那、いくらばかりでござりまするさうだ小判で丁度七十兩、エイそれぢや、其時の馬士はこの私でござりまする、三十年前濱松から舞坂へ送つた御出家が大金を忘れてをかれたので、直ぐに後を追ひかけて舞坂の宿中、探したが知れず、それからといふものは、いつも氣をつけてはをりまするが、今に知れず貰は困つてをりました、旦那に遭ふたのは佛さまの引き合せ、どうか請取つて下されといふと、僧侶は、それは感心なこと、愚禿はあの晩、渡を渡りて新居の宿に泊り、初めて金のないのに氣がついたが、馬士のやうな賤しい仕事をするもの〳〵金

を預つてをるとも思はず、また何を目當に探すにも法はなく、當惑はしてをつたが、身の過と諦てやう〳〵、其事は濟ましたが、實に一時は困つたのぢや、併し三十年の其間おまへのやうな正直な人が預つていやうとは思はない折角のことだが、其金は私の方には無いと諦めて事の濟んだもの、今改めておまへに進せるから勝手に遣はつしやれ、といふに、馬士はお貰ひ申す位ならば今日長の年月預つては居りませぬ、どうか御持ち下されと我が家につれて參りますると、女房は佛檀より財布のまゝに金を取り出して渡しまするに、僧侶は感じ入つて今もいふ通り、わしの方では、ないものと諦めた金、殊に今は愚禿も宗內では指を折らるゝほどのものになつたで、金がなくとも困るものではなし、それでは今改めて進ずるほどに、これを資本に何か一商業すればよい、それにしても此長の年月、見れば其日の生活にも困るようだが、よく此金に手をつけずに居られた者だと申しまするると、五郎兵衛女房を顧みて、今でござるから申しまするが何を御隱し申しませう、其日暮しの馬士ではござりまするが、身體の丈夫な時分

は何ともありませぬが七八年前の事、私は永の病氣で家業は出來ず、女房が僅かばかりの手仕事にて其日を送つては居りましたが、醫師が私の病氣には何とやらいふ藥が入ると申し、其藥は一兩ばかりとの事、どうして〻今の身分に一兩の金の出來べき筈はござりませぬ、その時には餘程あの金に手をつけやうと思ひましたが、たとひ一兩たりとも手をつけては、折角今まで持つてをつた甲斐もなく、賤しいものと思はれるも殘念だし、且つは一旦佛樣に御預申したものに手をつけるといふことは、冥罰も恐ろしいと、女房とも相談をして濱松の問屋より女房の手仕事の代を先き借りをしてやう〳〵其藥を買ひましたことがござります、その時ほど心の迷ふたことはござりませぬといふに、借倡はます〳〵感じ入つて、これはおまへ方の正直を佛さまの御ほめになつて下さるものと思ひ請取りくれと、強て夫婦に渡し、其代りに愚袴も賴みがある、それは外のことでもないが、この金を資本に商買を初めたならば、此東海道を通る行脚僧とか順禮とかいふものに接待をしてやつてくれ、それを佛への禮と思ひ心置きなく此金を使へと渡して出立しました、其後五郎兵衛は其邊に立派な店を出して商賣を初めます〳〵繁昌して子孫連綿其家が今も巨萬の財產家として遺つてをるが、子孫も亦志をついで、行脚僧や順禮には接待をしてをるといふことです、今は如何か十五六年まへまでは續き居りしと、この五郎兵衛の如きは、よく心內の戰爭に打勝ちたればこそ、終に人生の戰爭の勝利者とはなつたのです、彼の詐僞の手段を以て巨萬の富を爲し、不義の金錢を以て榮華に誇るやうなものは、人生の勝利者のやうに見えますが、まだ心內の戰爭に勝つてをりませぬから、空中の樓閣で、直に消えてしまいます、先づ心內の戰爭に勝つといふ根底があつてこそ、人生の戰爭に勝つことが出來るのであります、若し此五郎兵衛が佛を信ずる念が厚くなかつたならば、終には此心內の敵に打ち勝つことが出來なかつたのであります、我等の力は弱いものです、佛の力をたよりてやう〳〵尙ほ今一つわれ〳〵を覆ふの大敵があります、それは今改めて申さずと

〔六〕宗教的信念により打勝つの理は後の生活雜と佛教及び解脫の趣味に出て居りますから參照して下さい。

【七】無常のこと并に死生のことは死の感想といふ題下に説いてありますから御照下さい。

も諸君の常に宗教者によつて御聞きなさる、【七】無常の大敵です、此敵はいつ何時といふことなく、われ〳〵を襲ひまして、念々刹那としばらくも止らぬです、かく申してをる其間にも無常の大敵はいつとはなしに、われ〳〵を老衰せしめ、いつとはなしに、われ〳〵を死に導きます、われ〳〵は如何にして此大敵に打ち勝つことが出來ませう、それはいふまでもなく、生を明らめ死を明らむる宗教的信念によるの外はありませぬ、宗教的信念によつて生死の道理を明め、生の希ふべきもなく、死の厭ふべきもなく、生といび、死といふは、一杯のコップの水の水蒸氣ともなり、氷ともなり、湯ともなるやうなもので、姿は變るか、元來水そのものゝ變らざるが如く、生といひ死といふも一時の變遷なりと心得ることが出來るやうになれば、我等は何んの悲むところもないです、毎度申しまする通り、今日あつて明日ないと思へば日の暮ははかないものだが、日が暮れてしまうても、やがて幾時間の後には旭日曈々として上る明日かあると思ふから何んともない、われらは宗教によつて此慰安を得ることが出來るのである、これが出來

てこそ生死の問題に平然たることが出來るのであります、

諸君人生は一大戰場であります生活の競爭ばかりでなく、精神界はいつも爭ふてをりまするぞ、生死の戰ひは、いつ如何なる時にも起つてをりまするぞ、諸君の敵は内にあり、外にあり、目の前にもあり、頭の上にもありまするぞ、古の諺に、男兒門を出れば七人の敵ありといひましたが、唯に七人や八人の敵ではありませぬ、心のうちにも八萬四千の敵はあるのですよ、目に觸るゝところのもの何物か諸君の心を惑はさざらむ、耳に聞くところのもの何物か諸君を苦めざらむ、奮鬪、努力、以て能くこれを降伏し、これまでは物によつて迷はされたる心、外界によつて使はれたる心を、今は心を主として外界を支配するやうになり、光風霽月、花來れば花、月來れば月と、これを我が心に寫して少しも頓着のないやうにしてゆくことが出來たならば、恐らくは浮世の戰場に敗けることはありますまい、尚ほ題を改めて説くことにいたしませう。

(五) 生活難と佛教

私の今日の演題は、唯今御紹介下すつた通り生活難と佛教といふ題です。私が此演題を出しましたのはいろ〳〵の事情がありますが先づ何人も御承知のは此頃非常に自殺をする人が多いといふことであります、それは何に依つて自殺するか其本人の動機は分りませぬけれども、二三年前の統計に依りますると、一年の間に自殺をする人の數が八千九百〇六人ある、是は明治三十九年度の統計です、此年は比較的少なうございますれども、明治三十七年の如きは一萬百四十九人でした、兎に角一萬といひ八千といふと、日本の人口五千萬に較べると僅な者であるが、之を時間に割當てゝ考へて見ると、一時間に一人以上自殺して居る割合になる、時計がチーンと鳴ると何處かでドブンとやつて居るといふ工合で、日本の人口が無駄に斯の如く自殺して減る、此自殺の主なる原因は、何であるかといふと大抵精神錯亂(せいしんさくらん)——即ち狂氣になるのであるが、其原因は、生活難、生計困難といふことが實に人を自殺せしむる第一の主なる原因であると思ひます、そこで私は生活の困難は第一に考へて見なければならぬことと思ふのであります、それで生活の困難を感ずるのは人間一生の間に幾つ位の人に多いかといふことを先づ考へて見なければならぬから、自殺す即ち子供の時代には生活の困難を感ずる人はございませぬから、自殺する人も少い、それから青年十七、八から二十四、五となると、生活の困難を感ずるには違ないけれども、自分の情熱(じょうねつ)燃ゆるが如く前途に希望を有つて居るので、望の光明があるものでありますから、今日此樣に苦んで居つても何時かは此境遇を見返すことが出來る功名富貴手に唾して取るべしといふ考があるからそれ程生活難を感じない。

生活の困難を感ずるものは、三十前後の中年に多いのであります、私は是より中年の悲哀(ひあい)、今日の中年者の悲哀といふ事に就て、お話して見たいと思ふ、生活の困難になるといふことは文明の今日に於ては免れぬことでありまして、最も手ッ取り早い話をすれば世の中が段々進に從ひまして、

（二）自殺者年齢別を示すと、十六年未滿は百四十人、十六年以上十八年未滿は二十五人、十八年以上二十歳未滿は六百二十人、二十歳以上三十歳未滿は二千四百八十人、三十歳以上四十歳未滿は一千六百十人、四十歳以上六十歳未滿は二百四十一人、六十歳以上は九人、五生活難なる者は三十歳以上四十歳未滿にて三千七百九人、此外に年齢不詳のもの大體此の如くあるが、これは三十九年度統計です。

人間が殖えて行く、人口が殖える、人間の數の殖えることは幾何級數的である、鼠算的に人間の數は殖える、併し其割合に食物は殖えないから食うものが無くなつて、人間が殖えれば殖える程生活に困難する、是は當り前の話です、今日文明國と威張つて居る國々である、歐羅巴各國の中でも、其國で出來まする物だけで其國の一年の食物が足りるといふ國は一もない、一番食物の多い國は墺地利匈牙利といふ國で、其國で出來まする食物で國民全體の食料に六日分だけは足らぬ、墺地利、匈牙利の國民は六日だけ一年の中で食はずに居れば、丁度巧く行く、ところが是は一番食物の多い墺地利、匈牙利でさうでありますから、更に其次ぎの佛蘭西といふ國はどうであるかといふと、佛蘭西は一年に其國で出來るだけの食物を國民の頭に割當てると三十五日分足らぬ、大分足らぬのです六日位なら我慢も出來るが、三十五日分といふと辛抱が出來ない、それから次ぎは、今度は獨乙といふ國に參ります、獨乙はどの位足らぬかといふと、獨乙の食物は八十五日分程足らぬ、ちよつと三月ばかり獨乙は飯を食はないで居れば平均

〔二〕勿論詳しいことは解らぬが聖德太子時代には人は四百九十八萬人、德川時代になつて將軍吉宗の時には二千五百萬人、十一代家齊の時には二千七百萬人であつたとのです。

して參ります、獨逸は八十五日分足らぬ、それならば英吉利はどうかといふに、我同盟國の英吉利は此國で出來まする食物は此國に住んで居る人の頭割にして見ると、一年に二百八十六日分足らぬことになる、それならば英吉利人はどうして活きて居るかといふと、殖民地、屬國或は外國より輸入して來るものを合せて足して居る、自分の國だけでは食うことが出來ない、二百八十六日間は絶食しなければならぬことになりますから、我國内ばかりでなく殖民地屬國からの食物輸入其他海外貿易等に依らなければ、到底歐羅巴文明國は生活することが出來ない、段々人口は增して來まするが、其割合に食物が殖えないのであります、少し古いが醍醐天皇の御朝千七十一年前でありました、其時に調べて日本の米が約二千萬石〔二〕出來た、其時分に日本の人口はどの位かといふと七八百萬人であつた、それに對して二千萬石といふのだから生活は樂であつたに相違ない、ところが明治の今日になりまして、米の出來ました高は一番餘計出來た年で五千三百萬石、平均して四千五百萬石出來た、日本の人口が約五千萬人と致

しましたところが、一人分が一石にしか當らぬ、一人一石とすると一日分が三合になります、併しそれを皆な飯として食う譯には行かぬ、其半分は酒にもなれば團子にもなり、菓子にもなる、それで一人分三合の半分といふと一合五勺に當る、如何に少し食つて居たにしたところが一合五勺では活きて居られる筈はない、日本でも食物は不足して居る、併し今日に於ける生活難の原因はこればかりでない、文明の進むに從ひ一般に贅澤になつたのも其原因尤も機械の發明によつて勞働者が職を失ふといふのもあつて兎に角文明の進むに從つて生活の困難になるといふことは、是蓋し已を得ざるものである、げれども若い人はさうは思はぬ、生活難を感ずるのは中年の人である、若い人の考へはどういふ風であるかといふと、先づ若い人の一番の悲みといふことは大抵戀——ラブ、此戀の失望といふことが、青年者の悲哀になつて居るさうであります、能く昔から人が言ふことに、二十にして戀を思ひ、それから三十にして名を思ひ、四十にして利益を思ふ、人間二十前後の青年は氣候で例へて言へば、春の氣の如く若葉の

〔二〕後の解説の處參照して下さい。

萠出るが如く情緒纏綿として居る、即ち青年は戀を思ふ、さうして自分の目的としたる人と添遂げることが出來ないといふことになると、茲に非常なる悲哀を感ずるが、生活に就てはそれ程でない、三十以上になると其樣なことは少ないです、戀の失望といふことは三十以上の人間、中年の人にとは全くないと斷言は出來ない、固より稀には多少あるけれども、青年の時代の燃ゆるが如き立派な美しい美的のものではない、それはどんなものであるといふと、非常に現實的なるものである、肉欲が盛んであるから四十男の戀の失望は巧くいかなくても、青年の如く華厦の濕とか、淺間山の噴火口に行くといふやうなことはない四十男の戀が不成功だといふときは、それでは仕方がないかから又外でも聞いて見ませう位のことである、唯目的が不成功だといふだけで濟んで了う、四十男には青年時代程の情熱は起らない、通常の場合で三十、四十にして良人に別れるとか、妻を失なつたといふときは、それは人間であるから悲を感せぬことはないけれども、其悲は單に自己の缺損に對する悲哀であつて、戀愛に依つて生ずる悲

哀ではありませぬ、若し戀に依つて生ずる美しいものがあるとすれば、其美しいのは自分の若いときのことを思出して、それを悲哀の情に現はすのである、それは美しいものではない昔から斯ういふことを言つて居る、二十後家は立つが三十後家は立たぬといふことがある、それは二十代の中の後家は、まだ戀がありますから操を守つて居るが三十になりますと一身の振方に困つて了う、皆さん考へて御覽なさい、三十以上になつて來ると子供もあるし、身の振方に困る、所謂生活難といふことがあつて食うことが出來ない、どうも良人に離緣して貰つては困るからであります、さういふ工合に今日をどうして生活して行かうかといふ問題になつて來る、茲に於て宗敎家は死んでの後どうするといふことよりは、今日只今食へないといふこと程直接な問題はないのであります、諸君にはさういふ經驗はなからうけれども、實際妻は病床に苦み子は飢に泣く、働かうとしても働くことが出來ず、食ふ米はないといふことになつたならば、人生の悲慘此上はありませぬ、寧ろ死んで了はうかと思つても、死ぬ譯には行かぬ、自分だけなら兎も角妻もあれば子もある、右を顧みても、左を見ても、自分で養はなければならぬ責任がある、どうしても自分が働かなければ食ふ米がない、食ふことが出來ない、どうしてもありませぬ、此生活難といふことは、實に吾々をして、終に此世の中を厭はしむる動機となるといふことになると、人生の慘事此上はだから宗敎界の人を救うといふ職にある者は、此生活難といふ問題に迷うて居る中年者、其人に慰安を與へることをしなかつたならば其宗敎は今の宗敎家のやつて居る仕事は、若い人、青年者を敎へることは知つて居る、それから老年の者を敎へることも知つて居る、けれども中年者は誰が傳道し、誰が布敎して居るかといふことは現實の問題です、此現實の問題に就ては何もない、生活難は此中年者に限るのである、だから宗敎家は此中年者に慰安を與へなければならぬ、青年者になると、今は生活に苦んで居つても行末に光明がある、自分は今斯う苦んで居つても後にはきつと

立派にやつて見せるといふ青年には前途に光明がある、私は苦學生ですと云つて居るから聞いて見ると、車を輓いたり、新聞配達をしたり牛乳配達をしたりして學問をして居るといふ、私はそれは樂學生だと思ふ、本當の苦學生といふのは國元から金を貰つて、下宿屋の二階に居つて金を使うて學問するのは實に苦しいけれども親から金を送つて貰うので、親の手前仕方がないから勉強する、是は本當に苦みだけれども新聞を賣り車を輓いて學問をするのは、前途に希望を有つてやつて居るのだから、これは樂んで學問をして居るのである、前途に望みを有つて居れば如何なる艱難も忍ぶことが出來る、ですから青年者にあつては此前途に望みがありますから、生活上の苦みがあつても、人をして其分に安んぜしめて功名富貴手に唾して取るべし、豈我【四】を妨ぐるアルプスあらんや、青年諸君は人生の苦しいといふことがあつても、社會の中に立つて前途に十分の望を置くから、現在は出來るだけのことをして樂んで居る、それが中年になると勇氣が沮喪して了つて、何の爲に此世の中に居るか分らぬ、活きて居りたい爲に活きて居り、食うて居りたい爲に食つて居る、平凡な人になつて了う、多くの人は沼々として皆是なり、青年時代の學校に居る時分は、彼何人ぞ我何人ぞ、彼も人なり我も人なり、と言つて居つた者が學校を出ましてからは、あの男は學校に居た時分はなか〳〵の秀才であつたが、今彼處の役所に行つてからは大變に平凡になつて了つて、親子兄弟睦しく暮して居る、此頃は子も出來るし、彼は金を溜るやうになつた、さうなると、人間はもう氣の毒なものです、

【四】此語は有名なナポレオンが嶮峻なアルプス山を越えようとした時にこれを止めるものに對して壯語で精神一到何事かならざらんといふた意に取つてもよろしい。

折うなると親子兄弟安々生活して、是だけの月給があれば宜と言つて居つても役所から歸つて來て晩に、細君と晩餐を食べながら酒を飮んで、過ぎ越し方を考へ將來のことを思ふて見ると、折うしたいあうもしたいと、思つて居たことは一も得られないで、今自分は僅な月給に安じて居るのは實に情ないといふ悲哀の情が起つて來る、一念此所に至ると如何なる者でもホロリと酒杯の中に涙を落さいるを得ぬ、是は人情である、殊に中年者の困ることには、彼から青年者が追駈けて來る、自分はまだ若い積り

で居つても後から青年が追駈けて來て、間誤々々して居ると飛越されて了う、人間二十五歳位までは進歩が早いがそれからはさう進まなくなつて了ふ、それに加へて一方には生活難といふものがあつて、幾ら進んで行かうとしても其所に深い溝が出來て居る、何にツ乃公が一番奮發と思つても先を見ると、人生僅に五十年、最早後十年しか働くことが出來ない、何時の間にやら死ぬ方に近付て居る、自己の存在を否定せられて居るといふことは我々に實に何とも言へない悲しい感情を與へる、常々何の其樣なことを言つて威張つて居る人でも、中宵人なく夜靜なるとき過去、現在、將來のことを考へて見て此先を何年かを此境遇に甘じねばならぬかといふことを考へると、何人も實に情ないといふ感じの起らぬ者はなからうと思ふ、此中年者の悲哀を慰め、人生の活動に向つて慰安を與へなければならぬ、それをしなかつたならば終に自殺といふ忌はしきことを社會に生せしめる、私は曾つて斯ういふことを言つたことがある、或はお聞きになつて御記憶になつて居るお方があるかも知れませぬ。

[五]生は我が乘込み、死は我が降りる所である、併し人生の悲哀は流車に乘つて旅行、流車の如きではない、所謂流車の降りるが所定もつて居る所より何の、死して生れ來たか、死ぬべきかやら、生の前に冥く、死の後に冥しと眞に道破したもの。

世の中は丁度[五]流車に乘つて旅行するやうなもので、例へば新橋の停車場から、大阪なり、京都なりに行かうとして、どうも新橋では人が澤山で窮屈である、併し少し辛抱して居る中には幾らか降りて樂になるだらうと思つて居ると、平沼邊で少しは降りる人があるが、又乘る者があるから矢張窮屈である、時に依つては乘る方が餘計なことがある、國府津へ行つても駄目だ、箱根を越えたら少しは樂になるだらうと思つて居ると尙又乘る人がある、沼津でどうだらう矢張いけない、靜岡ではどうかまだ樂にはなれない、丁度人間の一生が此通りで、今年は實に苦しかつたけれども來年はもう少し樂になるだらう、來年は樂になるだらうと思つて居る、次きの停車場に行つたら少しは人が減るだらう、來年は樂になるだらうと言つて、漸く樂になつたと思ふ時分には自分の目的地大阪なり、京都なりになつてもう、降りねばならぬ、今年は斯うでも來年はと言つて居て、漸く樂になつた時分はもう片足を棺桶に入れて居るのである、さういふ工合に是から先のことを考へると人生は實に苦しいけれども、此人生と

ふ、瀧車に乘つて、吾々の爲すべき仕事が自分の一代限りで、今日した仕事が直に消えてしまうものと思ふから、さういふ悲哀な考へも起るけれども、宇宙の眞理を達觀して見ますれば、吾々の一言一行は決して今日限りで消えるものではないといふことを自覺することが出來る、私は斯う思つて居る、吾々が此世の中で仕事をして居るのは、白紙に印形を捺して居るやうなもので、其印形たる我身體は滅して了うことがあつても、一旦捺した白紙の印形の痕は消えるものではない、宇宙といふ大なる白紙には吾々の一言一行皆其痕を殘す、此印形である我身體は、五十年七十年で滅して了つても其印した影は天地と共に何時までも消えるものではない、さう思ふと吾々が斯うして居るのは實に詰らぬことのやうではあるが、其印影は天地と共に盡きざるものである、決して吾々の仕事は一時的のものでない、永久的のものである、既に其仕事が永久的不滅のものであるといふ確信がありますときには、日々天地の化育に依つて此人生の生活を爲すといふことは苦しいことであるけれども、それはなか〳〵さうは

樂にはいかぬが、其我する仕事は天地と共に不滅のものである、其一言一行は社會の發展を圖り、其道を行ふ心は永久的であるとすれば、吾々が此世の中で活きて居りたいが爲に食つて居り、食いたいが爲めに働いて居つても、其一言一行が此宇宙に影を遺すといふ大自覺があれば、此日常の苦しい生活の中にも自然に妙味を感ずることが出來る、我は天地に我が道を行ふといふ心があれば食物生活の道は自然に出來て來る、其道を行ふといふ中には自然慰藉も出て來る、吾々お互は隨分生活には困難する苦しい思ふに任せぬことが多い、思ふに任せぬで苦しいが、併し又吾々は一方から言ふと實に便利な心を有つて居る、心次第でどうにでもなる、試に新聞を手にして三面記事を讀んで見ると出齒龜のやうな者が澤山ある、或は盜賊詐僞などのことが澤山ある、斯んなことを諸君の前でいふのは失禮であるけれども、ひよつとすると吾々は出齒龜にも、泥棒にも、成りかねない心を持つて居るのではないか、少し間違へば出齒龜、泥棒、詐僞になり兼ねない、曾てバンヤンといふ人が、曾て監獄に引かれて行く囚人を見

[六] 傳敎大師いふ、衣食あり、道心なし、道心に衣食あり、道心あれば衣食は自然に來る、衣食を主とすることは道心はなくなるとの意である。

て、吾々は宗敎を信ずるから斯うして居るやうなもの丶、若しこれがなかつたら彼の監獄に入れらるゝものは我であつたかも知れないと言つて居る、吾々は幸に父母の敎を受け、敎員の敎を受けて居るから惡い方には向はぬが、ひよつと間違へば惡いことをし兼ねない心を有つて居る、吾々の心は實に危險千萬な者ですよ、今斯うやつて居る中に諸君の心は聖人のやうであるが外へ出ると直ぐに美味ものが食べたいといふ心が起る、食いたいと思はなくてもあゝ美味ものがあると思ふのは食いたいと同じ心だ、美味と思へば食いたくなる、食いたいけれども金はない、仕方がないから駄つて取らうかしらといふのが順序だ、其樣な賴りない心を人は持つて居ながら、自から萬物の靈長だなどゝ言つて居る、併し同じ新聞に忠義な人や孝行の人が出て居る、その人には決してなれないことはない、吾等ではない聖人君子だつて吾々だつて別に變つた心のある譯ではない、聖人君子も吾々も同じ心であるとすれば、吾々も聖人君子の如くなれるのであるが、一歩を誤つた下に行くと此樣な惡人となるから、自から自分を警戒して惡

【七】パンヤンは有名な基督敎信者で天路歷程を遺はした人です。

は、退け、善には進んで、さうして自分は宇宙の大道を行ふものなりと大自覺を以て居つたならば、今は如何に苦んで居つても終には此苦みを脫けることが出來るといふ勇奮の心を以て行かねばならぬと思ひます、祝子【八】

此圓滿な心で欠け目をなくするから、欠け目の多い人生の爲めに圓滿な心と欠け目にしてはならぬといふことがある、われ〳〵も此圓滿な心を以て生活難の欠け目を圓滿にせねばならぬ。

【八】祝子小實に就つ

(六) 通佛教の原理

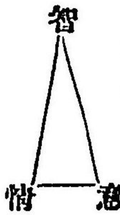
一 佛教の三方面

諸君、題して通佛教の原理といひましたが、佛教八萬四千の法門、五千七百の經卷、十三宗四十幾派に分れて居るのでありますから、之を僅か二時間や三時間で御話することは非常に困難でありますが成る可く簡短に各宗の要領だけを話して見ようと思ふのであります。

さて之れを御話する前に、先づ定めて置かねばならぬのは佛教――否な廣い意味で申せば凡ての宗教――の目的とする所は何でありませう、之れを學究的に詳しく詮議をすれば宗教の定義と申すことでも一時間や二時間を費さねばならぬのでありますが、今は極く常識的に、われ〳〵お互の心の落ちつきをつけるものであると見て置きます、かう見れば一寸解るのでありますが、さて考へて見ると此心といふものが解らぬどこが解らぬか、どこといふより其心といふものの有るか無いかが既に疑問です、諸君は心に有ると思ふて御いでになりませうが、凡そ世の中に有るといへるものは目に見ることが出來るか、耳に聞くことが出來るか、トニカク客觀的に存在して居らねばなりませぬ、心は有るといふならば圖か方か扨も亦三角か、誰も見た者はない、見たものが無ければ有るのではないと思ふて居るのです、然らば無いか否な、其無いと思ふて居るのは我が心だ、然らば有るか、有るとは云はれぬ、無いか、無いとは云はれぬ、天台大師の御語に、之を有といはんか質礙なし、之を無と云はんか慮想を起す、強て名けて妙といふとある通り、『移り行く初めもはても白雲のあやしきものは心なりけり』だ、心の本體は暫らく妙と云ふの外はないが、心の現象は確かに解る、心理學者は、心を三方面に分つて智、情、意とした、この分類は陳腐だが、矢張り便利でありますから之に據ることにいたします、智といふのは物の道理を知るの作用で、情といふのは惜しい欲しい可愛い憎い、意といふのは心に決めてゆくことで、實際自分で自分の心を考へて見ても此三作用のあることは否定が出來ない、併し此三つは互に關係して居つて決

〔一〕宗教の定義は古來種々の說があまりますが、宗教即ち英佛獨等の國語で所謂レリジョン(Religion)はラテン語のレリギオ(Religio)から來たので物と結び付けるといふ義でラクタンチウスといふ學者の說によると宗教とは神と人との結び付けであるといふて居る、近世の學者の說によると、有名なヘーゲルは宗教とはわれ〳〵の有限なる意識が其の本質に於ての無限絶對なる神たるの知識であるといひ、シュライエルマッヘルは宗教とは神に對する絶對依賴の感情であるといふ、宗教は神を居るが、神は居るのみで之を知るの智識又神にのみ依賴するの感情ではなく、智情意に亘る全體の作用に於て神に歸着の精神を興へるのであるといふ、トルストイは更らに宗教は人の精神生活なりとまで角に角いふて居るが、兎に角宗教は人の精神を生活なりと知るなれば香人も活ける中樞たらしむるものであるされば宗教は智一方にのみ偏するものでもなく情意の方にのみ偏するものでもないことは明かである

して離れるものではない、唯だ情に重きを置く時は智と意とは裏面に潜み、智に重きを置くときは情と意とが潜むといふやうに、三角形を爲して、智を頂點とすれば、



情と意とは底となり、情を頂點として見れば智と意とが底となつて居るやうなもので此三三にして一一にして三といふことが出來る、今、佛教は精神全體の安慰を得ようとするのですから、自ら其解說も三方面に分れて、智の方からいふ時は哲學的・學問的でありますが、情の方からいふ時は純感情的・宗教的であり、意の方からいふ時は倫理的・道徳的であります、更に言を換へていふ時は智に於ては解を旨とし、情に於ては信を主とし、意に於つては行を眼目とし、此三つによつて佛果を證することが出來るといふのであります。(二)信解行證の四字は佛教の全體を言ひ現はした語と見ることが出來ます。云ふまでもなく智の目的は眞、情の目的は美、意の目的は善で、此の眞善美の圓滿なる境涯に至つて初めて佛教の目的を達し、佛果を證したといふことが出來るのでありますから、

智(哲學的)―眞―解
心 情(宗教的)―美―信―證
意(倫理的)―善―行

となります、私は常に此順序で御話をいたしまして、最初に教理、それから信仰、其次ぎに道徳といふやうに說くのですが今は時間がないのですから教理を主として他の二方面は略しておかうと思ふのです、併し佛教の教理は他の哲學などと異つて唯だ理智のみを語つて情意を言はぬのではありませんから、教理を御話しいたしまする中に、自ら信仰や道徳が含まれて居るのであります、人間の心には此三面があるのですから、一面のみで安慰を得やうとしたからとて得られるものではありません、人に金を與へますのに、金さへやればよいからとて拾圓札を一枚ムキ出して、サア持て行けといふては快く受取るものではありませんが、之れを紙に包

(二)佛教の究竟目的は佛果を證するのにありますが、その道程としては各宗がおの〳〵主とする所があろ、唯だ天臺は主として解から入らんとし、淨土門は主として信、律宗なぞは主として行、禪宗は直に證といふので、これは其の主とした所を見たので此の四つは缺くことは出來ないのです、

み水引をかければ快く受取られる紙に包むだからとて捨札が百圓になるわけではないが、そこが情です、理智と情意とは何事にも融和せなければならぬもので佛教は實に能く之れが融和せられ居ると思ふのです。

二　佛教の教理

閑話は休題として直に本題に入りますが人の眼は先づ外を見て而して後、内に向ふもので、吾等が第一に起した疑ひは、吾等の日常目睹する所の宇宙の現象です。滿てる月にも散る花にも厭くることあり、咲く花にも散ることがある朝の紅顔夕の白骨で、移り變るといふことは爭はれぬ、孔子が逝くものは[三]ヘラクライトスが萬物は變化すといふたのも、皆な此の現象を觀察したので、佛教では之れを諸行無常といふ、諸行無常といふと佛臭いが實は萬物諸行(諸行)は變化(無常)すと云ことだ、此變化には一定の時間がある、これを一期無常といふ、一期といふのは一期間のことで生れて死す、出來て潰れる、此間を四期に分つて成、住、壞、空といふ、人の一生は[四]成は出來るので住はチャント出來た形、壞は潰れかけたので空は潰れてしまつたのだ、例へば[三]ヘラクライトスは希臘古代の哲學者で火を以て宇宙の原始と見做し且つ萬物は一瞬時も止ることなく變化して居るものであるといふた人です。

も此通であるが、此一定の時間に變化のあるのは、瞬間毎の變化が集つたので一刻一瞬といへども變化のない時はない、今見て居る間にも變つてゆくこと水の流れよりもまだ早い、これを[五]刹那無常といふ、まことや人の呼吸は墳墓に向ふ進軍の喇叭で、『今までは人のことだと思つたに、おれが死ぬとはこいつたまらぬ』たまつてもたまらなくとも無常の風は時を擇ばぬ、かくの如く萬物は變化すと見て行くのは時間的觀察です。更に空間的觀察を以てすると、萬物は皆な元素の集合によつて成ると見る、デモクライトスが萬物の根源を以て元子と立てた如く、佛教では極微の所成といふ、極微といふのは極く微いので、之れを七倍すると一微、一微を七倍すると一金塵、それを七倍すると一水塵、其又七倍が一兎毛塵、これを七倍して羊毛塵、其又七倍が牛毛塵、その又七倍が日光の照す時に窓の隙に見える埃のやうなもの之を隙遊塵といふと示すのですから埃の八十三萬分の一位が極微といふのです、此極微が集つて國土山川艸木や人間の身體となつたと見るが併し飜つて考へて見ると、極微を更らに七分し、

それを七分し、割て割て割ればどうなる、有ると思はれるだけで、見ることも何うすることも出來るものでない、して見ると、宇宙は有ると思はれるものゝ集合で、其の實は何にも無いのではなからうか、何にもない所へ有ると思ふ心があつて有るので、心がなければ何にもない、此宇宙萬象は唯心の所造で、心あるが故に物あり、世界があるので其外には何にもないのであらうと考へてこゝに唯心説が成り立つ。

一體宇宙の萬象を觀察して、哲學者は之を主觀の心と客觀の物とに分つので、解り易く云へば宇宙萬象、いろ〳〵のものがあるが、之を二つに分てば我と我でないものゝ外はない、我といふのは主觀、我でないといふのは客觀、主觀は心、客觀は物、即ち

宇宙萬象｛我＝主觀＝精神＝心
　　非我＝客觀＝物質＝物(色)

に二分することが出來る、其内物質に重きを置くのが唯物、精神に重きを置くのが唯心で、此二つが往古來今相爭ふて居るが、我佛教＝殊に實大乘

〔六〕スピノーザは近世哲學の泰斗で萬有は即ち神なりとて汎神論を唱へた有名な人です。

＝に於ては決して此二つを別なものとは心得て居らぬ、色心不二で、心と物とは別なものでない、物といひ心といふと解し難い、これを我が身體(物質)と心(精神)との關係に見て御覽なさい、心に心配があると、食が進まず、身に病があると心、快々として樂まぬ、若し此二つが別々の物ならば、心、貴樣勝手に心配しろ、身體は勝手に物を食ふとか、身體は勝手に病氣しろ、心は勝手に喜び廻ると行くべきだが、さう行かないのは、身心一如、色心不二の證據ではないか、〔六〕スピノーザは心と物とは同一圓形の二方面で、外から見ると凸となり、内から見ると凹となるやうなものだといふた如く、佛教では此二つを別とは考へない、物と云ひ心と云ふも實は同一實在の上の假相に過ぎないと觀察して、こゝに體相用三大の説明を用ふるものであります。見渡せば柳櫻をこきませて宇宙の現象は區々さま〴〵で一つとして同じものはありませぬが、其本を推し、源を探りつゝ見ると、皆な同じくないものはありませぬ、現相の上から見れば土瓶、茶碗、水挿、盃、花瓶といろ〳〵に違ひ、其土瓶一つとしても、同じものはないのでありますが、其の本體たる

土といふ點では之れらのものは皆な同じで、違ふものではござりませぬ、否な、實に土瓶と茶碗ばかりぢやない、此私と土瓶、これも異つたものではござりません私が、かうやつて生きて居るのは何の御蔭であるかといへば米を食つて居るからで、米は何を食つて居るかといへば——いろ〳〵なものがありませうが——先づ土です、して見ると米は土の子で、私は土の孫に當る、今でこそ私となつて威張つて居るが、遡き昔は、ヤアお互に土の仲間であつたと握手することが出來ないでもありません、此理を推して考へれば天地同根、萬物一體、其現相の上から見れば別々ですが、其本體から見れば皆一つだと見ることが出來るのであります。かく物質界が統一せられて居るばかりでなく、精神界も其通りで、いろ〳〵な見聞覺知したことが意識の中に集められ、受、想、行、識と積集せられて、今見たことも昔のことも一つになつて我が心の中に收る『相見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり』で、物を思はざりし昔の心も、相見ての後の今の心も同じく我が心となつて統一せられて、こゝに我見識即ち末那識なり、更

【七】佛教では此の我といふ事を精神と物質との兩面に見、物質の方は色といふて形のあるものゝ之れは地、水、火、風、の四つから成るこれを四大といひ、心の方は受と受け込む感覺と想とかモフ思想、行と動作決意、識と認識丁別の四つがあるといふので此の四つに色を加へて色受想行識の五蘊といふ五藴皆空といふのはこれである。

にこれ等を主宰し、吾等が心の奥底となる阿賴耶識があると、して見ると物質界も統一せられ、精神界も統一せられて居る、而して此色たる物質界、心たる精神界とが離れたものでないとすれば、物心の根底たる同一本體がなければならぬ。

客觀(物)の統一
主觀(心)の統一 ｝宇宙の本體

と見て行くのが思想當然の順序であると思はれる、かく考へて見ると物といひ心といふ宇宙さま〴〵の現象は皆なこれ宇宙の本體たる水の上の波で、唯だこれ、因緣によつて現れたる一時の相に過ぎない、中觀論に『因緣所生の法、我は即ち空と說く』とあるのによれば物もこれ因緣所生、心もこれ因緣所生、共にこれ一切皆空、唯だ平等一如宇宙の本體たる眞如あるのみと見るの外はないこれ果して正當なる觀察であらうか、相をいへば即ち因緣の上に現はれたる假りの姿、體をいへば一切皆空、しかも此現相は此本體を離れたるものでなく、本體の空の明鏡の上に萬象差別の假

相を現すので、[八]無一物處無盡藏花あり月あり樓臺あり、本體を離れて現相なく、現相を離れて本體はない、差別の現相そのまゝに平等の本體、平等の本體そのまゝに差別の現相、本體たる眞如の水の上に現相たる萬法の波あり、現相たる萬法の波は即ち本體たる眞如の水であるから平等即差別、差別即平等、眞如即萬法、萬法即眞如と説き、こゝに水波不二なる現象即實在論を立つるのが通佛教の根本思想です。唯だ徒らに現相の差別に迷ふものは、[九]無邊俠禪の所謂『鐘はならない撞木がなるよ、撞木なければ音はせぬ』（寥境不寥人）『鐘はならない撞木もならぬ、鐘と撞木の間がなる』（人境俱不寥）の境に迷ふものです、本體のみを認めて現相との關係を見ないものは『鐘はならない撞木もならぬ、鐘と撞木の間がなる』（人境俱不寥）の境を看破せなければならぬ、相對といふもの、宇宙の妙用は相即相入にあつて『鐘もなります撞木もなる』よ、鐘と撞木で音がする』（人境俱不寥）の境を看破せなければならぬ、相即といふのは、萬物相互が密接な關係を持て居ること、相入とは多は一に收り、一は多を含む微妙の働きで、現相から見れば個々別々のものだが、そ

[八] 此句は有名な蘇東坡が宇宙の妙趣を示した詩で、案外不高意高哉、倘着丹青墮二來、無一物處無盡藏、有花有月有樓臺

[九] 臨濟大師の四料簡といふのは、奪人不奪境、奪境不奪人、人境俱奪、人境俱不奪です、此の人と境とを主觀と見、客觀と見て行くといふのを面白い觀察が出來ます、此に擧げた無邊俠禪は通武子が俚諺なりと説明せられたのです、

れが互に圓融して相調和して居る、一塵法界を盡くし一彈指法界を動かす妙と云はんか奇と云はんか、試に私が此机上のコップを右より左へ動かして見る、これ決して大事件ではない、併しよく考へて見るとコップの此机上にあるのは地球に引力があるからだ、然らば此コップを右から左へ動かしたといふことが何等か地球の引力に影響を與へたといふことは爭はれない、既に地球の引力に影響を與へたとすれば、地球と太陽とは引力關係だから太陽の引力に影響を與へ、太陽系全體に影響を與へ、太陽系と他の星との關係も亦た引力關係であるとすれば大千三千世界無量恒河沙數の如き星と星との間にも影響を與へる大事件であります——これは譬喩ですが——一物の宇宙に關係することは之れでも解ります、更らに此の机の上の塵一つを考へてごらんなさい、此塵はどうして來たといふことを考へるに就ては空氣の運動、風の模樣も考へねばならず、此塵が紙片なれば紙は如何にして出來たといふことを考へねばならぬ、かくして考へを進めて行くと宇宙全體を研究せねば此塵一つが解らぬ、即ち宇宙

法界の理は悉く此塵に收るとも見られる、これを【十】華嚴宗では事々無礙法界と見て、現相のみを見るのを事法界、本體のみを見るのを理法界、本體即現相と見るのが事理無礙法界、現相、互に圓融の關係を見るのを事々無礙法界といひ、【十一】天台では本體を空、現相を假、其妙用を中といひ、此空假中の三諦は天然の性德なりといふてあります。

【十】華嚴宗は四法界を立てるので、終に事理無礙に至り萬物は相即といふて互に關係して居るものであり又相入といふて一體となつて居るものであると說くツマり萬物相關萬物一體の道理です、

【十一】天台の三諦のことは後に始終心要の講話がありますから參照して下さい

此宇宙の現相を部分的に見た時には何の妙もないようであるが、全體を達觀する時には何人も靈妙の感に打れざるものはない。一つ〳〵の花を見た時には唯だ美しと感するのみだが、よしの山巓の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけるの姿を見た時には言語同斷、心行所滅、『これはこれはとばかり花のよしの山』はあるが、八千八島、青螺、海上に橫る松島の景を見た時には『あゝ松島や松島や』といふて一句を咏み得なかつたといふ、これ僅に吉野の花、松島の景ですこれでさへ此くの如しとするならば、況して宇宙の大靈、天地の妙用、吾等は何の語を以てこれを形容することが出來ませう、これを人格的に見て佛といひ、渾身の至誠を以て『あゝ有難や南無阿彌陀佛』と申すは、蓋し人心の秘奥から出た自然の聲であります。神人を造らず、人神を造るといふ冷やかなる哲學の見地からいふても、吾等が此宇宙全體を佛と見るのは當然のことで、眞言宗では此宇宙を以て大日如來と見ます、大日といふのは、譬喩的に意譯したので、梵語では毘盧遮那、譯して遍一切處といふ、即ち無限の時間を貫き無限の空間に通じて遍からざるなき宇宙の當體です即ち此宗に於ては大日如來の體を以て六大として敎を立るので、前にも申す通り、宇宙萬法は之を色（物）心の二法に分つことが出來る、今此色法を地水火風空の五大とし、心法を識大として宇宙萬物一として此六を具へざるものはないといふので山河大地、草木禽獸、皆な此六がある、地大といふのは萬物には固る性があり、水大は濕ふ性があり火大は燒まる性があり、風大は動く性があり、空大は無碍の性があり、又識大といふて萬物心のないものはないといふので、先きの五大は解つても、此萬物皆な心ありといふのは解し難いようですが、それはわれわれお互の心を標

準として考へるからで、人は人の心あり、牛馬犬豕には牛馬犬豕の心あり蚤や蚊のやうなものには又蚤蚊相應の心があり、彼の松や杉が日光に向つて葉を茂らし、滋養分のある方に根を張るのもこれ又松や杉に心あるからでありますまいか、更に考へて見ますと吾等が日常心を働かして行くのが、食物によつて生活して居るからで、若し吾等の食物とする大根や茄、南瓜や米に心となるべき分子がなかつたならば、吾等は何うして是等の食物によつて身を養ひ、心を働かすことが出來ましやう、更に考へると是等の大根や茄に生命を與へるものは土、此土に生命の源がなかつたならば大根や茄に生命が出來る筈がない、此類推を擴げて萬物皆心ありといふことを認めることが出來る、ヘンリー、ウードの申しました語に『精神は砂の中に眠り、草木の中に夢み、動物の中に力を集め、人の心に於て自覺す』とあるのは、能くこの事を説明したものと見ることが出來ます、此六大にも法爾の六大、隨緣の六大といふ説明法もあり、佛の六大と衆生の六大との關係等をも説けば幽玄の面白いことにもなるのですが、今は時

【十一】萬物皆な心ありとの説は近世哲學者の一致する所で物心の二つは二つにして一つであるといふ立脚地から何物にも心あるといふのは爭ふべからざる原理とす詳しくは拙著「心の研究」にあります北他パウルセンの哲學綱要なぞを御參考になると此種のことが詳しく解ります

間がありませんから、大日如來の體は六大で、さて其相は四曼荼羅といふて大、三摩耶、法、羯磨の四の曼荼羅を以て説明します、曼荼羅といふは輪圓具足の義で、宇宙の當相は此四によつて現はれて居るといふので、詳しいことはこゝでは到底御話が出來ませんが、大曼荼羅といふは諸佛の體で水なら水火なら火の體がそのまゝ此大曼荼羅、其水が物を濕すとか、火が物を焼くとかいふのは諸佛の本體とも見るべきで、三摩耶、其水といふのは法曼荼羅、其水がいろ〳〵の働きをするのが羯磨曼荼羅——羯磨といふのは事業の義です——兎に角眞言密教に於いては此宇宙を以て大日如來の身とし、松吹く風も、溪の聲も皆な大日如來の口より出た聲と見、宇宙の理想を以て大日如來の意とし、これを身口意の三密と云ふて居ります、密といふのは隱すといふことではなくわれ〳〵お互迷情によつて眩まされ居るものゝ知り易からざるをいふたので、此迷情を除き去つたならば、我、汝に庚さんやで、明かに現はれるので、われ〳〵が大日如來の行はれた如く身に行ひ、大日如來の言はれた如く口に唱へ、大日如來の思はれた如く

意に思ふも行けば、大日と我とは二にして一となり、父母所生の此身そのまゝ佛の大覺位を證することが出來るといふのです。

眞言宗の客觀的なると對立して主觀的に同じ見地に入るのが、禪宗です。

禪宗は直指人心見性成佛で、吾等の心の奥底にある佛性を徹見するのを以て主眼としますが、其教理は矢張現象即實在にあるので、石頭希遷禪師も『事を執する元是れ迷、理に契ふも悟にあらず』といふて現象差別に迷ふの迷たるは勿論だが、平等一如の理體のみを認めたからとて悟とはいへぬ、事理圓融、平等と差別との都合よく調和せられて、我が心鏡の如く明になつて差別事相の塵埃がないだけが能ではない、其鏡の平等一如明皎々たる所に差別の事相歷々として映らねばならぬ、天桂禪師が寒山拾得の贊に『拂ふべきほこりもないに箒持つ人の心ぞ塵となりぬる』といふたのは事に迷ふを斥け、同じく『拂ふべきほこりもないといふ人を拂はん爲めの箒なりけり』とあるのは平等の一面に迷ふのを斥けたので禪語では正偏、回互とあつて、正と見たのは空中無物偏と見たのは明

〔十二〕禪は不立文字教外別傳でコンナことを說明するのではなく直に其の本源に達する實踐的なものであります暫らく冒句に落ちて說明するのです

歷々、此正と偏とが回互に互にめぐらし合ふて圓融なるを宇宙の妙用と見るので、佛教各宗共所說は異つて居るが此點から見れば共通して居るので

體相用

天台―空―假―中

華嚴―理―事―無礙

眞言―大―四（事々無礙）―曼―三密

禪宗―正―偏―回互

と見ることが出來るこの事は大內青巒居士が『信行綱領』に於て示されて居るので通佛教の原理と見ることが出來ます、此原理を根底として

本證―佛陀

現相―衆生

妙用―感應

といふ宗教的の信仰に入るのでありますが、其前に一寸教理上から見た

佛教各宗の分類を示しませう、即ち

- 教理
  - 禪
  - 教
    - 顯
      - 大乘
        - 一乘（實大乘）華嚴、天台
        - 三乘（權大乘）法相、三論
      - 小乘——俱舍、成實
    - 密——眞言
- 實踐
  - 自力
    - 戒（律宗）
    - 定（禪宗）
    - 慧（教相諸宗）
  - 他力
    - 人格依頼（淨土、眞宗、時宗等）
    - 法格依頼（日蓮）

となるので、更に詳しく分てばいろ〳〵になつて密の中にも東密、台密の區別があり、禪の中にも如來禪、祖師禪とありますが、ザット此の通りとして、實踐の方を見ますと

戒（律宗）
定（禪宗）
慧（教相諸宗）
人格依頼（淨土、眞宗、時宗等）
法格依頼（日蓮）

となります、これから少しばかり實踐の方を御話し申しませう。

三　佛教の實踐的方面

諸君、吾等の眼は一里も二里も隔つた所を見ることが出來ませぬ、併しながら心には見たいといふ慾望があります。吾等の耳は少し離れた所のことを聞くことは出來ませぬ、併し聽きたいと思ふ心は山々です、見たい見えない、聽きたい聞かれない、樂がしたい苦がある、生きて居たい死なねばならぬ、丁度、繩で身體を縛されながら自由自在を得たいと思ふて見るのと同じことです。此繩を煩惱の繫縛とも、輪廻の絆ともいふので、堅く固く縛られて居る、ナアニ、これしきの細何程のことかあらんと自分の身體に力を入れてブツリと斷ち切るのが自力、自分は到底力が足らないから、之れを斷ち切ることは出來ない、それで自分より力の強い御方——即ち佛陀——を賴んで此繩を解いてもらうのが他力で、佛教の實踐的方面は此二つ

に分れるのです。其自分で斷ち切り又は解くに就ては第一に自分に之れを解くだけの力があるといふ信仰がなければならぬ。それは宇宙同一の原理當然の歸結として得られる信仰で一切衆生悉有佛性の觀念です。一切衆生といへば生死に輪廻し居る有限で不自由で不完全なる差別の現相ですが、其根底には平等一如の無限にして絶對且つ完全にして自由なる佛陀の性があるといふのです、性は不改の義で、吾等に此佛性あるが故にあゝ惡かつたといふ罪惡の自覺もあれば、釋迦何人ぞ、達磨何人ぞ、彼れも人なり、我も人といふ奮勵の心も出るので、鏡は元來明かなものでなければならぬものであればこそ、これは曇つて錆びたと氣の付くやうなもので、もと〳〵曇つて居るべきもの錆て居るべきものであつては此考は起らぬ筈であります。吾等は元來曇りなき鏡の如きものであつたが、無始劫來の無明煩惱の爲めに本來本法性の眞如實相の性を曇らせて、此くの如くに迷ひ出たので初めは一點の曇が鏡の上に出來たのだがそれがだん〳〵ひどくなつて終には全く光のないものとなつてしまつた、卽ち大

【十三】大乘起信論には此の事を詳しく說明して別にわれわれの心の迷ひ行くさまを三細六麁に分けて說明してありまして、三細といふのは業相といふてわれわれの心がヒヨイと動き出した形、已に動くと我と彼との別を生ずる我といふのは轉相、彼と見るのは現相で、こゝに主觀と客觀と生じそれより六麁が出るので、其の初めは智相として辨別すること、それをつゞける相續相、堅く執て動かざる執取相、その執着により名をつけ其名に迷ふ計名字相、それによりて眞に惡の業を起す起業相、已に起業あり其の結果を發る能はす、これを業繫苦相といふ、

乘起信論に

無明
眞如
妄心

と說く如く、無明の匂ひが眞如に染まつて有りもせぬものをあると思ふ妄境界を生じ、それが長じて有るに相違ないといふ執着心を起すので、例へば夜道を歩いて居つて何とも思はぬ時は何ともないが、フト恐しいといふ念が起ると何ともなかつた心を動かして怪物でも出やしないかと妄心を起す、出やしないかと思つて見ると、向ふに立つて居る棒杭が怪物のやうに見える、怪物のやうに思ふて見ると怪物に違ひないといふ執着心を起すやうなもので、吾等は實に此有りもせぬものを有りと思ひ、怪物でもないものを怪物に相違な

妄心
　無明　妄心薰習
　妄境界
　　妄心　妄境界薰習
　　執着心

いと思ふと迷ひに迷ひ居るのでありますから、此迷を轉じてもとの平かな心に返へるには眞理を達觀するの智と妄念妄想を拂ふの情と寂然動かざる意とを得なければならぬ、これを佛教では戒、定、慧の三學としたので、戒とは防非止惡の義で外界の爲めに誘惑せらるゝ所の妄念妄想を制する佛の戒めであります、此戒にもいろ〳〵あつて五戒、十戒の極く簡單なのより進んでは二百五十戒、五百戒、三千威儀戒とまで細く御示しになつて居るのでありますが、詮じ詰めますと、三歸三聚淨戒となります、三歸といふのは佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依することで、歸といふ字はカヘルといふ字でありトツグといふ字でありますから自分が佛法僧と一體となつて迷ひ子が其の家に歸つたが如く、妻が夫の家に歸いたやうになることです、唯だ佛法僧に歸依せよと申してはあまりに信仰的他力的のことのやうに聞えますが實際至心に此三に歸依するといふことは宇宙の靈體と同化することで、佛法僧の三を吟味しますると、宇宙の本體たる眞如の三方面で、之れを人格的に見て佛といひ、萬有的に法といひ、倫理的に僧といふとも見られ、又た三大原理に配すると、同一の原理を佛、異別の原理を法、調和の原理を僧と見ることも出來るのです、

眞如
- 人格的(佛)同一の原理
- 萬有物(法)異別の原理
- 倫理的(僧)調和の原理

といふことが出來ます、しばらく此三に就て御話しせねばなりませぬ。佛といふのは梵語、佛陀略して佛といふので、支那に譯しては覺者の義です、覺とは夢のさめた姿『夢さめて見れば耻かし寢小便』吾等は夢に夢見て迷ふて居つたのだが、今、宇宙の眞理は此の如しと悟ればこゝに夢が覺めた此夢の覺めたのを佛といふ、何故これを同一の原理に配したかといふに迷ふといふのは物を二つ以上見るからで、同一體なりと見れば善の惡の美の醜の、此方が是で、彼方が非だなんといふ相對差別の考はなく絕對對等です、今はしばらく此絕對平等無限自由なる境涯を佛といふたのです、法といふのは軌持の義で、森羅萬象個々別々、山は高く、水は長く、柳

は綠、花は紅に各々其守るべきを守つて少しも間違はぬ、同じ酸素でも水素と変つて水となれば必ず物を濕し、炭素と交りて火となれば物を焼く法、法位に住すで、秩序整然、操守嚴肅です、これ萬有の理法にして實に異別の原理に外なりませぬ。僧といふは矢張梵語の僧伽で譯しては和合衆の義です、和合は人の道で人と人との和合を説くのは倫理道徳、人と人以上のものとの和合を説くのが宗教で、兎に角和合は人の道で、宇宙も亦調和の原理によつて互に持ちつ持たれつして居ることは前に申した通りであります、かくの如く佛法僧を觀察いたしますと、宇宙の本體に無限の時間無限の空間を通じて同一（佛）で現相はこれ亦時空を通じて異別（法）妙用は之れ亦た三世十方に通じて調和圓融（僧）でありますから此三は同一實在の三方面と見るの外はありませぬ、これを同體三寶といひ、此眞理を顯示した釋迦牟尼佛は現前の佛、其釋迦牟尼佛によつて説かれた八萬四千の法門が現前の法、親しく其教を聽き親しく其佛に接して居つた阿難とか舍利弗とかいふ佛教教團の人々が現前の僧、かくの如くに見るのを現前三寶、其三寶の姿を今の世まだ保め持つ木佛金佛石ほとげが住持の佛、黄卷赤軸の五千七百の經卷、此頃出來た大藏經も皆なこれ住持の法、それから圓頂方袍の和尚さん方が住持の僧、かくの如くに見るのを住持の三寶といふのであります。此三寶に歸依するのが三歸で、三聚淨戒といふのは攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒で、攝律儀戒といふのは佛の制せられた戒を順守して一切の惡は斷じて犯さぬといふのです、併し一切の惡を犯さぬだけては未だ完全とはいへぬ、惡いことはせぬが善いこともせぬでは困る、ソコデ佛の仰せられた一切の善は之を行ふといふのでなくてはならぬ、此一切の善を行ふと誓ふのが攝善法戒、それから更に一歩進んで一切衆生を救はう助けやうといふ利他的行爲がなければ大乘佛教徒とはいへぬ、此一切衆生を救はうといふのが攝衆生戒です、前の二は自利、後の一が利他、かくて自利利他二利圓滿になつて初めて菩薩といふことが出來ます、佛教の道徳は此三に過ぎませぬ、即ち誓て惡を止めん、誓て善を行はん、誓て衆生を利益せんとす、これを菩薩の四弘誓願に配して、

攝律儀戒—煩惱無盡誓願斷
攝善法戒—法門無量誓願學
攝衆生戒—衆生無邊誓願度
佛道無上誓願成

と見ることが出來ます、（四弘誓願の文句は宗旨によつて少し違ふのを遣いますが）さて惡を止て善を修し衆生を救ふといふことは解つたが、如何なるが善、如何なるが惡、如何なるが衆生利益の方法かに就ては充分にこれを見るの明がなければなりませぬ、本業瓔珞經には

理に順じて心を起すを善とし
理に違ふて心を起すを惡

としてあります、此理といふは宇宙の眞理、天地の妙用で、之れを見てゆくのが智慧で、此智慧を出して行くには是非妄念妄想の妄動を抑へて心を一所に定住せしむる靜坐瞑想即はち定によらねばならぬ、日常樣々のことを爲て居る折は氣がつかないが、中宵人なく四隣寂たるの時、靜かに胸に手を置て考へて見ると『あゝ惡かつた』といふ考の起らぬものはない、これぞ心の奥の其又奥にある佛性のさゝやきで、カントの所謂先天內容の聲です、此佛性を徹見することを主要とするのは禪宗のやり方ですが、いづれの宗旨と雖も靜坐瞑想の功を認めぬものはありませぬ、ツマリ戒、定、慧の三つと其宗々によつて輕重がありますが、自力諸宗を通じての實踐方法として見て差支はないと思ひます。

此戒定慧の三學を更に開くと六度となる六度は三學の中の戒を開て布施、持戒、忍辱、精進の四とし之れに禪定と智慧とを加へたものと見ることが出來るが、いつも三學といふ時には自分の修行が主となつて六度といふ時は利他の爲めといふことが主となる、度といふたのは梵語の波羅密を意譯したので到彼岸といふ義であることは御存じの通り、殊に大乘佛教は利他を先として自未得度先度他で[十四]『人をのみ渡し渡しておのが身は岸に上らぬ渡守かな』です、さて此六度を概括すると悲智勇の三になるので、此三に積極と消極との區別があつて同じく慈悲でも人の爲めになることをする布施と、人の爲めにならぬことをせぬ持戒、同じく勇猛で

[十四] これと同じやうな歌に「いつまでも浮世のたびの渡守、うゐの波路のあらん限りは」といふのがあります。

も妄りに勇氣を出さぬといふ消極的（忍辱）と、道の爲には勇氣を出すといふ積極的（精進）のと同じ智慧でもそれを働かすのと心を靜める（禪定）とあり、其反對を概括すれば貪瞋痴です。これを一寸、六度とその反對たる六弊の圖を書いて見ますと、[十五]

無我
- 悲
  - 布施（積極）　慳貪
  - 持戒（消極）　邪惡　貪
- 勇
  - 忍辱（消極）　瞋恚　瞋
  - 精進（積極）　懈怠　瞋　我
- 智
  - 禪定（消極）　散亂　痴
  - 智慧（積極）　愚痴　痴

大分時間も經ちましたで、これに就て一々の說明は略しますが、兎に角他に對して慈善をするに付けても、他の爲めに勇氣を出すも自分の心に克つも凡て無我でなければならぬ、貪瞋痴の三毒は悉く我見から起るので ありります。此我見を打破して無我の境に入るのが修行の最も必要なこと

[十五] 六度六弊のことは人生小訓の中に既明しますでこゝに略します。

です。無我になるといふて、我といふものをなくしてしまへといふのではない、小さな我を亡して大きな我と一致することです、實際日々吾等の行つて居ることを考へると、此我といふものに二通りある、少し腹が立つて他の頭を打つ、少し經てからあゝ惡かつたと考へる、其惡かつたといふのは誰だ此我れだ、それぢや先きに打つたのは誰だ、此我れだ、先きの我が眞正の我か、後のが眞正の我か、いふまでもなく先きの我は煩惱の爲めに昧まされた假りの我、うその我で、後のあゝ惡かつたと考へたのが眞正の我だ、此眞正の我は即ちこれ心裡の靈光、一切衆生の持て居る佛性で、これを徹見するのが最も必要です、されば道元禪師の御語にも『佛法を學ぶといふは自己を學ぶといふは自己を忘るゝなり』とある、自己を忘じて心裡の靈性、宇宙の本體と冥合して『月や我、我や月かとわかぬまで心も澄める秋の夜の月』となつて行くのが吾等の目的であります。是は何にも自力ばかりではない他力の信も亦此無我を根底とするので、絶對に阿彌陀如來を信じ少しも我見を俤へざる所に妙はあるので、

[十六] 此の眞正の我といふことは近世グリーン一派の倫理學者の熱心に主張する自己實現と一致するので、トルーセルフ（True Self）即ち眞我は乃ち宇宙の大精神と脈絡貫通するのである。

三心具足とて虚偽のない至誠心、これ吾等が心の奥底にひらめく佛の光で、此まごゝろを以て彌陀を信じ、疑ひのない決定の深心一切の善根を極樂に回向するといふ回向發願心、此三心具足して、眞忠は忠を忘る念々それ忠、眞孝は孝を忘る念々是れ孝といふやうに行住坐臥、佛の光明の中に攝取せられて行くのでなければならぬ『親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをかうむりて信ずる外に別の仔細なきなり』とは實に偉く絶對他力無我の信を言ひ現はされた語であると思います。日蓮宗では妙法蓮華經の五字の中に宇宙の眞理、天地の妙用悉くこれに籠れりとして此五字に歸依の意を寓して南無妙法蓮華經と唱ふる時は、妙法の心を以て妙法に歸するのであるといたしまするので、『初心成佛鈔』に『一切衆生の心中の佛性を唯一音に喚び顯し奉る功德無量無邊なり、我が己心の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れたまふ所を佛とはいふなり』とあつて、よし其道理を知らずとも小兒の乳を呑むに其味を知らざれども自然に其身を養ふが如きぞと示されたるこれ亦一切の我見を振り棄てゝ唯だ此法華に歸するの要を說かれたものと見ることが出來る。

以上敎理と實踐の二方面に亘つて佛敎各宗敎理の一斑を示しましたがもとより僅かの時間のことでもあり、且つ不學の私が成るべく多方面の御話をせようとしましたから解し難い所もあり、又要領を得ぬ所も少くござりますまいが、それは諸君の御研究に任して今回はこれで一應終ることにいたします。終りに臨んで此長時間の話を靜かに御聽き下さつた諸君の厚意を謝します。（完）

(七) 解脫の趣味

解脫の趣味といふ題を出して置きましたが、むづかしい佛典の講釋をして解脫を說明しようとするのではなく、唯だ其の一斑を髣髴せしめて諸君と共に其の趣味の幾分を味はうとするので詳しくは現實生活に於ける悲哀と解脫の趣味と題した方が適當でありますがそれではあまり長くなりますので、略して解脫の趣味といたして置きました。一體人の心には二の方向がありまして、內から外へ向ふものと外から內へ向ふものとあります、內から外へ向ふのは自由自在で何と考へようが何と思ふうが、誰れ一人苦情を申すものはありませんが、其自由な內から外へ向ふ心を制限し束縛するものは外から內へ向ふて來る經驗であります、內から外へ向ふのは往々空想に流れますが、堅實なる理想といふものも亦之れ內より外に向ふのです、外から內へ來るのは經驗によるのですからこれは確かなもの現實なものです、此の理想の方は無制限ですが、現實の方には

制限があります、無制限な理想は制限ある現實に縛られて居るので、丁度繩で身體を縛られながら手足を動かしたいと思ふて居るのと同じやうなものです、此繩を解いて自由の境地を得る所に解脫はあるのですが此の繩はなか〳〵解けない、此理想と現實との衝突の間に煩悶あり懊惱あるので理想のない人には煩悶はないといふてもよい位です、人間も子供の時代は只外界に順應し現實に生活して居るだけで別に理想といふほどのものがないから煩悶も少く悲哀も稀れですが、それが少し年をとつて多少理想とか何とかいふものが出來ると、こゝに悲哀を生じ苦痛を生む、暫く例を目前のことに取りますと、希望の不充實や、目的に對する努力の苦痛なぞで少からぬ悲哀を感じます、學生諸君が勞なくして試驗に及第したい又は優等になりたいといふのは希望ですが、さう甘くは行かぬ、これを行かさうとするには少からぬ努力が要る、目的は遂したし努力はいやだといふ中にも煩悶はあり、商人が一攫千金を望むが、なか〳〵得られないといふ所にも懊惱はあり、殊に美しいのは戀——青春燃ゆるが如き

〔一〕此の繩の譬喩によつて自力と他力との關係が說明出來ます、先きの迷佛教の原理の上で云ふた如く、自力は自分の力で繩を解かうとし、他力は他の大なる力即ち佛にすがつて解くのです。

情熱を以て或る人を戀ふ、しかしそれが思ふやうにならぬ、こゝに非常な悲哀があり、終に一生を誤るやうなものを生ずる。併し是等の悲哀は其人自身にとつては痛切であります、これを人生の事實の上から見ると今一層悲痛なものがあります、それはいふまでもなく生活の困難です、これは先きの戀愛のやうな浮いたものや美しいものではない、最も現實的な如何にして食はんかの問題です、併しこれも食ふといふことだけならさう困難でない乞食をしても泥棒をしても食べるのですから實に易易たることです、飼ひ手のないのら犬でもどうかかうかして死なずに食ふて行きます、食ふことは決してむづかしいことではない、唯だ理想に從つて生活せんとするから困難なのです、内から外に向ふ心に滿足を與へやうとするからむづかしいのです、人生字を知る憂患の始、理想が高ければ高いだけ、生活の困難はいよいよ加はるのです、唯だ現實の影を追ふてうか〳〵と暮らし、世の中は蝶々とまれかくもあれ的で居つては悲哀もなく、煩悶もないのですが、少しでも理想を以て立つて行かうとするには是非理想と現實との衝突といふ運命に遇ふ、それも青年時代はまだよろしいが、中年になり老年になると痛切にこれを感ずる、何故青年時代はよいかといふに此の時代は未だ準備の時代で多少現實が理想に適はぬ事があつても、前途の希望洋々として居るから、今はかうやつて居るが將來必らず此の理想を現實にする時があると思ふて居る。併しそれが中年になり老年になつて來ると事、志と違ふて精神朦朧朝又一年で、將來必ず……などいふことがあてにならなくなる。私は曾て「現實の悲哀」といふものを書いて其の間の消息を述べたことがあるが、實際中年といふものは非常に現實の悲哀を感ずるもので、生活問題の苦痛といふことが切實に迫つて來る、妻もあれば子もある、それに親もあるといふ風で一身に家庭の重荷を擔ふて、内には尚ほ幾分燃ゆるが如き理想追求の考があるのであるから、其の間の煩悶といふものは青年時代のやうな光あるものではない已むを得ず自己の理想を犧牲にして現實に甘んずるのであるが、青年時代の同輩が成功した話を聞いたりなぞする時には心の中の涙のない

〔二〕 抱著「性慾論」の中にあるのですが、要は中年者の悲哀は現實的であるといふのです。

ものはない、それから老年に近くに從つて生存の否定とでも申すやうな死の運命が次第に近づいて來るものであるから、こゝには亦老年の悲哀がある、自分は若いものに負けないつもりでも手足が思ふやうにならなくなる、肉體が精神の命令を奉じなく、我が影が次第に薄らぐといふのであるから、口には言はねど心には餘程の悲があるに違ひない。曾て洛東鳥邊野を過ぎてお俊傳兵衛の墓の前を通つた時、白髮の老媼の案内者が之は緣結びの神ですといふのを聽いて「それは若い中のことわしらはもうあかぬ」といふたのを耳にしたとき、此の短い句の中に無限の悲愁が籠つて居ると思ひました。兎に角、人の一生は理想と現實との衝突史で、内より外に向ふ理想と外より内に向ふ現實との軋轢を免れないから胸中に悶々の情を醫すことが出來ない。此の衝突を調和統一して一の大なる理想に復歸せしむるのが宗教の力ではあるまいか、此の宗教の力によつて人は現實の束縛を解脱してこゝに慰安を得るのではなからうか、抑も宗教とは如何なるものぞ。[三]宗教とは何ぞやといふことは古來幾多の學者

[三] 宗教の定義は通佛教の原理の初の所を參照して下さい

の頭腦を惱ました問題で、其の定義もいろ〳〵であるが、之れを要するに吾等の此の紛々擾々たる心に統一者を得せしめ、それによつて現實の繫縛から解脱するに外ならぬのです。[四]古代の人類は子供の時代の如く外界に心を向け現實以外に心を向け現實以外に大なる理想を持て居らぬから其求むる所も現實のことで病を祈るとか風雨を祈とかいふので、神の數も多く求むる所も種々雜多であつたが、人智漸やく發達するに從つて、個々の要求を統一したる一大要求に促され、個々の神を包容したる、一神を求むるといふことになり、初めは現實の要求に重きを置たものが、次第に理想との衝突に一道の慰安の境を求めんとし、終に心内の統一を計り、其の統一せられたるものによつて生活を統一あらしめんとするやうな風になつたのではなからうか。兎に角、今日では宗教の精髓は之れを人心の秘奥に訪はなければならぬのであるから、私は暫く心内の統一といふやうなこと、更らに平易な語でいへば心の落ちつきといふやうなことで見ておかうと思ひます。一體心を一つの所に落ちつけると、他の一切の事

[四] 神の數で宗教を分つと多神教、一神教、汎神教となる多神教は多くの神を立てるので我國の神道の如きもの、一神教は基督教の如く一つの神をのみ立て、汎神教は佛教の如く宇宙萬象を全一とし、てこれを神と立るのです。

から解脱することが出來るので、[五]彼の大石良雄が祇園町で遊んで居つた時、薩摩の村上喜劍といふ人が其の不心得を叱咤し啖を吐きかけたさうであるが、大石良雄はこれに對して少しも怒らず、却て其親切を喜んだといふのは何であらう、彼れは心の内に仇を打つといふことの外には何にもない、一切の外界から來ること又は心内に起るさま〴〵のことも仇討といふ一の大なる觀念を統一して居つたから如何に罵詈せらるゝとも以て其の心を動かすに足らず、泰然として罵詈から解脱して居たのではなからうか、人といふものは一事に專らになるときは他のことを忘れてしまう、よし忘るゝまでゝなくとも、それが爲めに心を動かさるゝことはない。併し仇討とか何とかいふ一つのことに心をつけて居つては、本望を遂げた後には其の心の主人を失ふことになる。そんな變ることのあるものでなく、何時も變らない、而して能く一切を攝する絶對無限の一物の上に心を歸着せしめてこそ、全生活を通じて統一することが出來、萬事に對して解脱の地に居ることが出來るのである。今まで紛々擾々たりし心を

[五] 大石の一話は傳説でありますが、義士の中にて確なる話は大高源吾が道中で馬方に强請されて詫證文をかいたといふことです、これは講談なぞでは神崎與五郎の逸話として居るが事實は大高源吾で、大謀の爲めに忍び難きを忍び詫書をかいたのです、これ全く心を大謀と一にして居つたからです。

[六] スターバックの宗教心理といふ書物に此の(Con Ucr-tion)の事が詳く説てあるコンバーションとは轉換といふ字である。

此絶對無限の一物に歸着せしむるといふことが宗教の目的で、心理の狀態からいへば、こゝに[六]コンバアションを得るのではなからうか、コンバアションといふのは悶々の心を轉じて新しき歸着を得せしむるので、禪語で云ふ所の心機一轉の境である、「南無」といふ語の一面には確かに此の意があるのであつて、心を佛に歸着せしむるのである、元來南無といふ字は梵語でナマハ、巴利語でナモといふのださうで、又那謨とも那麻とも納謨とも書くので歸依とか歸命とか歸投とかいふ義があり、其の歸依といふに就ても歸命といふに就てもいろいろな義があつて諸宗諸派其の説明が違ふので、他力門では、歸命といふは如來の勅命にしたがひたてまつるなりとあつて、此のしたがふには憑むの意あり、まかすの意あり、すがるの意があるといひ、天台では身命を佛の境界に歸すを歸命とし、又た命を盡くすとも悔なきを歸命といふとも取り、禪宗では歸はこれ還源の義、命根を以て本源に歸すとして一心の本源に歸着するのを南無として居る、詳しいことは別の話として大體からいへば吾等の我見我執を沒却して

此の絶對無限の一物に歸投することである。これを客觀的に阿彌陀如來に向けるのと主觀的に我が心裏の奥底たる佛性の本源に置くのとが自力と他力との別であるが要は這箇の一物に歸投し一切の事象を此の源底に歸着せしめ、ここに懸崖に手を撒して絶後に復たび蘇へるの新生命を得るのである。他力門で往相廻向といふのは我より此絶對無限の一物たる佛に向ふので、還相廻向といふのは一切を佛に任せて、こゝに現實生活に力を得て行くのであり、禪に於て退歩却來といふのも、歸着すべき所を得て現實生活に解脱の境地を得るのであらう。これらは專門家にはいろいろ込み入つた説明があらうが、暫くかういふ風に見る事が出來る、此の境地に入つて、曾つて現實に縛られたる吾等の紐は自由に解け萬事に對して執着のない事を得るのではなからうか。解脱といふのは自由自在の境地で涅槃經には「一切衆生、同じく佛性あつて本來解脱す、良に心に執着を生ずるに由て妄りに自ら迷倒して諸の纏縛を受く、若し能く一念妄を反して眞に歸し縛を了すれば、縛なき時則ち諸佛如來と同一解脱にして差別あることなし」とある、十全健康な人には身體の上に執着がないが、齒が痛いとか何とかいふとこれに執着して氣になつてたまらぬ、貧乏人は金のないのに執着して事毎に心を勞する、金が出來ると其の金が氣になつて心配を免れぬといふ風に囚はれて自由自在でなく、何か執着する所があつて解脱を得ないこれらは現實に囚はれたのだが、中には現實を解脱したが理想に囚はれて居るのがある「七」事（現實）を執する元是れ迷理（理想）に契ふも悟に非ずと石頭希遷禪師の云はれた如く、現實だけは解脱しても理想に縛られて居つては鐵の鎖を解いて金の鎖で縛られたやうなもので、自由でないといふことは一である。或る人が悟り顔に「夢さめて見れば恥かし寢小便」といふたを、萬丈和尚が今一關透過せざるものありとて「恥かしと未だ夢さめぬ寢惚坊」と大喝せられたのは能く這般の消息を説明して居る。理想と現實とを別々に見て居る以上は未だ眞の解脱ではない、理想を現實にし、現實を理想化する上に、解脱の境はある。宗教の用は我より神に向ふだけではない更らに神より我れに反射

する所に力があるので、此の神の力の中に生存して居る境涯が則ち光明裡の生活で自力でいへば解脫した生活、他力で云へば救濟せられた生活となる。これこの時宇宙には一枚、乾坤唯だ佛あるのみで他に執着すべきものもなければ拘泥すべきものもない、他人が何と云はうが其の爲めに心を勞する用もなければ紙にかける必要もない。[八]毀譽に超絶し褒貶に解脫し我れ我が守る所を行ふ、他人の褒貶や毀譽は我れと沒交渉だ、我れ我が行ふところを行ふ、苦樂昇沈何かあらん苦にあつても苦ならず、樂にあつても樂ならず、苦樂以外に自己存在の境地を置くことが出來てこそ初めて解脫の趣味は解せられる。吾等が巧妙な美術や文學に對した時、恍惚として我、吾を忘れる、これは一時的に解脫したものだ、一時的の解脫は畑の如くに消えるが、宗教的解脫は永久に吾我を忘れて相對差別の葛藤裡から超絶するのだ。これは部分的の解脫で見聞する所悉くには解脫することが出來ないのであるが、宗教の解脫、宇宙全體に亘りて且つ永久性なものだ、此の無限絶對の一物と我との交通感應の中に解脫の妙はある、併

[八] 行脚上人の御歌に「こりすまにうちはよせても岩が根になるゝ仇浪へはこの堅塞に關せないふのは解脫の歌である。

し未だ交通感應といふことを自覺して居る間は眞の解脫でない。交通といひ感應といふ間には我れと佛との二がある、此の二つが一つになつて

[九]「唱ふれば我れも佛もなかりけり南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」の境には天地間唯だ南無阿彌陀佛あるのみ、我といひ佛といふ區別はない。魚の水中にあつて水と相忘れ鳥の空中に在て空と相忘るゝが如く、現實生活にあつて現實生活を忘れ、全く之れを理想化して其の理想たるをも忘るゝといふ境に至らねばならぬ、「波間無路路縱橫」で「水鳥の行くもかへるもあとたへて、されども道は忘れざりけり」の自由のところにまで達せねばならぬのです。世法にあつて世法に着し佛法にあつて佛法に着するのは眞解脫の境でない。世法を食物に喩ふれば佛法は鹽だ、鹽なき食物の味なきを厭ひて鹽のみを食ふて居るのは間違だが鹽の苦きを厭ふて食物の味なきに安んじて居るのも間違だ、互に加減して其加減を忘れた所に妙はある、此の理を詳しく御話申せば面倒なことになるが、面倒なことが解脫じやない、自力で云へば一言一行佛作佛業となり、他力でいへば

[九] 一遍上人が由良の法燈國師に參じて「唱ふれば我も佛もなかりけり、たゞ南無阿彌陀佛の聲のみぞしてと云はれるも、未だ聲だけがあるとて聲もなくせよと云はれ窮究の後此歌を得られたのである。

一擧一動佛恩報謝となつて行く中に解脫の趣味はある、農家の手にする鍬の中にも、佛法作業あり、商家の手にする算盤の中にも佛恩報謝の業は成つて日常行中解脫の趣味が存するに至らねばならぬ、どうすれば此の解脫の趣味を體することが出來るか、それは前に云ふたやうに心を絶對無限の一物即ち佛に歸し歸投し歸命して、それによつて相對差別の境に動かさるゝなきに至る所に在ので、現實の生活は悉く相對差別で長と云へば短、黒と云へば白、賢と云へば愚、苦と云へば樂、健全と云へば病弱、蜂名と思へば誹謗あり、成功と思へば失敗があるので人の一生は皆な差別相對の境に支配せられて居るのである。此の相對差別の親玉はと云へば生と死とである、生あるものには必ず死がある、生を望み死を厭ふ此心が抑々現實生活悲哀の本だ、若し能く此の生死の根本をだに解脫することが出來れば他の紛々擾々たるものは快刀を以て亂麻を斷つ如く解脫することが出來るのである、されば宗教の眼目は此の生死の一大事因緣を決着するを要とするが、是がなか〳〵解脫が出來ない、併し心を絶對無限の

一境につけて生死海中、常住不變の水あることを看破し、身を佛の仰せに任して安立の地を得ることが出來、こゝに一心の歸着を得て世に處し事を行ふて行けば、その間に解脫の趣味があるのである。香樹院語錄の中にコンナ話しがある。美濃のおせきといふ女が手桶をさげて庭先を過ぐるのを見て、上人が「おせき極樂參りはどうぢや」と云はれると、おせきはすかさずこのまゝでござりますと、此儘でござりますまで安心してこそ眞に解脫を得たものといふことが出來る。「圓齋當年愛洞庭七十二峯波心青」理想の一境、山水明媚ですが、さて行つて見ると別段異つたることはない、「如今高臥想前事添得盧公倚石廟」と雲寶のいふたやうに現實にすることが出來て趣味があるのではないか、悟つたとか、悟らぬとかいふのも別のことではない、丁度、煙草を喫みつけた人の煙管の持ちやうと、喫みつけない人の持ちようと違ふ位なもので、喫みつけた人と喫みつけない人とが違ふのではないが、何となく煙管と手とが離れになつて落ちつかないが、喫みつけた人は不用意に持つても、ちやん

〔十〕東坡の廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不消、到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮、といふたのも此の時と同じ意味です。

と、煙管と手とが不二になつて居る。解脫の趣味を解した人の現實生活と解せない人の現實生活とが別に異つたわけではないが、此の一境に到らぬ人は理想と現實とが別れ〳〵になつて居るが、此の境を體得した人は理想と現實とが不二になつて居るといふことが出來る。吾等は宗教の力によりて此の不二の境に到らねばならぬと思ふのです。以上の話で心は解脫の一境にかけて無碍自在になることが出來るが、併し此の身は矢張現實の繫絆の中にあるのだ、「世を捨てゝ身はなきものと思へども、雪の降る日は寒むくこそあれ」だ、そこで此の現實の缺陷に對しては何うして行くかといふことを究めて置かんと折角の解脫も何の役にも立たぬことになる。それには唯だ現在の小さな時間にのみ眼を止めず未來永久に達觀して理想を現實にするといふ方面に向ての努力を忘れてはならぬ。佛の事業は濟世利民であつた、吾等も亦此の事業に力を盡くして行かねばならぬ。唯だ僅か目前のことだけを見るから失望もし落膽もするのだが長い時間を見ると吾等の社會といふものは漸次に理想に近づいて來たので、社會の進歩といふことは步々理想の實現に向ふことだ。されば吾等も亦力を盡くして此の社會改良といふことに注目せねばならぬので、先きに現實の悲哀の中に光も甚しきものとして擧げた生活難の問題も多くは社會組織の缺陷から出るので、今日社會主義者のいふ所を直に一から十まで實現することは出來ないが、步一步社會の制度を革新して現實の缺陷をして少からしむるといふことも亦之れ佛陀の理想を實現する所以に外ならぬ。

君主獨裁の壓制の下にあつた歐洲の民は、何うして今日の自由を想ひ浮ばう、今日の如き自由は彼等の夢想であつた。併し今は實現出來た。松明や提灯に滿足して居つた時代には誰か電氣燈、夜、晝の如きを思ひ浮ばう、旅行としいへば步む外なしと思ふた古代民族が、何うして汽車電車の世を思ひ浮べやう、彼等は殆んど夢想をもしなかつたのが、今日は實現出來た、これ皆な吾等より先に生れた人々の理想の實現に努力してくれた御庇である。今日資本と勞力との分配其宜しきを得ず、或るものは何の勞力な

くして飽食し、或る者は額に汗して食ふに苦むといふやうな社會組織も亦其の根底から改革せらるゝ時がないとは思はれない。眼は遠く未來際に注ぎて理想の實現を望み、足は近く現實の上に立て是を理想化して行くことを怠らず衆生濟度の職責を双肩に擔ふて進んでさへ行けば苦しき現實生活の中にも無限の趣味があるではなからうか。此の問題に就ては更に深く云はねばならぬことがあり、國家對社會の問題、社會改良の方針等にも少しは考へたことがあるが、題を改めて說くことにして、しばらくこゝに止めておきます。

(八) 靈魂問題

今度は靈魂問題で話をせよと云ふことで御座いましたが、靈魂と云ふ問題に就ては到底一朝一夕で御話が出來ぬのでありますが、其大要だけを御話いたします。さて靈魂とは何ぞやと問はれまするとと、之に定義を與へると云ふことは難かしい、机とは何物か、木で造つて書物を讀むものなり、然らば見臺は何うか、之も木で造つて書物を讀むものであると机と見臺との違ひはこれだと其實物を見せることが出來るが、靈魂に至つては之れだと見せる事が出來ませぬ、然らば靈魂と云ふ物は、通常何う云ふ工合に解釋をして居るかと云ふと、靈魂[一]とは英語で「ソール」と云ひ、我々の身體の外に口を開ひて物語らしめ、目を開いて見せしむる所の靈がある、之を靈魂と云ふのぢやと、すると靈と云ふものは、心と云ふものと同じ物か、何程違うか、日本で云ふ精神と云ふのは英語でいふ「スピリット」で「ソール」即ち靈魂とは違ふし、勿論「マインド」心とは違ふ、何れ丈け違う、之

[一] Soul mind spirit

れが三角である、四角であると見せることは出來ぬ、夫れであるから何樣な物か分らぬ、分らぬ事を御話をするのであるから難かしい、生きて居る魂はお話がしやすいが、死んでから何うなるものかと云ふ問題に成りまして、實際に見ることが出來ない、夫れでありますから、試驗をして斯うなるものであるとか、化學上の藥を入れて見せられない、即ち實驗することは出來るが、理窟で云ふことは出來ませぬ、斷定することは出來ないが信仰することが出來ると云ふ妙なものであります、何れの方面から申しても難かしいので、昔から今日まで理窟の上では分つて居らぬ問題である、併しながら信仰の上で分つて居るので有ります、併し實際何うかと云ふと、是れから何年經つても分らぬと私は思ふ、私は何故かくいふかと云ふと、確かに斯うだと云ふことは、實際に見なければ分らぬ、地獄に行くと申しますが、其地獄に行つた人はあるが、歸つて來た人はない、乃公が一番行つて見やうと云つた處で、再び歸つて來ること

は出來ませぬから、果して地獄は何樣な物かと云ふことは分らぬのである、故に暫く極めて簡單なる要領をお話をしやうと思ふので有ります、夫れから最う一つ斷つて置かねばならぬ、即ち重複することが有るから、或は前に申した事を再び云はねばならぬのは、佛敎の靈魂の話であつて、人間の身體は死んで仕舞つても、魂だけは死なずに殘つて居る、其殘つて居る魂は、現世に善い事をした者はすつと天國に行つて仕舞うし、悪い事をすれば地獄へ眞逆樣に陷ちて仕舞うと云ふのが宗敎の云つて居る所である、回々敎に行くと、地獄が七つ、天國が七つあつて、一番悪い事をした者は七番目の地獄に落ち、其次は六番目、五番目、四番目、三番目、二番目一番目と落るのである、又善い事をすると、最良なる者は一番上の天國で行ひに依て次第にあがると云ふ事を云つて居る、基督敎でも矢張天國、地獄の說がある、希臘古敎でも同じく云つて居る、「プラトーン」の書いた書物を見ても、悪い事をして死んだ者も、善い事をして死んだ者も、同じく

裁判を受ける、爾うして悪い事をした者は地獄に行き、善い事をした者は極樂に行くと云ふ事を云つて居る、若し爾う云つて居らぬ宗教では天國地獄のない代りに、悪い事をすれば生れ代つて犬か猫になる、漸次と獸に生れ代ると云ふ事を云つて居る、斯う云ふ事を云つて居るのは主に埃及の宗教である、佛教の行はれます以前の印度に於いても、善い事をすれば天國に生れ、悪い事をすれば畜生に生れ、生れ代つて永劫盡くることなしで、これが主體となるものを、補特迦羅我と云ひ、肉體は無くなつても、我と云ふものは何時までも盡きずして存續して居ると云ふのが印度の外道教である、佛教ではお釋迦様が成道をなされて[二]諸法無我と云はれ、我と云ふものはない……我と云ふものはない、然らば我と云ふものは、何に因て出來て居るかと云へば、佛教は我と云ふものは、色、受、想、行、識と云ふ五つと云ふものが集つて出來て居るので即ち物質的元素と精神的元素と寄集つて我と云ふものになつて居る、故に此二つが離れましたら我と云ふものは無い、之れが佛教の立場であります「引寄せて結べば柴の庵

[二] 這佛教の原理の諸法無我と既いた所を御參照下さい。

なり、解くれば元の野原なりけり」元素と元素と結んで仕舞へば我と云ふものが出來るが、我と云ふものは別にあるのぢやない、元素が集つて出來たものだ、地水火風と云ふ四つの者が集つて人間の身體になつて居るから、之を解けば人間の身體と云ふものはない、一滴の水でも水素と酸素を取れば水と云ふものは無くなるのである、又此洋盃を取りて來て形あり、然り洋盃はあるが圭酸と「アルカリ」と云ふものが集つて形があるので、之を取つて仕舞へば別に硝子はない、元素と元素が集つて形があり、此外に我と云ふものはないでありますから佛教は我と云ふものは死んで殘るとは云はぬ即ち佛教は無靈魂說であると云ふことを一番に云つて置く必要がある、爾う云ふと吃驚する人があろう、諸法無我、我と云ふものはない、其處に考がある、我と云ふものはないが、心と云ふものは無いとは云はぬ、元素と元素と集つて居る我であるから、元素と元素とが離れて死んで仕舞へば無くなるのであるから、佛教は無靈魂であるが併し何にもなくなるのではない、何にもなくなると云へば斷見外道、然らば死んで我

〔三〕心の理法を説くのは單にこれだけで盡きたのではない、心理學に於て詳く説いてありますから御參照下さい、拙著「心の研究」にも其の一端が示してあります、唯だこれだけだと思ふと誤ですから」言して置く。

と云ふものが殘存つて居れば宜いかと云へば、之れは常見外道と云ふ、其様なら何にもないかと云へば斷見ぢや、斷見でもない常見でもない、夫れが佛教ぢや、或意味から云へば無靈魂とも云へるし有靈魂とも云へる、併し有ると云へば常見、ないと云へば斷見ぢやと云ふ、然らばどういふのか先づわれ〳〵の心と云ものから研究せねばならぬ、心は何様なものか、之れは屢々申して居りますが、我々の靈魂と云ふものをお話をする前提として云つて置く必要がある、〔三〕心には二つの理法が行はれて居る夫れは觀念聯合に觀念競爭と云ふ、觀念聯合と云ふものは我々種々様々の考が起りませう、之れは一纏宛になつて心の中に藏つて居る、夫れだから一つ思ひ出すと外のものを想ひ出す、此一纏にあるものを「アリストートル」が三つの理法によつて一纏になつて居ると云つて居る、例へば花が咲いた……花を想ひ出すと、向島と云ふものを想ひ出す、向島を想ひ出すと言問團子を想ひ出す、三圍を想ひ出す、其「夕立や田をみめぐりの神なれや」で其角を思出す、芭蕉を想出す、「古池や蛙飛込む水の音」を想出す、これを接近聯想と申します、即ち近寄つた物を想ひ出す、諸君が加藤を想出すと、髯を想ひ出す、夫れを想出すと關羽を想ひ出し五月の人形を想出す、夫れを想出すと鐘鬼を想出す、之れが接近聯想です、夫れで人間の心が結ばれて居る、常に茫として居ても、停車場を想出すと滊車を想ひ出す、夫れで人間の記憶と云ふものが出來て居るのである、夫れから今度は類似聯想と云ふものがある、即ち似た物を一纏にして居る、花が片々と散つて居るのを見ると雪の様だ雪と花と一緒に想ひ出す、雪の片々と降るのは綿の様だ、鳥の毛の様だ、雪は鵞毛に似て飛んで散亂す、又は落花の雪に踏迷ふと云ふ如く、似た物を一緒にする、關羽と加藤を想出す、即ち髯が似て居るからで、似た物を想ひ出すのである、類似聯想が諸君の心にあるから、諸君に靈魂の話が出來るので有ります、似た物の話をすると、想ひ起させる、心は何様なものだ、心は鋭の様なものだ、成程其様な者かと類似聯想が出來る、夫れから最う一つある、反對聯想……全く違ふ物を想ひ出す、黑いと云ふと白い、馬鹿と云へば賢いと想ひ出す、之れは似て居るが爾うでない、然らば

接近して居るか、爾うでない、全く反對して居る、斯の如く人間の心は反對聯想、接近聯想、類似聯想とによつて集まつて居る、これが何うなつて出るかと云ふと、心の上に觀念の競爭と云ふものが出來る（塗板に○を描き）之れが心とします、諸君が見た物は、此中に這入つて居る、其這入つておるものゝ中に優勝劣敗が起つて來る、即ち強い考が弱い考を負かして仕舞ふ……下に落して仕舞う、強い奴が出る、諸君が腹が空つたと思つて居つても親が死んだと聞くと腹の空つたことは忘れて仕舞う、夫れは嘘だと聞くと、又た腹が空つたのを想ひ出す、爾う云ふ樣に強いものが出て來るのである、之れが統一して段々流れて行く、之れを名附けて意識の流と云ひ……心の流……「プロセッス」と云ひますが、強いものが出て代り〳〵ぐる〳〵と出て來るのである、之を歷史に譬へまするど足利の末、戰國時代、群雄割據して各々爭つて居る、武田信玄、上杉謙信、北條早雲と云ふ樣に強い者が出て來る、織田信長、豐臣秀吉、德川家康が出て來る、維新の際となると薩長が出て來ると云ふ樣に流れ〳〵て隙間なく、之を意識の流と云ふのである、いま諸君が子供の時を考へて御覽なさい、玩具のラッパを持つて來て之れがお前が好であつたと云へば、如何に頭髮が白くなつて居ても想ひ出す、之れは意識の流が續いて居るからである、若し意識の流が續いて居らぬものとすると變だ、以前の物は皆な忘れて仕舞つて何時も孩兒になつて仕舞う、流が止りませぬから今日まで忘れずに續いて居るのである、之れが即ち我である、我々の心と云ふものは、前のが消へて後のが段々出て來る樣なものである。昔し在原業平中將が東下りの時に、隅田川にていざ言問はん都鳥と咏じたときの隅田川の水と、今日短艇競漕がある隅田川の水と異つて居るかと云へば、變つて居るが又變つて居ない所がある、夫れと同じく意識の流が續いて居る間は我々は生きて居る樣々の物が考へられるので有ります、之れが我々日常生活して居る心の狀態である、其間に優勝劣敗が起つて來る、弱い考が強い考に負けて仕舞う、くる〳〵と廻つて意識の流が續いて居る、死んだら夫れが何うなりますか、之れが靈魂の問題である、生きて居れば夫れであるが、死んだら何うか

之れが一つの問題である、死んだら止るか、止らぬか、夫れよりも最う一つ見て置くことがある、生きて居る間にても意識の流が止まることがある、何う云ふ折に止るか、即ち睡眠した時である、睡ると云ふことは何う云ふことかと云ふと、生理學者に聞いて御覽なさい、睡眠といふのは腦髓が休息するのである、意識の活動が止んで仕舞うのである、人間と云ふものは、御承知の通り休息せねばならぬ、肉體の中で休まぬものは意識の働……腦髓の働であります、之れは一寸とも休まない、夫れでありますから、寢て居る間に七時間なり八時間なり腦髓の休憩を命ずるのである、成程心の働は休まぬが、併し呼吸も休まぬではないか血液の循環も休まぬではないかと云ふ人もあろう、夫れは呼吸は出たり這入つたりするので休む時間がある、血液の循環にも休む時間がある、腦髓は起きて居る間は休まぬから、夜になると休むのである、其處で意識の流が中斷する、併し睡眠の中にも熟睡と淺睡の二つがある、淺睡のときには意識全體が休んで居らぬ……腦髓全體が休んで居りませぬから、夢を見ることが出來るが、全く熟睡して仕舞へば夢を見ない、夢と云ふものは睡初と覺時に見るものである、中途で夢を見て睡る事の出來ぬは淺睡狀態に於てあるのです、熟睡の時には休んで仕舞う、意識の流が中斷するのであるが、起きたら從來の事は一寸も忘れて居らぬかと云ふにそうでない、若しも忘れて仕舞つたら夫れこそ不便でありませう、睡る度毎に孩兒になつて仕舞う、意識の作用は中斷せらるゝに違ひない、夢は淺睡狀態であるが、熟睡狀態の時は記憶して居らぬ、諸君が充分睡つて居る時に何うなるであろう、惡口を云つても覺えて居らぬ、即ち之れが意識が中斷せられて居るからである、若し人間が中斷せられて仕舞つて忘れるとしたならば人間は實に不便のもので、朝起る度毎に新たなる敎育を受けて居らねばならぬ、所が睡つても休まない、心の働が休んでも一切の心の上に覺えたものを貯へて居るものがある、之れを名附けて阿賴耶識と云ふ、之れが睡つて居らぬ、阿賴耶と云ふのは天竺の言葉で藏と云ふので一切心象の種子を藏して居ます、此阿賴耶

識があるから目を廻はした時でも物を覺えて居るのである、睡ても覺めても一生涯此微細の心識が流れ〳〵て休む時のないものである、死んだら此阿賴耶識は何うなるか、死んでも續くか續かぬかと云ふ問題が起つて來る、之を解決するには幽靈と云ふものを研究しなければならぬ、其處で幽靈のお話を一應して置きませう、今日行はれて居る幽靈は何樣なものか、大抵此前にも私がお話をした通り、夢に現はれて居ります、薄睡狀態の時に夢に見たのである、彼の四谷怪談の民谷伊右衛門がお岩を殺して、お岩の幽靈の爲に惱ませられるのは、夢に魘はれるのである、誠に氣の毒なもので、お岩が怨はしないかと云ふ觀念が強いから來やせまいかと、他の觀念が弱くなつて下に押込まれるので觀念の刺激に依つて何でもない物を幽靈と見る樣になるのである、之を名附けて[三]幻覺と申します彼の人は美しいと思へば痘面も笑凹に見える、恐しいと思へば枯尾花が幽靈に見える、ジョソンと云ふ人は書物を讀んで居る中に母親の顏が見えたと云つて居る、之れが幻覺である、四ッ谷怪談の幽靈も幻覺である、富士谷

[三] 目の誤りに二つある一を錯覺といふ、これは或る物を誤つて見るので、枯尾花を幽靈と見るのは恐ら〳〵との觀念が強くなつて爲めに眞物を誤るのです、幻覺といふのは全くないものも自分の心から有ると見るのです。

成章は睡て見るを夢と云ひ、覺めて見るを幻と云ふと云ふた、之れが幻覺である、諸君は見ないでも宜いが、精神に異狀を呈すれば見ることが出來ます、狐が憑いて居るとか、天狗が憑いて居ると云ふのは、日本に於きましては上州邊に多い、上野、下野、埼玉邊は多いのである、夫れは何うかと云ふと、上州には尾先狐が居ると云ふので斯る病氣は多い、那須の原に於いて玄翁和尚が殺生石を壞した時に、其狐の尾が上州に飛んで行つたと云つて居る、夫れから中國に行くと、美作、備前、備中邊に多いのである、四國には狐憑が居らぬ、何故かと云ふと、四國には元來狐が居らぬからである、其代り高知邊に行くと犬神憑が多い、伊豫の方に行くと、「トウビヤウ」と云ふのがある、御承知でありませうが蛇が憑くのである、信州に行くと飯綱が憑くと云つて居る、憑くと云ふのは人間の觀念が二重になるのである、狸が憑いて居ると云ふのは、[四]二重人格で己れ自身と己れの外に狸と云ものと二つになつて居るのであります幽靈も其通り怖いと云ふ精神が強いから見るのであります、淺草の北淸島町にはお寺が列んで居ります、其

[四] 二重人格といふのは心理學上むづかしい問題です、一體、人といふものは、いろ〳〵な考が一まとめになつて我といふもので統一して居るから、此に一人といふ人格があるのですが、二つの心になつた時、二つの我になつた時は即ち此二重人格で、病的狀態です。

某寺に後妻が來りました、連子をして來りましたが、其連子は女でありまして、所が亭主が何うした譯か知らぬが、後妻の方を粗末にして、連子の娘と一緒になつて、後妻を虐待するので、後妻は怨死をして仕舞つた、流石の兩人も良心に咎めたでありませう、所が其中にも娘の方は流石は實母でござりますから、親に濟まぬ〳〵と思つて居ります中に、遂に幻覺を生じまして、或夜十二時頃母親さんが出て來たと呼び出した、夫れが精神に非常なる異狀を呈したので、後には益々劇しくなつて、母親さんが髮を摑んで二階に引摺り上げ、二階の頂天から下にどつと落された、隣近所では其の音響が聞える、夫れは母親さんが引擧げるのではなく、自分で上つて爾うして落るのである、夫れは幻覺の强烈になつたのである、即ち幽靈は自分の心で出すのである、誠に御苦勞の事である、所が違う幽靈がある、之れは川邊御楯と云ふ醫家がありますが、此人の話だと云ふことで聞いたので受賣でありますが、確か筑後の柳河の藩士で松尾某と云ふ人があつて、長崎の外國船警衛と云ふ役に行つて居つた、自分は上の御用が勤るが、自分

の息子は馬鹿で跡目を相續することが出來ぬ、死んだら家が斷絶するであらう、爾うしたら先祖へ對して相濟まぬ、何うかして跡目相續が出來る樣にしたいと一心に願つて居りました、或夜のこと國家老の西原、立花と云ふ兩人が居りましたが、私は妙な夢を見た、夜寢て居ると襖を開けて松尾某が這入つて來て、何うも私の息子は愚鈍の者であるが、何うか滯りなく跡目相續をさして貰ひたいと熱心に賴むから、よし〳〵承知した心配するなと云つたら大層悅んで歸つた、今朝起きて考へると、松尾は長崎に居る筈である、何うも不思議な事もあるものと西原が話をしたので、一方の立花も不審な面相をして、夫れは不思議だ拙者も同じ夢を見たと噂をして居ると、果して長崎から早飛脚で松尾某が死んだと云ふことを知らせて來たと云ふ話である、之れは幻覺でなく、此方は何とも思つて居らぬのに、之を見ると云ふのは何う云ふ譯であるか、斯う云ふ樣なことは澤山聞くのである、東京杯で書生が一心に書物を讀んで居る、其中に眠らずも親の姿を認めると云ふことがある、すると電報で親が死んだと云ふこと

を知らせて来る、之れは何か理由がなければならぬ、之れをお話するには催眠術の理論をお話せねばならぬ、催眠術は何様なものか、一應説明致しませう、之れは「メスメリー」が始めまして「ブロート」が改良したので説は種々ありますが、學説の説明は今日廢しまして、いまお話をするのは、催眠術を掛けるのは何うしてするか、第一斯う云ふ方法である、最も巧みなのは此人に催眠を掛けると云ふ折には、睡れと云ふ暗示を與へる、其命令に依て眠るのである、夫れから普通は何うするかと云ふと、椅子に腰を掛けるか、座はらして置き、爾うして脈を取る、之れは婦女が早く掛る、女子の眼を擦つて見る、婦人の氣は怪しくなる、脈を長く取つて居る中に瞼を擦下ると其婦女は催眠に掛つて仕舞うのがある、又た名刺の様な物に赤い點なぞをつけて熟視さす、爾うすると催眠狀態に陷るのもある、是れ計りを見ろと云ふ時に精神の外の活動を止めて仕舞う、夫れ計り一心に見て居るから、目に疲勞を來たし、夫れで眠る、其際には精神が睡つて居る、即ち我々が睡眠するのも催眠狀態である、そこで施術者が暗示を與へ水

を持つて之れは砂糖水であると云へば、甘い〳〵と云つて飲んで居る、之れは冷たくないと云ふと水が冷たくない、之れが施術者の強い觀念が被術者の弱い觀念を負かすので優勝劣敗が起つて來るのである、人は暗示を受くる動物なりと云ふ如く、人が遣れと云ふと遣るのである、何時でも強い觀念が弱い觀念を押へて居るのであります、觀念の弱い時に強い觀念を持つて行くから、催眠術に陷るのである、此催眠術に依て此處に母親さんが居ると云へば、何にも無いのに母親の姿が見える様になる、觀念の刺激に依て幻覺を與へる、之れが催眠術の狀態である、最も巧なる催眠術を掛ける人は、次の室に居つて掛ける事が出來る、之れは眞言宗の五十嵐光龍君抔は行られるのである、併し私は此處で思ふ、人間の心と云ふものは一つの共通精神があると思ふ、其精神があつて、其上に優勝劣敗が行はれて居るから、強い觀念が弱い觀念を押へる、夫れであるから長崎の松尾某が柳河の家老の宅に行くと云ふのは、精神が先方に感じて行くので、無線電信と同じ樣である、此方は發動的狀態で先方は受動的狀態である、夫

れで若し我々の精神狀態が發動的狀態となり受動的狀態となるならば千萬里を隔つて居つても感ずることが出來ると云ふのは、私の獨斷でないと思ひます、實は最う少し催眠術の事を詳しく申したいと思つて居りましたが、時間が餘り長く掛りますから今日は略して置きます、さて問題が本へ戻つて肉體と云ふものが無くなれば、靈魂が殘るか殘らぬかと云へば、肉體が無くなれば靈魂が無くなると云ふ事は出來ませぬ、諸君が死んだら肉體が無くなるでありませうが、これは全くなくなるのでない變つたのであります、肉體が無くなつても精神があると云へば可笑しいが、肉體は燒けば灰となつたのである、土となつたので即ち變つたのである、肉體が無くなるのではない、物質は無くなるのではない、之れが物質不滅の理であります、既に物質は何時までも盡きないもので有ると云ふことが分れば、肉體が無くなると云ふことも出來ぬ、精神が無くなると云ふ事も出來ますまい、然らば何うしたら宜いか、元素と元素と集つて出來た身體であるならば、文學のお話でしませう、文學の中で立派な物と云へば紫

式部の著した源氏物語である、所が之れは何が集つて出來たかと云へば、いろは四十七文字の假名に依て出來たのである、天智天皇の三十一文字の歌も「これは〳〵と計り花の吉野山」と云ふ句も皆な假名で出來る、之れを巧いと云つて居るが何處に巧い處があるか、之れを解き放すと巧い處はない、十七文字集ると靈妙なる意味がある、元素と元素と組合すると之れは〳〵と許り花の吉野山となるのである、この字にもこの字にもない樣であるが集めて見ればこれは〳〵と計り花の吉野山となる、爾ふ云ふ工合に見て居れば面白い、阿賴耶識と云ふものは共通精神であります、が之れは未だ以て眞正の心の本體として佛敎では許しませぬ、佛敎で許すのは庵摩羅識と申します、即ち眞如であります、眞如は大海の水の樣なもの、此上に波が立つたのが阿賴耶識であります、宇宙全體の精神が眞如で有ります、けれども此阿賴耶識の中に我と云ふ……之れがお前の心……之れが吾の心と附くのが末那識であります、元來之れが乃公だと云ふ波は何う立つか、阿賴耶識は坦々たり、此波が少しもない、夫れに波が起る

のは何うして起る、石を投ぐれば波紋が起る、此石は何……曰く業力、佛敎は業力説で、業は英語で云へば「アクション」であります、自分で行ふこと、心に思ふこと、口で云ふこと、此業と云ふものが基となつて波紋が生ずるのである、最う一つ譬へて申しますと此處に洋盃に水が入れてある、天に月がある、すると此洋盃の中の水に月が映る、洋盃を壞すか水を除れば月が無くなる、又桶に水を入れて持つて來る、同じく月が映ると同じ道理で、我々が月であるとして受くる形であれば、其處へ月の影が映る所以である、斯う云ふ工合の説明があります、佛敎では縱橫無盡に云はねば此靈魂問題が極められませぬ、最う一つ申しませう、私は斯う云ふ譬を云ふ、石炭を殺す……殺すと云ふのは可笑しい、燃して仕舞うと灰になつて仕舞う、所が石炭が灰になつた丈を見ては不可ぬ、石炭を燃したら湯が沸た、其湯が水蒸氣となつて仕舞うが、水蒸氣があるから汽車が動いた、即ち動力になる、汽車に乘つて東京から横濱に來て仕舞つた、斯う見ると此方計り見るから面倒だが石炭も灰になつたと見ると面倒になる、此方計り見る

と違うが、彼方は水蒸氣になつて汽車が動く、即ち動力となつて東京から横濱に來たのでせう、此汽車に乘つて來た者は其儘では歸りはしない、即ち一擧一動一微塵と云へども、盡くることはない、何處までも續いて行つて盡きる時はない、諸君お寸閑の折に能く考へて御覽なさい、何方も盡くるのではない、此理に依て靈魂は不滅と見るのである、石炭を燃すから灰になる、此燃す力を業力と云ふ、靈魂不滅と云ふのは靈魂と云ふ一つの固結體があつて行くのではなく、力が行くのである、其處で力と云ふものは、何う云ふ工合に存續して行くか、石炭を燃せば灰、水蒸氣になるのは因果である、因があれば果を生む、石炭を燃せば水蒸氣になる、灰になるのである、故に善い事をすれば善い果報がある、悪い事をすれば悪い果報がある、斯う云ふ工合に説いて行くのが佛敎の三世因果の説明である、地獄極樂があると云へばある、無と云へばない、極樂は蓮の花が咲いて何時でも遊んで居られるものと解しては困る、地獄は劍の山があつて火の車がある［五］と思つても不可ぬ、悪い事をすれば苦しい、善い事をすれば樂しい、織田信

［五］彦根の藩士で參禪の途上此の問題の解決を得ようと白隱禪師を問ふて此の感悟を得たのです。

茂と云ふ人が、何うも地獄極樂が分らぬと云ふので、白隱禪師と云ふ臨濟宗の高德であるが、此禪師の許に參りまして、私は侍でござるが、何うも佛敎で云ふ地獄極樂があると云ふがわからぬ、有ると云へばある、無いと云へばないでは何うも分りませぬ、何うか敎へて貰ひたいと申込んだ、すると禪師が、御身は何だ、武士でござる、武士ならば武士らしくすれば宜いじやないか地獄極樂を聞く必要はない、お前等の樣な者を腰拔武士或は魯鈍武士とも云ふ、いや武士は未だ人間の中ぢや、鰹節ぢや、臺所の用に使ふ道しかない腰拔節ぢやと云つたので、信茂非常に憤つて私は何うか佛敎の一大問題を明らめたいと思つて遙々と遠國から出て來たのぢや、禪師、いや退れ〳〵と云つたので、信茂も憤懣に耐へず、持つて居りました所の刀をすらりと拔き、武士たる者が斯く侮辱せられて此儘歸られませぬ、覺悟しろと斬込んで來たから禪師は本堂指して、逃げ出した、何處までもと信茂は追つて來る、本堂の中を彼方、此方と追廻して居る中に柱の下で禪師に追着き一刀の下に斬下さうとすると「禪師は柱を抱いてそれ之れが

【六八】或る人が面白い因果の例を示されたことがある、天下の大權を幕府に取つたのは源頼朝で、これが參謀となつたのは大江廣元だ、所が維新の際王政奉還をなさしたのは其頼朝の子孫たる薩摩と大江廣元の子孫たる長州の二藩であつた、偶然といへば偶然だが面白い事である。

地獄ぢやと云はれた、信茂も、はつと刀を鞘に納め有難うござると云つた、禪師はそれ夫れが極樂ぢやと云はれた、因果應報過去、現在、未來の三說は過つたものではない、併し之を以て靈魂の上に證據立ることは出來ませぬけれども、私は未だ生きて居るから說明はせらるゝが死んだことはないから證據立ることは出來ない、唯、生理的并に歷史的說明に據つて證明する事が出來るのである、即ち生理的說明に依て親の因果が子に報ゆると云ふ事を確かに見る事が出來るのである、親が大酒を飮むものであると賢い子は決して生れない、之れが遺傳である、肺病系統の者には肺病がある、親の黴毒が子に遺傳すると云ふのは、因果應報である、之れは生理の說明である、最う一つは歷史的の說明である、【六八】楠正成は八百年の昔湊川に於いて草の露と消へた、四十年の間志を立ずして死んで仕舞つた、足利尊氏は將軍となつて樂々と暮したが、さて歷史的から見ると其果は何うなつたか、楠正成は今日湊川に於いて別格官幣社と祀られて居る、之に反して足利尊氏は石像となつたが首を落され足を折られて見る影もなくな

つて居るではありませんか、因果の關係は歷史の上でも分りませう、此子は何で眼が惡いのか、お爺さんの遺傳だらう、癩病が遺傳すると云ふのは社會的にも說明する事が出來るのである、然らば我が過去に行つて來た宿因に因て今日斯うして居るとすれば、我が今日の運命は極つて居つて何ともする事が出來ぬだらーと思へば爾うではない、此處に洋盃が二つあるとする、一方の洋盃には圊から汲んで來た水を入れる、一方の洋盃には井から汲んで來た水を入れる、爾うすると圊から汲んで來た水は濁つて居る、井の水は清い、之れは前世に於いて惡い事をしたから圊から汲んで來た水は濁つて居る、井の水は善い事をしたから清いとする、併し此濁つた圊の水の中へ此方の井から汲んで來た清い水を入れて攪混せると濁つには清い水となつて來る、又清い井の水の中へ泥を入れて攪混せると濁つて來ると同じ道理で、現世に於いて善い事をすれば善果を得るのである、懺悔の清い水に依つて清くなる事が出來るのである、之れに就いて面白い例がある、彌闍王が天竺の那先比丘に向つて善い事をすれば善い果報

があるとすれば强いて佛法を信ずるに及ばないではないかと問ふた、すると其答が面白い、小さな石でも海に投げれば沈んで仕舞うけれども大きな石でも船に載せれば沈まぬではないか、此處が佛教の理窟である、信仰の力と云ふおほきな船に乘れば浮ぶことが出來るので有ります、因果の說明に就いては澤山ありますが、先づ之れ位にしてさて、靈魂問題です、我々の心は移り替つて行つて夜になると睡る、睡るが心は存續する、死ぬる時には大いなる睡眠であります、我々が毎日眠るのは小なる死であると云ふことが解れば靈魂問題が分るだろうと思ひます、話がいろ〳〵の方面に渉りてお解り難かつたでせうが餘り長くなりますから、他日題を改めてお話をすることに致して今日はこれで措きます。

【七】靈魂問題や死後のことはこれで盡きたのではない、別に「死の研究」といふ講演を參照して下さい。

九　佛教と衛生

佛教と衛生に就て話せよといふことであるが、私は醫術や衛生の學には暗いから專門家も御いてになる此席で御話するのは困難ですが、併し昔から佛教の方には五明といふて、第一には內明、これは教理の方で今日の語でいへば哲學科學、其次には聲明とて音樂修辭のこと、第四は工巧明といふて、これは美術工藝、第五が醫方明といふて醫術のことで、此の五つは印度の五科目であつたのですから醫術のことも佛教の中にはあるのですが、私は今はそれらにのみよらず、又それを離れず、諸君と共に長壽延命のことを話さうと思ふのです。

昔、秦の始皇帝や漢の武帝の時代には、不老不死の藥を求むるとて無駄骨を折つたことがあるが、凡そ生ある者は死ありて、決して不死なぞといふ事の出來るものではないが、心や身の保ち方で、延命長壽は出來ない事

は無い、西軒客談と云ふ書物に

歴代の方士皆な不死の薬ありといふて時の君を惑はす、既にして薬を練つて成らず、或は薬を服せしめて却て其死を速にするもの多し、其後、金源氏の末、道士に丘處機といふものあり、蒙古國王の聘に應ず國王問ふ、何の長生の薬あると、對へていふ。衛生の道あつて長生の薬なしと傑然として群せずといふべし云々

と、ある、まことに此丘處機といふ人のいふた通りに衛生の道はあるが、長生の薬といふものが別にあるのでは無い、即ち此衛生といふ事が、長壽延命の源であるが、これにも二つある。

一は身の衛生、　二は心の衛生

で、身の衛生の方は誰れでも氣が附くが、心の衛生といふ方は疎かになつて居る、併し人間といふものは身だけで生きて居るのでは無い、[一]心と身との二つが合つて出來て居るので、此二つは決して別々に離るべきものではない、昔の學者は心と身とを別々のものゝやうに考へて、心は神より

[一] 身心不二のことは通佛教の原理參照

受け得たもので、身はこれが働きを妨げる牢獄のやうなものだと心得て居つたが、科學の進歩し哲學の發達した今日では此身を離れて別に心があるといふ事も許さず心と身とはもと〳〵一つのもので、身に病氣があれば直に心が面白くなく、心に心配があれば身が惡くなるといふやうに此二つは別つ事の出來るものではない。されば眞に身體の壽命を延さうとするには唯だ身體ばかりの事を考へて精神の事を忘れてはならぬ、併し又精神の事ばかり考へて身體の方を忘れても眞の長壽が得らるべきでは無い、佛教には之れを色心不二といふて、色といふのは目に見るべき有形の身體と、目に見られない無形の心とは二つでないといふて居る、既に色心が不二であるから其の一方にあつて長壽の望まるゝものでないから、[二]身の衛生をするのには心の衛生が必要、心の衛生は身の衛生が必要で西洋の諺にも健全なる思想は健全なる身體に宿るとある如く、身と心と兩方からお話をせねばならぬが身の方の事は世間にいろいろ書いたものもあるからそれはザッとお話をして主として心の衛生の方を語ら

[二] 古人に三養生の說がある、心の養生、身の養生、身代(即ち家産)の養生で此三つは循環して居る、心が惡くなると身が惡くなる、身が惡くなると身代が惡くなる、身代が惡くなると心が惡くなる、心が惡くなると身が惡くなるといふ風で三の養生は共に必要だ。

うと思ふのです。

佛教は心の事ばかりいふて身の事を疎末にするものぢやと思ふて居る人がある、今いふ通り色心不二の教て心の事も云ふが、身の事も疎かにするものではない佛教醫經には病を得るの十線といふものを并べて衛生に注意するものは此十を避けねばならぬとある、それは、

一、久坐　である、久しく坐つて居る事は悪い、適度に運動せねばならぬ、運動は人の生命、これを怠つて長命を保つ事の出來るものでは無い、

二、不節食　で食物の分量を考へずに無闇に食ふのは矢張り病を得るの線である。實際長壽者の經驗談を聞くと誰でも暴飲暴食の人は無い。

三、多憂慮　あまり多く心配をするのは病を得るの線となるものであるから常に精神を愉快に持たねばならぬ、この事は後に心の衛生の話をする時に說く。

四、疲極　過度の運動はこれ又病を得るの線であるから之れを妨ぐには適度の睡眠といふ事を怠つてはならぬ。

五、多淫　淫慾其度を過すの害ある事は申すまではない、支那に昔年九十にして童顔の道士があつて蒲傳正といふ人が、汝は如何にして斯くの如く長年なるかと問ふた時に長年の術他無し、色慾を絶つ事にありといふた事がある、色慾は長壽を害するものである。

六、多瞋　これは無闇に腹を立て肝癪を起す事で心の方に屬する。

七、忍大便　大便を辛棒すること。

八、忍小便　小便を辛棒すること。

九、制上風　欠伸を辛棒すること。

十、制下風　は下から出る風を制する事。

で又僧祇律の中には横死の九因とて持つて生れた壽命を保たずして死ぬに九つの原因があるといふ事てあるそれは。

一、饒益にあらざる食と知りて貪り食ふ。

二、食を量とす。

三、內に未だ消化せずして更に食ふ。
四、強て咽下す。
五、已に消化して出てんとするを強て制す。
六、食病に適せず。
七、病に隨て藥量せず。
八、服藥を怠る。
九、智慧無くして心を調ふる能はず。

でこれは心の方にかゝるのであるが、以上の九因、先に擧げた十條は皆な長壽を害すのである。是れを今日の衞生から云ふと、猶逸のヨルデイ氏に衞生十ケ條といふのがある。それは

一、清潔なる空氣の所に住め。
二、運動を怠るなかれ。
三、飮食を節せよ。
四、皮膚を清潔にせよ。

五、衣服を適度にせよ。
六、健康に適する住所。
七、空氣、食物に注意して流行病を防げ。
八、規則正しく仕事せよ。
九、適當なる休息。
十、心を愉快ならしめよ。

とあつて大體に於て變つた事では無い、これを要するに身體の衞生は適當なる飮食、適當なる運動、適當なる睡眠の三に過ぎたるはない、身體の保全の食物にある事はいふまでも無いが、又これほど身體を害するものはない、されば食物に就ては、

一、吾人の身體の用を爲し、滋養をなすは食したるものにあらずして消化したるものなるを思ひ、徐ろに食事を爲して充分に咀嚼することを忘れてはならぬ、これに就ては日常口中を漱ぎて齒を清める事を忘れてはならぬ、元來口中を洗滌する楊枝といふものは、もと佛敎僧侶から傳はつ

たもので、梵語でタンタクといひ、齒木と云ふ義である。

二、食物の分量を身體の運動と比例せしめて過食せざるやうに注意し、飽かざるを以て止るがよい。

三、食事の時間を一定して不規則なる飲食をしないのも長壽の一大條件で、佛が僧侶へ食事の時間を定め、非時の食を禁せられたのも、其爲である。

四、運動に就ては坐禪を主とする禪宗でさへも、經行として面前七尺の處を見て規則正しく歩む事を法とするので、決してボツチンと坐つて居るばかりが坐禪ではない、行も亦禪、坐も亦禪である、フリドリッヒ大王のいふた語、

つく〳〵人の身體を見るに自然は人を坐する學者として作つたものでは無い寧ろ飛脚屋として作つたものである。

といふことがある人の身體の半分は足である、足は歩くためのもので、歩くのは運動が第一である。少くとも一日一時間以上戸外にあつて運動する事を怠つてはならぬ。

今一つ適當なる睡眠、これは身心の休養て、此間に失ひたる活力を回復するものであるから何人も六時間以上八時間以下の睡眠がなければ長壽を保つ事は出來ない。

今一つは淫慾を節するので、其の害は今いふまでも無い、野客叢書に面白い話がある。昔、或る人が道を行くと三人の老爺が連れ立つて各百餘歳と見えるに丈夫な姿で行くのに過つて何を以てそんなに長壽かと聞くと初の老人がいふに我が家の妻醜きが故なりと答へ次ぎのは唯だ腹中を量りて食を用ゐたりといひ、終りのは、夜寢るに首を覆はず、頭熱の生せざる事を要とせりといふたといふ事である。これも亦長壽法として味ふべき詞である。

先づ身の衛生の方はこれ位ゐにして、左に『用心抄』に擧ぐの所の養生の歌を擧げて、それから心の衛生に移る事にする。

食はたいよく和らげて暖かに

酒とてもよはぬほどには薬にも増す
　たらはぬほどは薬にも増す
飽き満ちてすなはち臥せば腰いたみ
　心をのべて氣はかよふなり
納涼も又冬ごもりあたためて
　過ぐればやがて病おこれり
ひゆるとて枕の方に置く炬燵
　いかさま腹に瘢瘕やいで來ん
辨へぬ老の長風呂汗たりて
　すき間の風は頭痛にぞなる
のみ薬たのみとかけて何事も
　風いりぬれば目くちひきつる
薬をばかねて手柄に見辨へ
　愼まざればその甲斐もなし

心の衛生は精神の平和を保つより善きはない、精神の平和を守るには憂慮をなくするに限るとの事は已に病を得る十線にも横死の九因にもある通りで、これを方今の生理學に見れば、人が心配する時には身體内の小血管緊縮し、全身の皮膚は冷却して蒼々となりて身内の血液は其蒸發を害せられて、内部に積集し脈搏は濇り心臟は塞り、消化の作用は中絶して筋肉は麻痺を生じ、全身に戰慄を來し、呼吸は逼迫して、心身沈鬱するを免れぬのであるから、先づ此憂慮を止めて精神を平和にせねばならぬ、これはもと〳〵血液が上氣するのが本であるから、常に精神を氣海丹田に下して無念無想の境に入るの修養をせねばならぬ。白隱禪師の夜船閑話には「至人は常に心氣をして下に充たしむ、心氣下に充つる時は七凶内に動くことなく四邪又外より窺ふ事能はず、營衛充ち心神健かなり、五氣に薬餌の甘酸を知らず身終に鍼灸の痛痒を受けず、肝泥は常に心氣をして上に恣にす、上に恣にするときは左寸の火、右寸の金を尅して五官縮り疲

それをたのみにたのむべきなり

〔三〕夜船閑話は佛教の衛生と見てもよいから此段の話説をするには一讀して貰ひたい

六親苦み恨む云々と云ひて人氣をして、下に充たしむるの要を說き、長壽の法は精神の內に守るにありといふてある、蓋し坐禪は又長壽の法で、又いふ、精神內に守らば病何れより來らむ、且つその內に守るの要、元氣として一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛孔、一毫ばかりも缺陷の處ならしめんを要す、これ生を養ふ至要なる事と知るべし、彭祖が曰く我神道氣の法、當さに深く密室を鎖ざし牀を案じ席を暖め、枕の高さ二寸半、正身仰臥し、瞑目して心氣を胸膈の中に閉ざし鴻毛を以て鼻上につけ、動かざること三百息を經て耳聞く處無く、目見る所なし、かくの如くなるときは寒暑も侵す事能はず、蜂蠆も毒すること能はず壽三百六十歲これ眞人に近かし」。とこれは心を收めるの法で、身體を橫臥し三百息を數へるので、更らに蘇內輸が必神修養の法を示していふ。

已に飢ゑて方に食し、まだ飽かずして先づ止む、散步逍遙して務めて腹を眞からしめ、腹の空なる時に當て靜室に入り端坐默然して、出入の息を數へ、一息より數へて十に到り、十より數へて百に至り百より數へて放ち去て千に到て、此身は然して此心寂然たる事虛眞に等し。

とこれらは皆な心をして平靜ならしむる法で、平田篤胤が父より傳へられたる法といふは、

實以てこれは無病長壽の奇術たる事疑ひなきことである、其仕やうは、毎夜寢所に入りて未だ眠就かぬ所に仰向いて、兩脚を揃へて强く踏み延し、總身の元氣を胸の邊から、氣海丹田の穴及び腰脚、足の裏までに充たしめて、他の妄想をさらりと止めて指を折り、息を數る事百息にして、其踏みしめたる力を緩め、暫くあつて又斯くの如く大抵毎夜この術を行ふ事四五度程づゝ修すること、毎月七日宛すれば、元氣總身に充滿し、腹中の積塊も皆解けるなり、如何なる良藥も此術を越すものなし云々

とこれは皆な心の衛生としたのであるが、[四]更らに解易き二三を擧げれば、

(一)足る事を知れ　精神の平和を破るの第一は足る事を知らぬからで、あゝも爲たいかうも爲たいと上を見れば足らぬことばかりて心は

[四] 精神的衛生の方は上來しば〳〵他の題下で說いてあるから此には解說を略してある、參照して下さい。

常に煩悶の情に驅られて不平に滿ち、安き事はないさすれば心を安んずるの法も亦足る事を知るにある。

(二)希望の光あれ　唯だ足る事を知るだけては消極的の引込み思案になる、如何なる困難があつても、前途に希望さへあれば、さしたる苦痛は感せないものだ、冬枯れの淋しい時節の裏に、寒風駘蕩なる時節がある、悲みの裏には喜びがあり、喜びの裏には亦悲みがないとは云へぬ、如何につらい悲しいことがあつても其前途に望みをかけて居れば、これを耐え忍ぶ事が出來るのであり、又發達進歩も計ることが出來るのであるから希望を忘れてはならぬ、しかし、それは若い中の事、老人は前途がないから希望がないといふ人があるかも知れぬがそれは此の世の中を現在のみに見るからで、死んでから後にも其報ひは決して消えるものでないと未來の光明を眺めて心を慰藉せねばならぬ、ビスマルクは獨逸の宰相で隨分攻撃を受けた人であるが、余が此の攻撃の中に心を慰めてゆくのは未來の信仰があるからだといふことである、人に信仰があつて現在の苦腦を脫する事ができる。

(三)無益に心を勞する勿れ　人間の世の中は因果の理法に支配せられて物事といふものはなるやうにしかならないものである、それを心配したからとて何の効も無い、何の効も無いことに心を勞して衞生を害するは愚の極ではないか、昔、後漢の郭林宗といふ人が道を歩いて居ると甕を舁いて行く男が紐が切れて其甕の破れたのを振り向きもせずに行つたのを見て、何故おまへは振りむいて見んかと云ふと、其男が振りむいて見たからとて破れた甕の治るでもありませぬといふそれに大に感心したといふことである、伊達政宗は大閤より貰つた茶碗を手より落して割つた時にハツと思つたのを自ら悔いて、奥州五十四郡の大守とも云はるゝ此の政宗が僅か一つの茶碗を割つて心を動かすとは何事ぞと反省したといふ話もある、つまらぬ事に心配するよりは、先づ困難を其來らざるに防ぎ、來りし困難に